

---

# 短編集

かわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集

### 【Nコード】

N3880R

### 【作者名】

かわ

### 【あらすじ】

サイトやブログに上げていた単品作品です。ボーイズラブ指定するほどではありませんが、ほんのり香る作品がございます。苦手な方はご注意ください。

光 (シリアス/病院) (前書き)

とある事故で視力を失った少年の苦悩。この作品はすべて想像で書いております。作品の都合上、実際とは異なることもあるかと思いますがご了承ください。

## 光（シリアス／病院）

「生きていないのと死んでるのは全然違うものなんだよ」  
クスクスと笑いながらその声は言った。

「息もしてないし動かない、でも確かに存在したって証があるのが死。動けるのに動かない、何もしないで誰の記憶にも残らない。ただ息をしてるだけの忘れられた存在になるのが生きていないってこと」

確かにその定義からすると今の俺は生きていないと言えるかもしれない。けれども俺は渾身の力でふざけるな、と怒鳴りつけたのだ。

半年前、俺はとある事故に遭って失明した。

それはとても大きな事故だったらしく、死者も多数出したという。その中で光を失ったとはいえ助かった俺は幸運といえるのだろう。

しかし俺にとっては死んだ方がマシだった。

俺を残して逝った両親は莫大な財産を持っており、その相続人にはあるがまだ未成年の俺の後見人という立場を巡って親戚中が醜い争いを始めた。父の生前からの顧問弁護士とやらが仲介に入って決められた顔も碌に知らないような新しいカゾクとやらは、俺を病院に縛り付けたまま、俺の財産とやらで好き勝手しているらしい。

けれどそんなことはどうでもよかった。重要なのは眼だ。

何故よりによって、耳でも喉でも脚でもなく眼なんだ。

事故後初めて意識を取り戻し、医師から聞かされた事実には俺は打ちひしがれた。この眼は、もう一生光を見ることはないのだと。角膜移植という手もあるにはあるが、ドナー待ちの患者が数多くいるためいつになるかもわからない、と。

それを聞いたとき、俺は喚いた。感謝されて然るべきであろう医師を罵倒した。声の限り叫び、やがて喉が熱を孕む頃には絶望をおぼえた。

涙は出なかった。もつと大事な別の何か止めどもなく流れ出て行く気がした。

それからは全てに無関心で過ごした。

声を出すことも食事をとることもせず、ただ呆と時間が過ぎるのに任せた。

体の方はリハビリをすれば再び動くらしい。そんなものどうでもいいと思った。

これまで寝る以外の全ての時間を絵に注ぎ込んできた。いや、寝ている時でさえ創作意欲は衰えなかった。現実に見た光景、夢で見る完璧なまでに理想的な情景、それら全てが俺をキャンバスに向かわせた。

幼い頃から数々の賞を総なめにし、俺の将来は約束されたも同然だった。周囲も俺も俺の行く末を輝かしいものと疑わなかった。なのに！

そんな思考の泥沼に陥ったとき、その声の主は訪れた。

「君が哀れな元神童？」

”元神童”

そうか、俺はもう、過去の者なのか。

その言葉に反発するほどの気力が俺にはなかった。俯いたまま何の反応も返されないことにじれたのか、声の主は更に言葉を紡いで俺に向かつて浴びせ始めた。

「世間てのは冷たいよね。あれだけもて囃してた対象が使えないとなるとすぐに次の獲物を探し出したよ。ああ、もう知っているのかな、眼は見えなくても聴力には問題ないんだものね」

そんなものは、知らない。知る必要もない。

そう、心の中では思っているのに、どこからか頭をもたげる何かがあった。

「その子もさあ、可哀相だよ。君の代わりに担ぎ出されてあまつさえ子供の頃の君の再来だとか、それ以上の才能だとか言われてる

んだよ？そんな風に言ったら、将来君みたくこうやって事故にでも遭えとかいわれてる気にならない？だいいち」

随分とねじくれた見解を聞きつつ、俺は別のことで頭がいっぱいになった。

俺の再来…再来だって？

冗談じゃない、俺は百年に一人居るか居ないかの逸材だといわれてきたんだ。その俺以上の才能だって！？

馬鹿を言うものじゃない、そんな事があつてたまるものか！

ぐつぐつと煮えたぎる思考に、けれどその声はまるで魔法のように冷たい氷解を打ち込んだ。

「まだ未発達な子供を無理矢理一つの道に縛り付けて、それがどんな悲惨な末路を辿るのか考えてもいないんだよね」

「…どういう、意味だ」

思わず喉が震えた。久方ぶりに出した声は掠れて微かに震えていた。それは俺の内情をよく表していて、本当に頼りなく響く。

「だって今の君がそうでしょ」

嘲りと蔑みを多分に含んだ声。やっと反応を返されたことに満足した子供のような無邪気さは、無邪気ゆえに確実なダメージを容赦なく叩き込む。

「一つしか道が示されなかったからそれに必死でしがみつく。だから周囲もより追い詰める。本人たちは気付かないけどね。でもその唯一の道を取り上げられれば、もう他の道は見えなくなってしまってるんだよ。他のどんな可能性も価値がないと決め付けて、見ようとすらないんだ」

バツカみたい。

隠しようもないほど侮蔑を滲ませた言葉。それはそのまま俺への侮蔑だった。

怒りに脈拍が速くなる。視力を失い、役立たずとなった筈の眼球の裏が酷く熱い。お前に、何がわかる。俺がどれだけこの道にかけてきたのか知らないくせに、お前なんか意見される筋合いなんて

塵ほどもない。

大声で罵倒してやりたかったが、それより早く再び紡がれた言葉に俺の言葉はかき消された。

「君を見てるとイライラするよ。折角リハビリすれば動かせる手足があるのに、そうしない。君はただ我儘を言ってるだけなんだってちゃんと気付いてるの？」

「なん…っ」

「大体さあ」

自分の限界ぐらい、もう見えてたんだろ？

一拍おいて放たれた言葉に、一瞬にして凍りついた。

”ゲンカイ”

それは、最も拒絶していた言葉だった。

近年、俺はスランプに悩まされていた。

創作意欲自体が減退したのではない。いつも眼裏に浮かぶそれらは筆舌に尽くしがたいほど美しい情景で、俺は必死になって追うが、まるであざ笑うかのように掴む端から崩れ去っていった。どんなに追っても、記憶に残った微かな残影すら俺の手には戻らなかった。

それは現実の光景を追うときも同様で、以前は何も思わずに描いていたものさえ形にすることができなくなっていった。

俺は焦った。毎日毎日寝る時間すら惜しんでカンバスに向かった。けれど出来上がったものといえば、到底絵とは呼べない絵具の末路だけだった。

そんな俺を見かねて、気分転換にと両親に連れて行かれた出先であの事故に遭った。

広大な自然公園を歩いた後乗り込んだ大型の観光バスに、居眠り運転をしていた5トトラックが減速なしで突っ込んできたのだ。

二階の一番後ろの席にいた俺は、救出されたとき両親の腕にくる

まれていたそうだ。その両親の顔は厚く包帯が巻かれていて、遂に出棺のときを迎えても見ることは叶わなかった。

何故俺がそんな不幸にばかり見舞われなければならぬんだ。俺は神童で、絵を描くためだけに生まれてきて、周りの羨望を一身に浴びるべき人間なのに。

「君は恵まれているんだよ。それに気付いてないっていうのが君が最大級の馬鹿だって証明できるくらいにね」

俺の懊悩をよそに飄々とした口調が憎かった。役目を果たさずただそこにあるだけの眼で、声の主がいるであろう箇所を力の限り睨んだ。もし叶うのならこの先にいるであろう人物を焼き殺したいという思いを込めて、全身全霊で憎悪した。

けれども俺のそんな思いを一笑に付し、奴は笑い混じりにこう言ったのだ。

「反論なんて受け付けないよ。でもそうだな、君が自力で僕のところにとり着けたなら聞いてあげないこともない。ささやかだけど、ご褒美もあげようか。けどどうせ無駄だろうね。このままだと生きてもいないうちに君は死んじゃうだろうから」

それから俺は猛然とリハビリを始めた。

急激に動くのはよくないと制止する医師の忠告にも耳を貸さずにひたすら脚に動くよう命じ続けた。

それでもすぐに上がってしまう息に辟易して、食事もたくさんとるよう心がけ体力を取り戻そうと励んだ。

何の前触れもなく、猛然とリハビリを始めた俺の姿は、これまでの俺の無気力さを知っている医師たちにはさぞや奇異に映っただろう。

けれど怒りに突き動かされる俺には他人の眼を気にする余裕はなかった。

今までずっと他人の眼や、与えられる評価に気をすり減らしていたんだ。過去の人物としてしか俺を認識しない他人の視線など、も

はや気にする理由は見つからなかった。

こうして眼を見張る勢いで回復していく俺は、とうとう壁から離れても歩けるほどにまでなった。

無論、眼が見えないために何かにつかまって自分の歩いている位置を確かめながらの歩みとなったが、それを支えとして必要とはしなくなった。

そうしてやっとあの声の主を探そうと行動を開始する頃、ある転機が訪れた。

「君にね、是非自分の目をあげたいという子が現れてね。本来なら色々と制約があるところなんだが、本人たつての希望とのもので特例を認められたんだよ」

リハビリのおかげで手術にも耐えられるだけの体力もあり、早々に移植のための手術が行われた。

そしてめでたく退院の運びとなった日、俺は主治医にひとつの言伝を渡された。

西棟三階、1035号室にて待つ。

素っ気無くそれだけが書かれた紙切れ。けれどそこで誰が待っているのか俺にはわかった。

主治医の診察室を出て階段に向かう。

一段、二段と脚を上げ、足裏に硬いコンクリートの感触を確かめながらゆっくりと登っていく。

リハビリを始めた頃はこんな簡単な動作さえままならず、すぐに脚の感覚が追えなくなって転んでしまった。

その度に元来の負けず嫌いな気性が、あの声の主の言葉が再び立ち上がる原動力となって俺を支えた。

決して楽だったとはいえないリハビリを乗り越え、ようやく歩けるようになった俺は気付かされた。もう、何年もずっと忘れていた、

自分自身の意思で何かをやりぬきたいという気持ち。

始めは好きで描いていた絵を褒められるのがただ嬉しかった。もっともつと褒められたい。自分を見てもらいたい。それがいつからか絵は他人に媚びるための道具でしかなくなった。

その道具なくして、自分の価値を見出せなくなっていくた。そんな狭い世界に閉じこもった俺を駆り立てたのは彼だ。

もしかしてあの時彼は、このどうしようもないしがらみから俺を救おうとしてくれていたのだろうか…

引き戸になった扉を開け、午後の陽射しが照らす部屋へゆつくりと入る。三台並べられたベッドのうち、一番窓に近いものを目指す。一步二歩、三歩。そうして進むうちカーテンに仕切られていたベツドの住人が見えてくる。

そこには背もたれに寄りかかり、驚くほど華奢な少年が鎮座していた。

右目に包帯を巻きつけたその少年は微笑を浮かべて俺を迎えた。

「やあ。今の気分はどう？」

かつて聞いたことのある声。

前と変わらず、あけすけな態度と口調で話しかけてくる男にしては少し高い声。その声の主が今俺の目の前にいる。

下半身不随。あの事故で彼もまた彼にとって大切だろうものを失ったのだと主治医は語った。

彼には両親も彼を引き取る親戚もない。まさに天涯孤独となつたのだそうだ。

そんな俺の同類を、俺は怒って怒鳴るでも感謝するでもなく、不思議と落ち着いた心地で見下ろす。

「何？まだ何かふてくされてるの？」

しょうがないなあ、と笑い混じりに零す彼に、俺はいいやと短く返したあとにこう続けた。

「俺と、一緒に来ないか？」

柔らかな日差しが照らす中で、大きな眼を更に大きく丸める様をつぶさに見据える。  
そして

永い永い沈黙の末彼は一言、是、とだけ答えた。

光 (シリアス/病院) (後書き)

(2006/5/16)

## 幸福の盲目（幼馴染／アルコール）（前書き）

何不自由なく過ごしてきた吾澄<sup>アズミ</sup>。突然全てを失ってから今までの独  
白文。アルコール依存による後遺症などの症状は、創作です。

## 幸福の盲目（幼馴染／アルコール）

昔の俺の、なんと傲慢だったことだろう。

何の努力も無く全てを手に入れてきた俺は、世界が思い通りになることが当たり前だと思いついていた。

少々の障害はあれど、最終的に思い通りにならなかったものは記憶になかった。金も友人も遊び相手も。全てが向こうから寄ってきて、俺は有頂天になっていたんだ。

世界は俺のもので、俺以外の王者を認めることは無いと、根拠も無く確信すら抱いてすらいた。

けれど栄華はずっとは続かない。

たった一つ。けれど莫大な引力を持つ一つを失ってしまえば、当たり前にあつた全てが波が引くように離れて行った。

世界が、俺を拒絶したように感じた。

全てを失った俺が求めたのは逃避だった。

水を飲むように、全身で浴びるように酒を飲んだ。朝も昼も夜も、意識が混濁してこのまま目を醒まさないかもしれないと思えるほどにひたすら飲み続けた。

けれど、そんな時必ずそれを邪魔しに来る奴がいた。

当時の俺にとって奴は、ただ俺を苛む邪魔者としか映らず、昔から見慣れていたはずの顔はまるで般若のそれに見えた。

姿を見せる度に喧しく声を上げて俺の手からグラスを奪い取っていく所業は、正に般若そのものに感じた。その理不尽にしか感じられなかった所業に全力で抵抗を試みるも、体力の差は歴然で最後はいつも簡単に床に押さえつけられてしまう。

正常な判断は出来ないくせに、そういった屈辱は自分でも嫌になるくらい鮮明に覚えていた。それを忘れるために更に酒をあおって

は、また止められる。そんな悪循環の中に俺はいた。

その日もいつもと同じように次から次へとボトルを開けていた。この頃はもう体が酒に慣れすぎていて、ちよつとやそつとの量では満足できなくなっていた。けれどいつもと違う感覚が俺を包んでいた。

それが何か霞んだ頭では考えてもわからない。わからないものは考えても無駄だ。

そう結論付けてグラスに液体を注ぎ入れた。入れた、と思った。手にしたはずのボトルは俺の足元で中身を垂れ流しながら転がって揺れている。何故そうなったのかよくわからなかったが、転がったボトルを取ろうと屈んだとき、ボトルだけでなく視界の全てが揺れ始めた。

薄汚れたフローリング、ボトルへと伸ばした手、面倒でカーテンを開けていない薄暗い室内。辛うじて天井に差し込んだ毒々しいネオン光で、今が夜なのだとわかった。どうせなら最後に見るのは柔らかな朝日なら良かった、そう思って重くなった瞼を下ろした。

沈んでいく意識の中、どこかから澱んだ空気を押し流す風を感じた気がした。

鉛のように重い手足はまるで動かない。

瞼も口も死んだ貝のように閉じて開かない。

それでも皮膚は冷たく降りかかる飛礫を感じた。時折熱い雫が顔に落ちてきた。

それが何故かとても俺の好奇心をくすぐった。また、瞼の上に熱を感じる。意識を凝らしてみると今度は頬に、次いで口元に熱を感じた。何度も何度も。

その内俺はその熱に全身が包み込まれているとわかった。

暖かくて心地よいその熱は、とても懐かしい気持ち呼び起こす。それが何か確かめようと手を伸ばすのに、どうしても掴む寸前で

靄がかかってしまう。

でもどうしても諦めたくなくて、なりふり構わず手を伸ばして足掻き続けた。

そして突然、伸ばした手が熱に包まれた。

「吾澄」

開け放した扉の外からの呼び声に、ゆっくりと振り返る。

「入ってくればいいのに」

「また酒を飲んでるんだつたら止めに入るけどな」

からかうように軽く笑って言うてくる奴に、水の入ったグラスをかざして見せる。

「何か用だったんじゃないのか？」

「ん、ああ。寛いどころ悪いが、ちょっと手を借りたくてな。

…今、いいか？」

答える代わりに立ち上がって扉へ向かう。

手を伸ばしても少し足りない距離で俺は軽くバランスを崩した。

長く酒に蝕まれた体には、それを断つた今でも受けた影響が抜けきれないでいる。

倒れかけた体が脇に差し込まれた力強い片腕に支えられ、抱え込むようにもう片方の手が腰へと回される。

耳元で奴の溜息が零れる。呆れているのか安堵したのか、はたまた別の感情か。

腕を回されたまま、支えられて歩き出す。

全て失ったと思っていた。けれど、失ったと思っていたものは元々俺のものではなかった。初めに離れていったものに魅せられて寄ってきていただけなのだと思い付いた。

俺は何も失っていないから。この何物にも代え難い存在はずっと傍にいたのだから。



幸禍の盲目（幼馴染／アルコール）（後書き）

（2006／7／5）

朔(コメディ/学園物?) (前書き)

他人を惹き付けてしまう体質の柳と、何事にも興味を示さないカサネ。

## 朔（コメディ／学園物？）

厭が応にも、他人を惹きつけて止まない。そんな人種は確かにいる。

誘蛾灯のように、天を巡る太陽のように、己の意思とは関係なく他人を巻き込んで放さない。そういう奴はきつと、磁場を細胞レベルで組み込まれてしまっているんだ。

磁場に囚われ、捉えられたことにすら気づかない羽虫なんてそれらにとっては何も価値が無い。何故ならそれらにとって羽虫は、自身の生活にずかずかと土足で上がりこんでくる害虫でしかないからだ。

他の磁場保持者にとってみれば異論がある発言かもしれないが、俺にとっしてみればこれが真実。

だからこそ俺は、俺に引き寄せられることのない存在を求めて止まない。

私立鷺昂学院は緩やかだが長い坂の上にある。

住宅街の中に建ち、駅からも五分とかならない立地は通学には好条件といえなくもないが、その全てが坂を登る時間となれば少々難がつく。偏差値は上の下、その上校風にも何の特徴も無く近辺には同レベルの公立校があるとすれば、自然と人の足は遠ざかるのが常だ。それでもこの学院へ入学するべく努力する学生が絶えないのは、偏にこの学院の生徒会に所属して箔をつけるために他ならない。鷺昂学院生徒会とは一流大学、ひいては一流企業への進出するための最有力の切符になるのだと実しやかに囁かれていた。

そんな周囲の野望に満ちたある種混沌とした空気の中、何の野心もなさそうに試験会場へと吸い込まれてゆく影があった。

歩くことすらダルそうな影は、その場の目を余すことなくひきつ

けた。寝癖のついた焦茶の髪、不機嫌そうな口元、見るからにやる気が無いというように丸められた背中、そんな中でそこだけ不自然に強く光る眼差し。

その不安定な、けれどどこか心を捕らえて放さない雰囲気を持つ少年は、周囲に目もくれずにひたすらダルそうに歩いていた。

少年が通った痕には、慌てて手放していた競争心を取り戻す学生で溢れていた。この学院に入るため、そして再びあの少年を見るために試験に臨む気迫に、試験監督官たちは背中に冷や汗をかいて試験終了時刻を待ち望んでいたのだった。

入学から三ヶ月。絶えず纏わりつく視線にうんざりしていた柳は、向こう一ヶ月間この煩わしい視線から開放されることを心から喜んでいた。

周囲に煩わされるのは今に始まったことではない。物心がつき、周りへ目を向けられる年頃から既にこの状況は始まっていた。好意、悪意、羨望。その他、特に名前すら付けられないほど些細な注意向けられることには未だに慣れない。これからも慣れないだろうし、そもそも慣れるつもりも無いのだ。

柳自身、視線に気付いた当初は色々と画策し、どうにかできないかと奔走したり頭を悩ませたりもした。けれどもどれだけ努力をしても変わらない状況にいつしか諦めと妥協を覚えた。

人の興味を否応なく惹いてしまうのは体質なのだから仕方がない。だからといっていちいちそれに構ってはいはストレスが溜まる一方だ。それならば、それら全てを無視してしまえ、といった具合だ。

幼い頃からの悩みに、そう結論付けたのはつい最近のことで、それを身に染込ませるには未だ時間がかかるだろう。

そんな中で大勢の人間が集まる終業式などは、柳にとっては害にしかない行事である。早々に教室を抜け出し、やや熱気のコモる視聴覚室へと忍び込んだ。本当は屋上へ行くこうとしたが、先客がちらほらと見えたため撤退してきたのだ。

誰もいない空間に満足して、窓辺へと移動する。カラカラと硝子をずらせば意外にも爽やかな風が入ってきて涼をもたらす。その涼しさに口元を緩め、近くの長椅子へと体を横たえた。

「こんなノビノビすんの、どれくらいぶりかな」

バイト先でも学院でも人の気配に煩わされているため、落ち着くことができない。

一人住まいで生活費を稼がねばならないために、唯一安心できる家にいられるのは眠るときくらいだ。それも夏休みの間はほんの少しではあるが緩和できると思うと柳の胸は躍った。

一人になれた安堵からか、普段の疲れが出たためか、風音にまぎれて柳の寝息が聞こえる。それは暫くして外から生徒たちの喧騒が届き、やがてはそれすらなくなつた後も聞こえ続けていた。

「ふえつくしっ」

柳は自分の盛大なくしゃみで目が覚めた。

辺りは既に暗く、天辺には月が煌々と輝いていた。時計を見れば午後九時を指している。

「ヤベ！バイト…」

と焦つたのは一瞬。どうせ今から行つても働くのは一時間にも満たない時間。今更遅刻の連絡を入れても仕様が無いだろう。どうせ明日もシフトは入っているし、風邪を引いたとでもいえば何とかなるだろう。夜風に吹かれていたため風邪はあながち間違いともいえないさそうだ。

そう判断して今日はこのまま帰ろうと、窓を閉めて視聴覚室を後にした。

教室へ寄って鞆に荷物を詰める。ついでに机の上に置かれた通知表も詰める。毎度ながら見せる相手がいないのがもつたいないほどの評価が並んでいたが、柳にとっては価値など無いものだったのでぐしゃぐしゃにして突っ込んだ。

誰の視線も感じなければ、意外に居心地の良い教室に小さく驚き

つつ廊下へ出る。と、目の前が突然白くなった。

「…学生？こんな時間に何をしてるんだ」

つかつかと近づいてくる足音の主を見ようと目を眇めて前を見る。強い光に僅かに慣れた瞳は相手が青っぽい色のシャツを着ていることしかわからなかった。

けれどそれで充分だ。この時間この状況から察するに相手は警備のものだろう。別段後ろ暗いことがあるでもない、素直に理由を述べれば少々小言を頂戴するだろうが何とかなるだろう。

そう、小言ぐらいはなんでもないことだ。柳が堪えねばならないのは誰かの視線に晒されなければならぬことだ。

「ちよつと、寝過ごして…」

この後なんと言え一番早く開放されるだろうか。

柳は少しでも相手の視線から逃れるために俯き、ひたすらそのことだけを考えた。

「へえ。何でもいいから早く帰れよ」

「……え？」

あれこれと考え込んでいたため反応が遅れる。

「だから早く帰れって言ったんだよ」

言っが早いか守衛は踵を返していて柳を見ていない。

こんな、ものなのだろうか。

あまりにもあっさりした受け答えに呆然とする柳の耳に

「ああ、昇降口はもう締まってるから守衛室のドアから出てけよ」

戸締り面倒だからそこの窓から出てったりするなよー、とのんびりした声が届いたきり、あとは遠ざかっていく足音しか聞こえなかった。

生まれてこの方こんなにあっさりとした会話は初めてだった。そのことに彼へ僅かな好感を抱いたが、これから先会う事は無いだろう。

柳も家へ帰ろうと出口へ向かおうとする。しかしそこで、目的地が学院のどこにあるのか知らないことに気付いた。

この3ヶ月間、学院内のさまざまな場所へと赴いていたが、それは人気の無い場所を捜し歩いた末行き着いたのであって、人の気配のある教室類、職員棟、ましてや守衛室などそこにあるのか見当すらつかない。となれば、先ほどの彼に場所を訊くのが一番だ。

しかし、と柳は躊躇する。多少彼を好意的に思ってはいても、長年染み付いた自分へと向けられる視線に対する嫌悪感は根深く、柳の方から誰かに話しかけることは極力避けてしまふのだ。

暫く考えた後、柳は自力で出口を探し出すことに決めた。校内は広いが無限に続くわけでもなしに、目星をつけて探せばすぐに見つかるだろうと、階段を下つて行つた。

暗く長い廊下に漏れ出す光が見える。

件の守衛室はあそこか、と柳は疲れた足を引き摺って光へと近づいていく。

あれから悠に二時間が経過している。予想以上に広い校内と、見慣れていたはずの場所が暗闇によって見覚えの無い場所のように見せられたため、結局校内を余すところなく探索することになったのが原因だ。

山の上に建つ学院の夜は思いのほか寒く、温かい飲み物を求めて自動販売機の探索を優先したことも影響している。苦勞の末に見つけたそれには今の柳には殺人的な冷たさに思える液体しか置かれていなかったため、正に骨折り損のくたびれもうけというヤツだ。

そんなこんなで冷えた体を抱えたまま漸くここへとたどり着いた。ぐずぐずせずにさっさと帰ろうと半ば早足になると、疲れと冷えに冒された足は見事に纏れて冷たい廊下へと倒れた。

受身を取りそこねたために強かに打つた顔を覆って悶絶している柳の頭上から、不意に声が降ってくる。

「キミ、まだいたの」

顔を上げればそこには先ほどであった彼が、困惑と呆れと驚きの混ざつたような、なんとも言いがたい顔でこちらを見ていた。

あからさまに面倒くさいと言わんばかりに手渡されたカップを冷えた手で包み込むと、漸く柳は安堵した。指先にじわりとした熱をもたらずそれは、けれども口にするると驚くほどにぬるかった。

「コレ、ぬるいんだけど」

「お子様には丁度いいだろ」

そう言っただけで伸びてきた手に擦れて赤くなった鼻を掴まされると柳も二の句が告げなくなり、大人しくカップをすすする。

「それ飲んだらさっさと帰れよ」

ソファに寝転んだ体を起こしてもせず言い放つ様に、柳は好奇心をくすぐられる。自分に関心を持たない彼だからこそ会話をしてみたい。今はそっぽを向いてしまった顔をこちらへ向けさせてみたいと、子供のような純粹さで悪戯心を起こしたので。

「あんたいくつ？」

「……………」

「あんまり老けて見えないけど童顔なの？それとも見たまんまの歳なのか？」

「……………」

「そんなに面倒くさがりなのになんで守衛なんてやってるの？」

「……………グウ」

初めて返った応えに苦笑しつつ空になったカップをテーブルに置き、静かに立ち上がって背中近づく。

「早く帰れよ」

「寝てるんじゃないか？」

「誰かさんがいるせいで寝られないもんで」

「じゃあ、一つでいいから質問に答えてくれたら帰るよ」

笑い含みにそう言つとちらりと肩越しに向けられた視線に、にんまりと笑って見せた。

暫くの沈黙の後、いかにも大儀そうに起き上がり、けれども何も話し出そうとしない彼に柳は要求が受諾されたものと理解した。

そのことに更に笑みを深め、さてどんな質問をしようかと考える。柳へと視線を向けさせたくて言っただけの言葉ではあるが、折角のチャンスだ。どうせならちゃんと身のある質問をしようと考えた。

「あと十秒以内に言わないと答ええないから」

「えっ?」

じゅーう、きゅーうと早くもカウントダウンを始める守衛に柳は焦る。

「ちよつと、それじゃ俺帰らないけどいいの?」

「制限以内に訊けばいいだけだ。帰らないなら追い出すからな。ろーく」

「お、横暴!ケチ介!」

「俺はそんな名前じゃありません。さーん」

「じゃあ、名前なんていうんだよ!」

やけで叫んだ柳の言葉にぴたりと数え声はやむ。とっさに口をついてしまったが、あながち悪く無い質問だと柳は内心で自画自賛した。

「:名前なんて知って何が楽しいんだかね」

ぶつぶつ言いながらもサネモトカサネだ、と名乗る。どういう字を書くのかと訊くと誠実の実に元気はつらつの元で、あとは平仮名だと教えてくれた。柳は説明している口調とその内容のアンバランスさに思わず笑ってしまった。

すると無然とした顔で、

「どうせ女みたいな名前だよ」

とどこか拗ねたように呟かれた。どうやらコンプレックスなのだと更に声に出して笑う柳の襟首がむんずと掴まれる。

「質問には答えたぞ。とつとと帰んなさい学生」

「なにすん、降ろせてなあ!」

細身に見える体のどこにそんな力があるんだと訊きたくなるほどにビクともしない腕に引き摺られ、そのままドアを開けて外へと放

り出される。そしてすかさず閉められた扉のバタンと言う音が、夜の校舎に響く。

犬猫のように扱われ、少々自尊心を傷つけられてドンドンと扉をたたき、文句を言う。二、三分ほどそうしていたが一向に反応を示さない相手と、ジンジン痛む拳に柳はその場を後にした。

「実元かさね…。カサネさんね」

寝過ごしてバイトを無断欠勤して、拳句は校舎内で出口を求め散々彷徨って、けれども初めて自分に興味を持たなかった相手を見つけた。

そのことが無性に嬉しく思えて、日のあるうちに見たのなら不審に思われるだろう笑みを口元に浮かべつつ駅までの道を軽やかに降っていった。

何故か他人を惹き付けてやまない柳と何に関しても無気力なカサネの、これが出会いの夜。

静寂の戻った学院の校舎にはどこからともなく盛大なくしゃみの音が響き渡った。

朔(コメディ/学園物?) (後書き)

(2006/8/14)

流るる時の水（シリアス／過去／交互視点）（前書き）

少年成長記、の青年版。

## 流るる時の水（シリアス／過去／交互視点）

不意に駆られた激情に慣れることはなかった。

普段は大人しく極力人の目に留まらぬように振る舞って自分の中の獣を慎重に隠してきた。

それ以外のどんな方法も、俺はまだ何一つ知らないでいた。

あるとき、

魔法の言葉を手に入れた。

これがあれば俺は獣を隠し通せる。獣を護ることができる。

獣を傷つけないことが俺の急務だ。何故なら獣の傷は全てそのまま俺に降りかかるのだから。

魔法の呪文を手に入れた。

それがあれば、俺の中の獣は眠り続けて表に出ない。

それから世界はとてものがらんとした世界へと変貌した。

俺はきつと、人の中にあつてこそ意味のあるものなのだと思う。

逆に人から離れた俺には何の意義もないのだとも言える。

他人と衝突するほど強い自我はなく、ただ流されるままに日々を費やすことに今は何の抵抗もない。付き合いだけは人一倍長かった性格は対極にでもあるような友人には、結局彼が故郷を離れるその時になつても理解されることはなくて、本気で怒ったとき特有の皮肉な冷たい笑みが最後の記憶だ。

それは今思い出してもなんと苦しい記憶だ。

彼は知らなかったのだ。

自分を曝け出し、むき出しになつて無防備のまま相手にぶつけても、それを相手に受け入れてもらえる確率はどんなに頑張つても半

分しかないことを。

受け入れられなかったとき、それまでの行程で受けた傷が決して癒えずに残ることを。残ってしまう怖さを。

彼は知らなかった。

知ることができなかったのだ。

何故なら彼は

とても強い、人間だったから。

意識を飛ばしていた数瞬、場違いな、でも根強く寄生した記憶が甦っていたらしい。

俺の目の前で本人は魅力的だと思っているのだろう表情でこちらを見つめている男に、俺も口元を緩ませた表情を返す。

人間にテレパシーの能力が備わっていないくて良かった。そんなものがあつたら俺のような人間には人の中で生きていくことは叶わなかっただろうから。

自分を見せず、他人を拒絶し、同時に他人の中にいることを望んでしまうこの矛盾はなんなのだろう。

人恋しいのとは何かが違う。

他人の体温も優しさも、俺は求めてはいない。

期待して裏切られることには、もう出会いたくない。

と、そこまで考えて思い至る。

もう、ということとは過去にそれを経験したということだ。

一体いつ、俺はそんな過去を経たというのか。

思考は中途半端なまま、上辺だけしか綺麗さの窺えない笑みを貼り付けた男によって投げ出された。

暗闇の中、誰かが泣いている声が届く。

ああ、またあの夢だ。

そう判断して、俺はゆっくりと据えていた腰を浮かす。

夢。そうわかっていても、それを何度も繰り返していることもまた繰り返していくだろうことも、何の救いにもならないことをも理解してる。

それでもそうしないではいられないってこと、あるだろ。

意味はないかもしれないけど、価値はある。形にならなくても俺の中だけでそれがあれば充分だ。

泣いている声は子供のものだ。

正直言つて俺はガキが好きじゃあない。無駄にでかくてトーンの高い声でぎゃあぎゃあ喚くのなんてオンナのヒステリーそっくりだ。俺はマゾでもサドでもないからそんなもん聞いても嬉しくなんかない。むしろ不快だ。夜中に大騒ぎしてる酔っ払いやら大喧嘩かましてる近所迷惑な奴らといい勝負だ。いつそ公害指定されるべきだとすら思うね。

ああ、でも。

この声だけは何度聞いても不快じゃない。

実際耳にしてるわけでもないのに、脳が勝手に頭痛まで引き起こしてくれるほどガンガン俺の神経をすり減らしてくるのに、だ。

とすると俺は立派なマゾなのか…？

いや、人間開けちゃいけない扉のみつつやよつつあるもんだ。決して逃避じゃない。自衛手段の一つだ、うん。

泣いているのはいつもと同じ、幼馴染の小さい頃の姿だ。

多分7歳ごろ。小学校に上がるか上がらないかの頃合だと思って

る。なんでそんな推測が成り立つかって、それは至極簡単なことだ。これを最後に、あいつは泣くことをしなくなった。

他人に期待することをしなくなったんだ。体中の水分が全部なくなるんじゃないかって心配になって、終いにはよくそんなに出てくるもんだと呆れるくらい。でもそれだけこいつにとつて大きなことだったんだってガキだった俺にも嫌でもわかるくらい切実な涙だった。

俺は最初はいつもみたいに叱り付けたんだ。男だったら簡単に泣くなつて言いながら、その実つられて俺まで泣き出すのが怖かったから。情けない俺なんて見せたくなくて、でも堪えきれなくなりそうでいつも以上にキツク叱り付けた。

それでも泣きやまないそいつを前にして、俺は正直戸惑った。いつもなら俺が怒ると、俺に嫌われたくないあいつは必死になつて泣きやもうとして失敗してた。それを見ていつも変な顔だと言つて笑つてやつて、あいつが笑い返して、それでケリがついていた。でもその時はその兆しすら見えなくて、困った俺は一番しちやいけないことをした。

あいつから逃げ出した。  
しかも、最低な捨て台詞を残して、あいつを置き去りにして。

次に会つたときのあいつはいつもと変わらないように見えて、その実確実に違うものになつてた。うまい言葉が今でも見つからないけど、あれは、壊れてしまったんだと思う。陳腐な言葉だけど、心が。

壊れたものを中に詰め込んだ器が無理矢理人の形をとつてるような脆さがそれからのあいつには常にあった。

俺が逃げたせいだとは認めたくなかった。

でも、人形みたいに人の言うことばかりはいはいと聞いて、自分の意思を置いてきぼりにしてるそいつを放っておくことはできな

った。いつも傍にいて何度もそれじゃ駄目だと言って聞かせたが、つぎはぎの隙間だらけの器からは風のように通り過ぎてただ流されるだけだった。

その様は以前の幼馴染と姿が同じだけの紛い物にしか見えなかった。

成長して自分のしたことを振り返るようになってから、俺はようやくとあの時投げた言葉があいつを砕く決定打となったのだろう事実を認めた。

そうして今度は罪の重さに耐えかねて、その証から逃げ出すために、再び過ちを犯した。

あいつは今、何をしているだろうか。

逃げた先の殺伐とした、あいつのいない世界でいつも思っていた。今でもあの町にいるのだろうか。

俺を恨んでいるだろうか。

それとも

忘れて、しまっただろうか。

向き合うことができなくて、ひたすら俺を押し付けた末に俺はあいつから逃げた。

その先には、何もないというのに。

あれから数年。

あいつは、まだあの町で

人形のまま、日々を暮らしているのだろうか

そういえばいつからこの男とこうしたことを続けてきたのだろうか。

思い返してみても細かいことは覚えていなかった。ただ、夜を一緒に過ごした後、チエックアウトを済ませてからカフェに入って一緒に朝ごはんを食べて。そんなサイクルをそれなりに長く続けている気がする。

今日入ったカフェは時間のせいかわどく混んでいて、道路に面した壁際の席しか空いていなかった。

いつもは店の奥まった席を選んで座る俺は視界の端が明るいのも、たくさん其他人が通り過ぎるときに作る影が横切るのにも落ち着かなさを覚えて、普段はもつと冷ましてからゆっくり飲むコーヒーを一気に飲んで早々に店を出た。

少し低い音のドアベルが、俺の後ですぐに鳴る。同時に何歩も離れていなかった俺の腕を捕らえた。

男はいつもの思い込み甚だしい顔に、昨夜の余韻を滲ませた滑稽な色を浮かべて耳打ちをしてくる。そういえば次の約束をまだしていなかった。男の指定した日時を了承し、体に巻きついた腕が離れるのを待っていたら何かに強く引っ張られ、そのまま別の何かが俺を抱きこんだ。

俺は目を見張って驚いた。

何故なら、今閉じられた瞼の二重のラインまで見分けられるほど間近にあった男の顔が、醜く歪んで大きくよるめいた様を見てしまったのだから。

けれど、

「あんだ、今こいつに何したんだ……」

そんな驚きは、真後ろから聞こえた声に掻き消された。

凧いだ鏡の湖面がわずかに震える。

ふらつきながら俺の後ろにいる存在に鼻息荒く突っかかっている、

いつにない険悪な表情と声。

いつも忌避していた他人のその感情の波ですら今の俺には届かなかった。

だって嘘だ。

彼はここにはいないのだ。

俺は、彼が去っていくのをこの目で見届けたんだから。

それでも

彼の声を聞き間違えることはできなかった。

「なんで…」

都会のそれよりも随分背の低いビルとビルの間の日影は、この時期のこの時間、長くいるのにはとても寒い。

それでも、この手の震えはそんな寒さの介入のせいではないとはつきり自覚できる。

男と乱闘、というよりも一方的に彼が男を殴りつけていて、カフェの店員が呼んだらしいパトカーの音に追われるようにしてここへ駆け込んだ。小さな町のことだ。きっと今頃は暇を持って余した町の人間に格好の餌食となっっているだろう。

「早く、帰った方がいいよ。みんな騒いでるだろうからいつ、鷹也に気付くかもしれない。…昔と、全然変わってないから、余計」

俯きながらそう言い終わると、あとは自分の心臓が動くやけに早い音だけが耳に聞こえる。

旋毛の辺りに痛いほど強い視線が注がれているのがなんとなくわかる。

その視線が告げている。顔を上げる、目を見て話せ、と。

それがわかってても、俺は彼を視界に入れることができない。

だって、もし俺の汚れが彼を捉えた視線から感染してしまったら？

彼の視線に。失望の念を垣間見てしまったら…？

他人に期待なんかしない。

受け入れることも受け入れられることも何も望んだりなんかしない。

けれど、彼は他人じゃない。

彼は、彼以外の何かじゃない。

だから、俺は彼を…彼に

「帰りたいよ、俺だって」

心臓が、一際大きく脈を打つ。

咄嗟に彼を見上げてしまう。

駄目なのに。

彼を汚してしまうのに。

彼に。

縋ってしまいそうになる。

心が悲鳴を上げそうだ。

「帰って来いよ霞依」

滲んだ声につられる顔を見られたくなくて霞依の腕をぐいと引く。

いつの間にかこんなに細くなったんだよ。

ちゃんと食ってんのかよ。

いつか、そう遠くないうちにその不安定な心と一緒に器まで壊れてしまうとか、そんなのは嫌だからな。

こんないくらかも力を入れてないのにぎしりと軋む細くて脆い体を俺は知らない。

帰って来い霞依。

心ごと。壊れかけの体ごと俺のところに戻って来い。  
今度は逃げないから。今度こそ向き合っから。  
だから。

「帰って来い、霞依。俺のカスイを返してくれ」

溶けた雫は、一体どちらが先だっただろうか

雫は呼び水となって

眠りの淵を揺らす。

流るる時の水（シリアス／過去／交互視点）（後書き）

（2007/2/11）

宵ヶ淵（シリアス／迷信／ファンタジー）（前書き）

あることをきっ かけに自分の考えに疑問を持った男の取った行動。

宵ヶ淵（シリアス／迷信／ファンタジー）

美しいもの。

それは切り裂くもの。

醜きもの。

それは足掻くもの。

けれどそれは同時に、

とても尊きもの

一歩先には雨が降っていた。

雨は空の涙だ。

悲しみをすべて吸い上げ含んだソレを、憎悪を込めて別つたものへと返す。

東雲の空はその刹那を以って輝き、私のこの穢れを浄化してはくれないだろうか。

清水のそのせせらぎはこの身をその本流に溶かしてはくれないのだろうか。

世俗に染まりきり、もはやもとの色すら垣間見ることすらもできないこの身を引き摺って、私は只管歩を進めた。けれどその幅は小さく、滴り落ちる自らのものではない朱が呪縛のように纏いついては私の歩みを阻んでいる。

これはきつと呪いなのだ。

潔く在れ。強くその身を誇り、何者にも恥じぬその伸びやかなきらめきを翳らすことなく捧げ奉れと。そのただけに生まれ、これまで存在し続けてきた私が役目を果たす寸前になって皆を裏切った

ための、その。

永く植えつけられたその志はいつからか私自身から滲み出たそれに摩り替わり、あの黄昏の刻まで揺らくことなく私を支配していた。そこでまみえたかの君の言葉を受けるまで、私はそれを当たり前のように受け入れていた矛盾を知らずにいた。けれどそれは仕様のないことだったと言えないだろうか。他の思惑が忍び入る隙間もないほどに統一された思想。それは深くそこに根付き続けて皆を支配していた。皆、支配されていることにすら気付かずになっていたのだ。

けれど私は反旗をあげた。この身を捧げんと思っていたそれへ、刃の応酬で以つてこの身に迎え入れたのだ。

今尚それに悔いはないが、しかし皆の元を離れねばならぬのは身を切るよりも辛いことだった。それでもその惑いを振り切ってきたのは一重にあの言葉があったから。かの君より発せられた言はそれほど私の本能を刺激した。

かの君はこう仰られた。この風習は間違っている、これではお前が良いように利用されて終わるだけ、お前が消えた後も彼らはこのうとお前から奪った権利に群がり続けるだけなのだ、と。

皆のためならそんなことなど厭わない、はじめはそう返していた言葉も目を重ねても一向に変わることはないかの君の言を聞くうちに、本当にそうだろうかと思ひ始めた。根深く私に息衝いたそれはそれから数日経っても数十日経っても拭い去ることはできなかつたけれど、わからないならそれでいいのだと、救いの手を伸べてくださったかの君は助言すらも私へ与えてくださった。

その助言により、惑いが拭われたのはまさに行動を起こす寸前のことであつた。

かの君は…

かの君はどこにおわすだろう。

あの方が救つてくださったこの魂を、それならばあの方の傍であの方のために使いたい。

かの君は、どこに

自らのものではない、けれど自らのそれもが交じり合った朱がゴブリと一度大きく溢れ、倒れた私により深く入り込んだ無粋な柄を伝って地へと染みこんで行った。

「ザ、ザ、と砂を踏む音が骸へ近づく。」

生者であろうことを疑わせるその真白い腕は骸、いや、骸へとうつろう軀へと伸ばされ、触れる。

クツと片方だけを引き上げられたその笑みは眇められた眼と合間つてその秀麗な顔かんはせを不思議と完成へと導いているかのようだった。

人目には既に黄泉路へと旅立ったかに見える若者をその腕に抱き、真白き隠者は立ち上がる。

「横槍を入れて、何をするかと思えば」

隠者の後方より投げられた声音には呆れよりもからかいが言葉を彩って届く。それにゆらりと振り返る口元には変わらぬ笑み。けれど確実に孕む色を変えた歪みが浮かんでいる。

「あんな小物に譲るには惜しかろう？」

嘲るような、誇るような、それとも別の何かを含む言葉には聞く者を震わせる艶が輝く。

それは獲物を手に収めた堪えきれない喜悅か、はたまたこれより手にする更なる愉悅への底知れぬ期待か……。どちらにせよ込められた隠者の高揚はあまりに強く、上等な神経などすぐに腐らせてしまう猛毒を孕んでいた。

「ここに先がないと知れたら、その坊やはどう喚くかね」

「どう喚こうと栓なきこと」

「ま、そうだろうがな」

話はこれまでとばかりに歩みだした隠者は、けれど瞬きのうちにその場より朝霧のように掻き消える。

「栓ないこと、ではあるが…ねえ」

ぼつりと零されたその言の葉の先を紡ぐ者も、寸瞬のうちに霧の

如く姿を消した。

曙色に染め射られた山間の村には僅かに朱色の煙が混じってくゆり、やがてはそれも大気に消えた。

宵ヶ淵（シリアス／迷信／ファンタジー）（後書き）

（2007/5/1）

壁の中（シリアス／ファンタジー／グロテスク）（前書き）

突然四方を壁に囲まれた部屋へ連れて行かれた少女の回想と観察。

## 壁の中（シリアス／ファンタジー／グロテスク）

生まれてからずっと暮らしてきた住処にこんな場所があると知ったのは、ここへつれて来られたときが初めてだった。

私が元居た部屋はここよりもたくさんの色が散りばめられていた。生まれたときから当たり前にあったのでその様に不満を持つことはなかったけれど、こうして何も無い質素な部屋に慣れてみるとこちらの方が落ち着ける心地がした。

この部屋の外では何が起こっているのか、時折そんなことを考えながら、けれど知ったところで私には何の関係も影響も及ぼすものではないそれへの興味は簡単にうつろった。暑くもなく、また寒くもない。防音がきいているのか漏れてくる音もない。これで光もなければここはなんと呼ばれる場所だっただろうか。幸いと言うか、光だけは溢れていてむしろ少量の闇が欲しいとすら思うほどだった。そういえば、ここへ来てから闇と言えるものを見たことがない。四方を真白く染められた壁に囲まれているから闇が入り込む隙間もないのだろうか。

夜の闇さえ付け入ることがないせいかな、時間の感覚も曖昧だった。ここへ来てまだ一度も食事の時間にはなっていないので、多分一日も経っていないのだろうか。

することもなく、ただのっぺりした壁を見つめるしかない私は、普段なら思い出すことすら稀な父の姿を脳裏に描く。鮮明に思い浮かべることができないのは私の記憶力がないせいじゃない。頻繁に来るわけではない父が、いつも違う格好で、けれど共通してごちゃごちゃとした服を着てくるせいだ。そのたくさんの装飾品も一つの凹凸がとても細かくて、とてもじゃないけど全部の様を覚えていられない。暇つぶしに記憶を手繰ってそれらの細部を思い出してみようと思ったりもしたが、暇つぶしよりもつまらなかったのですぐにやめた。

ここへ来てからいろいろなものが変わった。その一つが窓だ。元居た部屋でもやはりやることは何一つとしてなかったけれど、暇を持って余すことがなかったのはただ一つ繰りぬかれた窓があったからだ。そこから見える空の色は一瞬たりとも同じ色をしてはおらず、その忙しなさに呆れつつ、それでも目を逸らす気は起こらなかった。視線を少し下げた先には小さな石造りの建物が無数にあつて、その隙間を縫うように動いていた小さなヒトガタたちの動きも忙しなくて、それを見ているのもやはり飽きなかった。だからそれを見ることのできないここでは、ただ変わりばえのない壁を見つめるしかなくて、とても退屈だった。

けれど変わらないこともある。部屋に訪れる人が殆ど居ないことだ。殆ど、と言うか、まだ一度も訪れる人を見たことはないけれど、長時間誰の訪れもない緩慢な時間が流れることだけは以前と変わらない。

元居た部屋に訪れてくる人として食事を置きに来るだけでさっさと出て行ってしまっていた。その際ちらりと覗き見る表情にはいつも気持ちのよくない皺がよっていた。私はそれを見るのがとても嫌だった。父が来たときは表面はなんでもないので、かけられる言葉や何気ない立ち居振る舞いがとても気に触ったものだ。

私と接触のある人はこの二人が全てだった。だから人とはそういう気持ちのよくないものなのだと思っていた。それならば窓から見えるあの小さなヒトガタを見ている方がずっと気持ちよかった。あれらは私に何をしてくれるわけでもなかったから、それがとても気に入っていた。

けれどそうだ。私をここへ連れてきたのはあの二人ではなく、見たこともない人々だった。ヒトガタと同じような服装の者、父ほどではないが、私より余程華美な服装をした者、その入り乱れた群だった。

そこまで思い出し、これはよい暇つぶしになると思って細部までを思い出してみようと、嬉々としてその時の様子を思い浮かべた。彼

らは、そう。彼らは最初、私を見て驚いていた。扉が突然大きく開かれた瞬間は私も驚いた。見知らぬ誰かの登場に驚いたわけではない。階段を踏む複数の足音が聞こえていたので誰かがここへ来ようとしているのは悟っていた。その複数が扉を開ける瞬間まで纏っていた気持ちの悪い雰囲気、私を見止めた瞬間に純粹な驚きにとつて変わられてしまったことに驚いたのだ。私は初めて気持ちのよくない感情以外のものを私に見せてくれた、長い赤い鉄の塊を手にした彼らを一目で気に入って、にこりと笑みを浮かべて迎えた。

それから…ええと、何があつたのだからよく思い出せないが。…そう、見慣れた石壁が作る、見慣れない狭い通路を通つてどういう理由かはわからないままここへ入れられたのだ。そして今に繋がる。窓のない部屋に早々に慣れ、目の前の壁だけを只管に見つめる。それだけの単調な時間。けれど、最初に見ていたのは壁ではなかった気がする。部屋も、光ではなくて、いまや懐かしさを覚える闇に満たされていたような。

そうだ。初めは一人、闇の中で手探りで見つけた小さな寝台に蹲っていた。その時はそれまで感じたことがなかった色々な感覚がとも辛くて、ずっと膝を抱えて蹲っていた。けれど、ある時気づけばその感覚が一切なくなっていて、同時に部屋に光が溢れていたのだ。そのことにとっても安堵して、ようやく今まで見えなかった部屋の全貌を見回すことができた。そこで初めて一人だと思っていたこの部屋に、私以外の存在を見つけた。

彼女は私と同じような服装をして同じ寝台の上に横になっていた。背の高さや髪の色も似ていた。けれど体つきは私よりも大分貧相なものだった。棒のように細い手首や尖った顎は私に似ていなくもないが、私のほうがやはり肉付きが良かった。彼女は目を閉じて眠っているようで、私は彼女の目が開くのを今か今かと楽しみにして彼女を見つめ続けた。人は好きではないと思っていたが、扉を開けた彼らのように気持ちのよくない感情以外を向けてくれる相手が居るのなら、人をそれほど嫌いとは思わなかった。彼女がどちらの反

応をするか少々の不安はよぎったが、一度覚えた期待と言う感覚がそれを軽々と凌駕した。

私は彼女の動きを一つとして見落とすまいとじっと見つめた。硬く閉じた瞼も、かさかさの唇も、元々細かった手首がもつと細くなつて行く様もただただ見守つて目覚めの瞬間を待ち続けた。

しかし期待した瞬間はなかなか訪れず、悲しい夢でも見ているのか彼女は全身で泣き出した。緩やか過ぎる泣き方に私は慌てて彼女の頬を撫でた。でもその手は彼女に拒絶され、触れることすら許してもらえなかった。仕方なく、いつしか枯れ枝のようになってしまった彼女の手を頬の代わりに撫でようとすれば、触れる寸前にぐにやりと形を変えてしまつて、もはやそれを手と言つていいのかもわからなくなつてしまつた。私は更に慌てたが、肉の涙を流す彼女に為す術もなかった。それでもどうにかしようとおれこれしてみたが、全て彼女には拒絶されてしまつた。もしかして見ているのは悲しい夢ではなくて、とても楽しい夢で、だから邪魔をするなど言われているのだろうか。途方に暮れていると、やがて彼女は泣くのをやめて代わりにとても細くてかたい殻を被つていた。

そこまで私に触られるのは嫌だつたのだろうかと思うと、とても悲しかった。だからこれ以上嫌がられないために彼女が自然に目を覚ますまで、何者からも彼女の眠りを妨げられないように守り続けた。

とても長い時間が過ぎた気がする。けれど食事を運んでくるはず人は来ないから、まだ一日も経っていないのだろう。今日はとても一日が長く感じる。ここへ来て色々なことが変わったけれど、一日の長さも変わってしまったのだろうか。

私は今までにないほど強く明日が来るのを待ち焦がれた。朝になればきつと彼女も目を覚ましてくれるのに、いつまで経つても一日が終わらない。

一人じゃない独りは、とても永い。



壁の中(シリアス/ファンタジー/グロテスク)(後書き)

(2007/6/26)

かわやの話(トンチ?/和風)(前書き)

昔ばなし風のちよつとホラーな、ある意味気付いてしまえば笑い話にもなる話。

## かわやの話（トンチ？／和風）

むかしむかし、ある所にかわやさんがありました。かわやさんは村でとても有名でした。その頃、かわやとは便所のことをいって、それは土にふかい穴をえつちらおつちら掘って、掘って、掘って作ったものが普通でしたから、村人はみな、かわやさんは家の中全部が便所なのだと思っているのだと思っていたのです。村人たちはかわやさんの家の前を通るたんびに、やれ早く通らなきや匂いがうつる、やれ変なにおいがするなあ、とはやし立てては晒っていたのでした。

ある日もそうやってからかってやろうと、一人の村人が笑みを抑えられない顔をこさえてかわやさんの前までやってきました。けれど、とある妙なことに気付いたのです。家中がかわやなら、そりゃあ肥しの匂いがすごいだろうに、そんなものはちつともしないので、いつも閉まっている玄関の戸の隙間に鼻をつけてみても何のにおいもしません。もしかしてかわやさんは便所やさんのことではないのかと疑問が湧いてきました。そうなると答えを知りたくて知りたくて居ても立ってもいられずに、とうとうその男はかわやさんの扉を開けた最初の村人になったのでした。

その夜。男がいつまで経っても帰ってこないことを不思議に思った女房は、男のいそうな屋台やら賭場やらをさがし歩きました。しかし男は見つかりません。村の人にきいてみても知らないよ、という返事しかかえってきませんでした。ほとほと心配になって村中をさがしまわっていた女房は、こんな時分に家を抜け出して遊んでいたいはずら小僧に会いました。女房は普段なら叱りつける小僧に、藁にもすがる気持ちで男を知らないかとたずねると、なんと小僧は男がかわやさんへ入って行くのを見たと言いました。けれど女房はそんな馬鹿なことがあるわけがない、だってあそこはくさいじゃないか、と言って小僧の言葉を信じようとはしませんでした。小僧は

ムツとして、ウソじゃない、おいらはおじさんが不思議そうな顔してかわやに入っていくのをみたんだい、と怒鳴ってどこかへ走って行ってしまいました。女房は小僧の話を信じることはできないながら、他に何の手がかりもなかったので、仕方なくかわやさんへ行ってみることにしました。

次の日、朝になつても畑に出てこない男とその女房を不思議に思つた隣の夫婦が、男たちの家へいくと、そこには晩御飯が手をつけられないまま冷えて残っているのを見つけました。あれまあとこへ行つたんだらうとそのまま帰っていきましたが、次の日も、その次の日も隣家には明かりが灯ることはありませんでした。こりゃあおかしいと思つた隣の夫婦は長老のところへ話しに行くことにしました。しかし報告で終わるはずの話はそこで聞かされた、似たような村人のいくつかの話のせいですと頭の中にこびりついて離れませんでした。似たような話は日が過ぎることにちよつとずつ増えていき、やがて村の半分の人たちがいなくなつてしまいました。

こうなると長老や村長も黙っていることはできず、たびたび話に上がるかわやさんへ訪ねて行って、直接話を聞いてこようと言うことになりました。畑仕事が終わつた幾人かの残つた村人の少しを連れて村長の一団はかわやさんへ乗り込みます。何人もが入つたままかえつてこないと言うかわやさんの戸に手をかけると、喉をゴクリと一回鳴らしてから思い切りガタンツと力いっぱい横に引きました。するとどうでしょう。かわやさんの中には目の前には見たこともない顔の人間が、帰つてこない村人の数と同じだけ座っているではありませんか。中の様子を見て、ずっと便所だらけなのだと思つていたかわやさんが、そうではなかったことに村人はようやく気付きました。

けれどそれじゃあかわやさんは何屋さんだったのか、いなくなつた村人はどこへ行つてしまったのか、村長は首を捻ります。そこへ奥からおっとりとした笑みを浮かべた、やたらと掘りの深い顔をした男が出てきていいました。

これはまた一度にたくさんのお客様が来なさった。今までだあれも来やしなかったのに最近はいっぱいお客様が来るもんだからちよつと道具が足りなくなりましてね、すこし待っていたたくことになつちまうんですが勘弁してくださいね。ああでもご安心下さい、ちやあんと新しい気に入るような素敵な皮をご用意しますから。さ、まずは空いてるところに座ってお茶でもどうぞ。

村長はぼっかり口を開けて言われたことの意味をゆっくりと飲みこんでいきます。男は皮を用意すると言った。それも新しい皮だと言った。それはつまりどういうことか……。最後の最後で答えがわからなくて悶々としている村長を置いて、男はさつさと奥へ戻つてしまいました。その代わりのように一人のこれまた見知らぬ男が村長に話しかけてきました。気心が知れた風に話かけてくる男の声に、村長は聞き覚えがありました。それは確かに、最初にいなくなつた村長とは竹馬の間柄の男の声でした。

そうしてしばらく経つて、村長、長老、その他半分の村人と、残りの半分の村人は新しい皮をかぶつたどれが誰なのか覚えきれずにまた、覚えてもすぐにまた違う顔になつてしまふ様にたいそう苦労したと言つことです。

苦労はするけどみんなでそれを楽しんでいる様子を見て、水面に映つた見慣れない顔を見つめながら長老も楽しそうにわらいます。しかし、時々ふつと気になることがあります。これだけたくさん皮をかぶっているのに、前と同じ皮を被っている人は一人たりとも見たことがありません。それだけたくさん皮を、あのかわやさんは一体どうやって用意したのだろうか。不思議ではあるけども、それをかわやさんに聞いてみたいけども、もし、それが知つてはいけないことだとしたら、今度こそ帰つてこられないのではないかと思つとどうしてもできないでいるのでした。



かわやの話)トントン? / 和風( )後書き(

( 2007 / 6 / 28 )

曖昧な話（シリアス／暗い／現代）（前書き）

告白され、一緒に出かけた街で”僕”が見たのは…

曖昧な話（シリアス／暗い／現代）

私を知り、私を思い、見止め、そして私に及びなさい。  
掴んだその手に、あなたは何を得た？

「え…？」

すれ違いざまにふわりと薫った慣れた香につられて振り返ったが、求めたものは既に行き交う様々に紛れて消えてしまった。

肩が触れたわけでも、特に目を引かれたというわけでもなかった。香りの主は本当に行き擦りの、今こうして立ち止まっている間にも幾度となく交わされている。一期一会未満の対象でしかなかった。だから本当なら興味すら抱く余地だってないはずなのに、どうして気になったのだろう。

香りに惹かれた？そんなはずない。だって、あの香りは街中で嗅ぎ分けられる類のものなんかじゃないのだから。

「どうしかした？」

肩に触れる感触に弾かれたように向き直ると、目の前にはちょっとビックリしたような間の抜けた顔があった。

ええと、誰だっけこの人…。

「落とし物でもしたの？」

そう言うのにこりと笑いかけてくる相手の名前はやはり思い出せない。当然だ、覚えようとも思っていなかったのだから。

彼は同じ学校に通う一つ上の先輩で、先週いきなり教室に現れて告白してきた人だ。

思ってもみない突然の展開に動揺はしたものの、硬直したのは一瞬で、けれど何も答えを返せず傍からは固まって見えるまま、僕はめまぐるしく頭を回転させていた。周りにこんなにいるところ

であんな事を言われた上、内容が内容だ。これでは暇な級友のいい話のネタだ。しかも相手は確か下級生にもそこそこ顔を知られている人物ときた。噂を知ろうともしない僕でも級友たちがきゃあきゃあはしゃいでいるのを否応なく見せ付けられていた。

その彼が、だ。よりにもよって、僕に告白。いつもは姦しい彼女たちから痛いほどの視線を感じる。正直勘弁して欲しかった。こんな場合、きつと受けても受けなくても結果は似たり寄ったりだろうと結論がでる。

はいともいいえとも言うわけには行かない。そうなれば僕の取る行動は一つだった。

「映画の前に買い物でも、と思ったんだけど、意外に人が多いね。早いけど食事でもしながら時間つぶそうか」

困ったような恥ずかしそうな、曖昧な照れの入った表情を向けられて、僕も得意の曖昧な笑顔を浮かべて彼を見返した。

彼が選んだ映画は人気のあるものだったらしく館内にはちらほら立ち見の人の姿もある。インパクトがあるんだろう加工画像を眼球に映しながら、僕は先ほどすれ違った香りの主のことを考えていた。視界の端にほんの少し映った髪の毛の長さから、あれは女性だろうと思う。けれどわかるのはそれだけ。顔も手も服の裾も見えてはいないのに、彼女に妙な既視感を覚えずにはいられない。一瞬鼻孔をくすぐったあの香りは、けれど香りとは呼べない。他の誰がいい香りだと言おうと、僕だけはそれを感じることはできないものだ。

せめてもう一度すれ違えたら今度こそ見過ごさないのに、そう思っているうちに館内がオレンジの明かりに照らし出された。

彼はどうやらスタッフロールまで見るタイプだったとわかったが、それもすぐに忘れてしまっただろう。所詮、その程度なんだ。僕にとっての他人とは。

だからこそ、何故すれ違っただけの彼女にこうまで思考が占領さ

れるのが自分自身不思議でならなかった。

映画館を出ると、あたりは薄い紫に濁っていた。時計を見た彼にまだ時間はあるかと訊かれて、それからカフェに入っただけ話をした。

話題は当然と云うか今ほど見終えた映画についてで、あの場面が良かった、あの場所のカメラワークに騙された、とやや興奮気味に話す彼に得意の笑みを浮かべつつ相槌を打っては次の瞬間には話の内容を忘れていった。

ただ、楽しそうに語る姿から、余程あの映画を気に入ったのだなとだけ思っただけ、その熱意になんとなく、少しだけ羨望を覚えた。

カフェを出て、最寄り駅に着くまで何とはなく話しかけてくれた。彼は、僕を自宅まで送ると申し出てくれた。断る理由は思い浮かばないが受け入れるのも迷っていたら、いつの間にか手を引かれていた。そうなれば今更断るのも気が引けて引かれるままに彼について歩いた。電車の中であれほど話をしてきた彼は、道中道を尋ねる以外に口を開くことはなかった。

駅からの帰り道、自宅付近の大きな公園に差し掛かり、促されるままに街灯の灯るそこへ足を踏み入れた。

公園とはいっても子供向けの遊具があるわけでもなく、近隣住民の散歩用の敷地が広がるここは木が生い茂っていて、小さい頃は夕暮れの影ですら恐ろしく思えたな、と思い出して少し笑った。

彼は一つのベンチまで来るとそこに僕を座らせて近くの自販機で飲み物を買って手渡してくれた。お礼を言ってキヤップをあげ、一口飲むと美味しいか、と訊かれた。

「美味しいです」

「それ、好き？」

「嫌いではないです」

「じゃあ嫌いなものは？」

「急に言われても浮かびませんよ」

意図のわからない質問にとりあえず返答していると、唐突に彼は大きな溜息をこぼした。

「俺、君を好きだって言ったよね」

「伺いました」

「付き合つて欲しいとも伝えたね」

「だからこうしているのでしょうか？」

曖昧な言葉。答えているようで、実は答えになっていない返答。そんな受け答えをするようになったのはいつからだろうか。

きつとこれと言った契機はなくて、徐々に徐々にこうなつていったんだ。これは元々持っていた僕の本質なんだろうと思つたときから、深く考えることを一層しなくなつたまま、ここまで来た。親密な付き合いをする友人も親族もないから、それで気分を悪くする人はいなかつたし、いても簡単に離れて行つた。

目の前にいる彼も、そのうち視界の外へ消えるだろうと、そう思つていたのに。

どうしてそんなに怒つたような目をして僕を見るんだろう。それならさつさと罵つてどこかへ行けばいいのに。

罵つて、この強く掴まれた手首が赤くなる前に離してくれればいいのに。

「付き合う気がないならどうして告白したときにそう言ってくれなかつたんだ……」

「そんなことありませんよ」

彼があまりに悲痛な声で搾り出すようにそう言うから思わず返した言葉は、

「但至少しても俺を好いてくれている？」

明確な答えを求める声の前に、ただの発音の羅列として風に吹かれて消えてしまった。

何も言えずにいる僕に、彼はふっと唇の片端だけを上げて嘲笑いをこぼした。

「別に好意じゃなくてもいいさ。でも君は俺を嫌ってすらくれてないだろ？全く、本当に相手にしていない。向き合ってくれていないんだ」

やや俯いた彼の髪が風にそよぐ。なのに人に吹かれてばかりの僕が今、実体のある風に吹かれてもびくりともしないのが滑稽だと、どこか隅の方で考える。

けれど風に流されて届いた香りがその全てを覆い隠した。

さくさくと軽く地を踏む音が届く頃には、彼女は僕の視界に入っていた。頂垂れた先輩の、その随分と後方にじつと立ち止まってこちらを向いている彼女の顔は、街頭の光からやや外れていて見ることはできない。それなのに、僕は一つ、漠然とした確信を持って彼女を見つめる。

「どうして、こんな思わせぶりなことなんてするんだ」

掴まれたままの手首に走る血がせき止められて、じんじんと冷たい熱さを伝えてくる。

僕の視界に入ったまま、彼女はゆっくりこちらに踏み出してくる。

ああ、やっぱり

「好きだから、君を知りたいのに」

真っ直ぐな彼の眼差しに遮られて一瞬見えなくなった彼女は、彼の肩越しに再び目にした時、ほんの数センチ先まで近付いてきていた。

女性は、僕と同じ顔のつくりで、哀し気な眼差しを僕に送っていた。

「…久しぶりだね」

「え？」

ボソリと呟いた言葉は小さすぎて近くにいた彼にすら届ききらなかったようだ。

薄く眉間にしわを寄せた彼が僕に回した腕を解いて、今度は肩を掴んで怪訝そうな視線を送ってくる。けれど僕はそれには目を向けず、一瞬にして消えてしまった彼女の残像だけを眼裏に映し出した。

「死にたくなかったんだ」

「……え？」

「あの時はまだ小さくてそうする事しかできなかつたけど、もう逃げちゃ駄目って、事なのかな」

「…何を言ってるんだ？」

「先輩、ドツペルゲンガーって本当ですかね」

「はあ…？あの、何を言ってるんだ…っ？」

「もし本当なら、僕は死んだってことになるのかな」

独り言のように呟いている僕に焦れたらしい彼は一層強く肩をつかんで、更に強い視線で僕を射抜く。

まるで睨んでいるようなその視線には、けれど戸惑っているような色が見える気がしてならない。

「聴かせてください。先輩は、僕を、どう思いますか？」

唐突に問うたせいにか、ビククリしたように間の抜けた顔をして、それでもどうにか彼は質問に応えてくれた。

「僕、なんて男の子みたいだ」

その答えに今度は僕がきょんとして、そして次には自然と笑みが零れた。

曖昧な話（シリアス／暗い／現代）（後書き）

（2007/7/24）

目目（シリィアスノファンタジー）（前書き）

ブログ短編

## 盲目（シリアス／ファンタジー）

「いけません」

そう言つて僕の手をつかんだ顔が哀しそうに顰められているのを見ても、もう僕は何の感慨も沸かなかつた。

ただ無感動に目の前の人物を見遣っている。それだけの反応しか、起こす気が起きなかつた。

けれど、そんな僕が不満だつたのか、彼は更に眉根を寄せて口を開いた。

「人は平等ではないのです」

生まれつき価値のある者がいれば、それがない者もいる。初めは持つていなくても、素質が花開いて手にする者もいる。

けれど、そんなの一握りしかないのだ。

じゃあ、それにあぶれた物はどうしたらいいつて言うのだろうか。

つかまれた手から、もう片方の自由な方の手に柄を持ち替える。そして阻まれていたことを為そうとしたら、今度はさつきよりも強く自由だつた手をもつかまれてしまった。

何をするのかと問うつもりで再び相手に目を向ける。

離せ、と喉元に仕込んでいた言葉は、けれど見たことがないほどに強い視線の前に、魂を得る前にしほんで消えてしまった。

「いいですか」

よく聴きなさい。そう言つて、更に彼は言葉を繋いだ。

「あなたは見えず知らず、会つたこともその存在を知りもしない人物の罵倒に傷つきますか？ 貴方を軽視し、蔑視している人物が貴方の言葉に重きを置いて貴方へ敬虔の念を抱くことが簡単に起こることだと思えますか？ 貴方が友と思慕っていた者からの罵声と、初め

から無意味に貴方を嫌悪していた物からの罵声の衝撃は同じですか？それはまるで重みの違うものではありませんでしたか？」  
声は尚も降って来る。

「人の価値は違うのです。同じ者でも他によって価値は全く違うのです。与えられる価値は平等ではないのです。では、貴方は何に萎縮するのです。こんなに」

手が軽くなり、代わりに伸びてきた指が頬に触れる。

親指を擦り付けられた後、軽く上向くように促されるが、僕はそれに従わなかった。

微かな嘆息が零れたのが聞こえた後、頬の指はそのままに、もう片方の手が後頭部に回されて、僕は彼の腹に顔を押し当てられてられた。目元に触れるシャツは柔らかく、じわじわと湿っていても柔らかさは損なわれなかった。

「こんなに、貴方に価値を見出している者がいるのに、貴方が傷つく必要がどこにあるのですか？誰よりも貴方を理解している私の価値は、貴方にとっても決して低い物ではないでしょう？」  
それでも。

言葉は為せず、代わりに強く彼にしがみつく。

それでも、僕はそれだけじゃ嫌なんだ。そう思う貪欲な僕が、思っ  
てしまう浅ましい僕が、何よりも嫌いだと思うのに。それでも渴望  
はやまないんだ。

しがみついた僕の手の上から彼の手が置かれる。

「それでも満足できないのなら、現状を変える努力をすればいいのです。貴方の価値をゆるぎないものになさい。…決して容易いこと  
ではなきにしろ、不可能なことではないでしょう」

それが成されるまで、私の価値だけで満足なさい。

そういつて、彼は僕を温めてくれた。

足元にカシャンと金属の落ちた音が響いた。



盲目(シリアスノファンタジー)(後書き)

(2007/12/14)

無明の光明（シリアスノトリップノファンタジー）（前書き）

丘で見上げる空が曇ったとき訪れたのは、ありえないはずの熱で。

## 無明の光明（シリアス／トリップ／ファンタジー）

いつもと同じ光を受けて目を覚ますと、いつもと同じ光景にいつもと同じようにまあさがいて、いつもと同じ一日が始まる。

晴れ渡る空。その中で一際輝く総ての源。

あまり見では目が焼かれるとみんなは心配してくれるけれど、好きなそれを見上げることは決してやめられるものではない。そんな僕を仕方ないと言う顔で、でもやはりみんな心配そうな眼差しを送ってくるので空を見るときはこの丘一番の大樹の影に座って見上げることにしている。

この丘には僕を含めたくさんの住人がいて、その誰もが下ばかり見て日々を過ごしている。けれど決してみんなが陰気だったり、意地の悪い輩だなんて思わないで欲しい。彼らはとても心が優しく、一人ぼっちでいた僕にそつと手を差し出してくれた恩人たちなのだから。そんなみんなの注意を無碍にってしまうのは申し訳ない気がしてならないのだけど、それでも僕はあの光に誘われ、気付けば足元にまあさを従え、いつもいつもあの空を見上げてしまっていた。

まあさがここへ来たのはごく最近だ。きつと迷い込んで道がわからなくなってしまったのだろうと、僕の腕の中の、足を怪我したまあさを見て、丘の住人は言った。それなら道が見つかるまで、と僕はまあさを預かることにした。足に巻いた包帯に染みができることはなく、怪我もあまり深くはなかったのだろう。良かったねと思いをこめてまあさの顎や耳の根元をなでてやると、まあさはゴロゴロと喉を鳴らして僕に応えてくれた。

空ばかり見ている僕とそれに釣られて上を見上げるまあさ、優しいが故に下ばかりみて日々を過ごす丘の住人たち。そんな僕らの視線が同じ方向を指すことは殆どない。けれど、僕の大好きな光が雲

に阻まれ、彼らの視線の先にすら影響を与えてしまったら話は別だ。時折起こるこんな日が僕にはわけもなく怖いものに思えて、たまらず膝を引き寄せ体を小さくして、耳と目をぎゅっと閉じてやわらかな光の再来を待ち続ける。

いつもと同じなら、きつと、そう長くは続かない。そう言い聞かせて震えそうになる体を、ぎゅっと抱きしめる。

僕はこんな日がとても嫌いだ。けれど、丘の住人はこの日がとても好きらしい。

光が翳った途端、みんなは小さくどよめいて、次いですぐさま嬉しげに走り出して滅多にしない外出を始める。初めてその様子を目の当たりにしたとき、僕はどうしてみんなは心細くならないのかともとても不思議に思い、みんなが帰ってきてから理由を聞いてみたけれど僕にはよくわからなかった。そんな僕を、みんなは困ったような顔で見て、そのうち僕にもわかるようになるだろう、などいくつか声をかけてくれたけれど、未だにわけのわからない恐怖の時間としか思えないままだった。

みんなが外へ出かけてしまって、この丘には僕一人だ。その事実がより一層の恐怖を齎す。ふと気付けば、いつも足元にいるはずのまあささえもがどこかへ消えてしまっている。僕はたまらなくなつて小さく、次第に大きく喉を張つてまあさと呼んだ。もしかして、みんなの足運びに流されてまた迷子になってしまったのじゃないかと思つたからだ。

僕は気持ちとは裏腹にいつもより随分軽やかに動く足を駆使して、まあさを捜し歩いた。

軽いけれど頼りにならない足取りでふらふらと辺りを捜し歩く。けれどまあさは見つからず、とうとう丘の麓にまで降りてきてしまった。あの丘へ初めて行き着いて以来きていない、来たいとすら思わなかった領域だ。

ここには、嫌な記憶しか残っていない。あの丘では忘れていられたそれが脳裏をよぎると、まあさを探すことで紛らわせられていた

頼り無さゆえの恐怖がぶり返してきた。耐え切れず戻ろうと踵を返したとき、左の手首に久しく感じる事のなかった温かな何かが触れた。そして、

遠くでまあさの鳴く声が聞こえた気がした。

ありえない。

この左手の熱。

この感触は、あつてはいけない。僕が触れていいものじゃない。どうしてか思考が行き着いたその結論に従ってか、がむしゃらに暴れ熱を振り払おうと試みるが、それは僕の望みとは逆にますます強い力でもって僕の手首に絡み付いてきた。そればかりではなく、するりと背後に回った熱源が包み込むように僕を囲ってきて、まるで離してなるかと主張するように僕の体を戒める。

そして徐々に、本当に少しずつズリ、ズリ…と僕の体をどこかへ引き摺り始めた。

いっそ、気を失ってしまえたなら。

どんなに願っても、この太刀打ちできない恐怖から僕は逃げ出すことができなかった。助けて、と思わず口をつきかけたが、果たしてそれが叶えられることなどありはしないことを、僕は嫌と言うほど知っている。

絶望に侵食された思考に、けれどももう一度、先程より近くはつきりとまあさの声が聞こえた。

そして考えるよりも先に、唇から零れたのは塞き止めていた筈の助けを請う言葉の波だった。

まあさの声が近くなる。

強く、あの独特の声で、僕を呼んでくれるのが何故だかはつきりと感じられた。

目を覚ませば、そこは光溢れる世界だった。

そのあまりの眩しさに、僕は反射的に恐怖を覚えた。

あの柔らかかった光ではなく、総てを曝け出させる強烈な光に満たされた世界に自分がいることが信じられなかった。自ら進んであの丘に行き着いたわけではなかったけれど、そこへ行くことを強く願っていたのは事実だ。だからあの全てがあいまいな緩やかな世界を目にしたときは願いが叶ったのだと、今僕がいるこの世界から抜け出せたのだと狂喜した。そして望み通りに丘へ行き着く前の記憶を、僕は自身の手で殺して捨て去った。なのに。僕はまた、地獄よりも過酷なこの現実にも身を晒さなければならぬのだろうか。

目の前が真っ暗になった気がして顔を覆った。覆おうとした。けれど自由に動くのは管に繋がれた右手だけで、左手は重石が乗ったように動かなかった。少し、腕を浮かそうとしたのが悪かったのだろうか。左腕にのしかかっていた熱の塊がぴくりと動き、ついでのそりと上体を起こしたそれと、僕はまともに目を合わせてしまった。途端、心臓が一度大きく脈打ったのがわかった。息が乱れ、目の前が歪む寸前、相手が目を見開いて驚きを表していたのを見届けた。

「み」

「うあああああああああああああああああ！！」

相手が何か言いかけたとき、堰を切ったように僕の喉からみっともない悲鳴が上がった。

大声で叫び、管に繋がれた腕や体を必死にずらして左手のそれから必死に離れようとする。けれど満足に動かない体は強く腕を引かれれば抵抗する術すら持たなかった。

あの丘の麓で感じた熱と同じだ。

それに気付いて、僕は再びがむしゃらに熱に抗った。

「まあさ！まあさどこ！助けてまあさ…っ！まあさ！！」

必死に暴れているのに、僕の手足は目の前の熱に簡単に絡め取られてしまう。それでも暴れ続けて、まあさに助けを求める。目の前の熱が何かを叫び返しているけれど、僕には聞こえない。この世界

の何も、僕は二度と聞きたくなんてない。

「助けて！まあさ…っ、まあさ助けてっ！どこにいるのまあさ…っ」  
一度零れた懇願はあとからあとから止めようもなく溢れてきて、自分のものとは思えない大きな声が、僕の中に外の音が入ってくるのを意図せず阻んでくれる。けれど小さく息をつめる音と、ついではぜたような乾いた音はどうしてか小さな衝撃を伴って克明に僕へと届いた。

「…ごめん」

予期せぬ衝撃に動きを止めた僕に、熱は小さくそう呟いて僕に回していた腕をほどいて、代わりに僕の片頬を包んだ。正面に据えられたその面立ちを、僕はよく知っているような気がする。けれどそんなはずはない。こちらのことは、丘へいく前に全て捨てたはずなのだから。見覚えがあっという間は、丘へいく前に全て捨てたはずなのだから。見覚えがあっという間は、丘へいく前に全て捨てたはずなのだから。

「まあさ…。まあさどこ？まあ」

「ごめん。痛かったんだよな…？もうあんなこと絶対にしないって約束するから」

痛い、なんて当たり前だ。まあさがいないのだから。あんなに近くにいて、僕に寄り添って懐いてくれて、なでてあげると嬉しそうに目を細めて喉を鳴らして。まあさは迷い猫だったから、もしかしてまたどこかへ迷い込んでしまったのかもしれない。どこか僕の知らない温かい場所で身を縮めて泣いているかもしれない…いや、僕の知らない場所で、僕に許してくれた全てを、僕じゃない誰かに与えているのかもしれない。

まあさの中から僕が消えてしまうかもしれない。それが、何より僕は痛い。

「許してくれなんて言わないし、許してくれなくて構わない。憎んだっていいんだ。だから深夜」

まあさの中から僕が消えてしまう。また、僕は真朝から弾き出されてしまった。

「俺を見て。名前を呼んで、深夜…！」

僕は夜。どんなに頑張っても、強く強烈なまでの光を纏う朝とは相容れることはないのかもしれない。

僕が持てるのは、柔らかく弱々しい月の光だけ。

月が好きだった。けれど、月は所詮、僕にとっては手に入らない朝の代わりに過ぎなかった。そのはず、だった。

真朝に拒絶され、あの時僕は耐え切れずに自分の中へと逃げ込んだ。

あの時は辿った逃げ道を、けれど今は近すぎて眩過ぎる熱に阻まれ、再び戻ることはできなかった。

無明の光明（シリアス／トリップ／ファンタジー）（後書き）

（2008／3／12）

半身(シリアス)(前書き)

ブログ短編

## 半身（シリアス）

俺はお前が憎かった。

ただの一度もそう言わせないまま、お前は消えた。

「……なに？」

そう言っただけこちらを向いたあいつの眉は、本人でも気付いていない程かすかに皺を寄せていた。

気付いていればきつとこちらを向かなかったはずだ。

だから、わざわざ指摘することはしない。

ただ、茶化すように

「泣いてるのかと思った」

そう、言うことだけ。

「ッは！なに言ってるのさ？寝言は口閉じて言ってよ」

「それじゃ喋れないだろう」

「聞きたくないって言ってんだってば」

眼が、堪えきれずといった風に眇められた。その途端、あ、と思う間もなく顔を背けられた。

骨ばった薄い肩は時折跳ね上がって震える。それを抑えるように強張ったままの背が酷く痛ましかった。

思わず抱きしめて、慰めて、思い切り俺の胸で泣かせてやりたくて手を伸ばす。けれどそれはあいつに届くより随分前に力をなくした。

他の誰でもない、俺にだけはあいつを慰めることはできない。

あいつも、そんなことは望んではないことを向けられた背が雄弁に語っている。

俺にはどうしてもできないこと。

でも、

俺にしか、できないこと…

「ユウ」

意識して普段より軽くあいつを呼ぶ。

すると直ぐ様振り返る泣き濡れた顔。

それがどれ程俺を苛むか、あいつにはわからないだろう。

「なんて顔してんだよ」

「…ッだつて…」

おいでと両腕を広げて見せれば泣き顔を更に歪めて飛び込んでくる。

ああ、

俺にはできないことを、お前はこんなにも容易くこなしてしまうのか。

「克イ…っ」

泣き継る佑斗を抱きしめながら、

俺の中で何かが粉々に砕ける音を、他人事のように聞いていた。

お前が憎かった。

同じ顔で

同じ声で

俺の欲しいものを平然と攫っていくお前が、涙が出るほど憎いと思っただ。

半身(シリアス)(後書き)

2008/03/13

王と傀儡王（シリアス／ファンタジー）（前書き）

乞われ、定められるままに為した結果、それを知った後とるべき行動とは何か。

## 王と傀儡王（シリアス／ファンタジー）

子供は親の背を見て育つと言う。

それはおそらく、一番身近にいる大人を指すという点で言えば間違っていないだろう。

生を受けて十数年の後、国土内のさる小さな町で奇病が蔓延した。父の命により医師団が派遣されたこともあり、原因のわからないその病もすぐに収束に向かうだろうと予測されていた。けれどその見込みが甘かったことを、当人たちは身を以って知ることとなった。最初の見込み違いはその繁殖力だった。どんな抗体にも差ほどの間をおかずに順応し、より強い脅威を伴って人々へと襲い掛かった。その速度は乾いた砂に水が染み渡るよりも尚顕著で、症例発見から翌月もたたぬうちに王都にまで魔手を伸ばした。

結果だけを言えば奇病は人口の約四分の一を飲み込んだ後、民に与えた恐怖と絶望を糧にしたかのように急速に消えていった。原因はわからず、今でも究明作業は続けられている。けれど一部では、あれは呪術師の仕業だったとか密かに開発された細菌兵器だったのだ、などと言われている。

全く以って馬鹿なことだ。それが根も葉もない噂だということは誰よりも私が知っている。

何故なら、それらの指示を出した黒幕は、この私だと言われているのだから。

奇病の猛威が振るわれた当時、私は隣国へ国交をかねた遊学に出ていた。そのために王宮まで蔓延したそれらの被害から逃れられたのは、確かに幸運だったと認めるところだ。民にとっても最後とな

ってしまった王族が若輩過ぎるとは言え、帰国した当初は天を落とさんばかりの出迎えを受けた。

その声は期待に満ちたものであり、善政を布いた父の跡目をしっかりと継ぐように私を希望のよすがとするものでもあると、根強く自覚させる声であった。

私は寄せられる期待に応えんと、難を逃れた要人たちと政を執り行った。けれど先ず対面したのは絶対的な経験不足による障害だった。

直接向けられることこそなかったが失望の念を滲ませた空気に、私こそが自らに誰よりも苛立ちを感じたと誰が否定できようか。生まれながらに課せられた重責とは言え、それを受け入れ臨んでいくことを刷り込まれて成長した私だ。誰よりも法を識り、尊び、また遵守せんと寝る暇も削って机にしがみついた。その結果が、あの噂だ。

過ちには厳格なる罰を。善行には妥当な褒章と更なる善行の要求を。

多少厳しく思える処置も全ては国のため、ひいては民のためだと自らへ諫言する者へも言って聞かせた。

けれど私への不満は高まり、私は生まれ育った王城を遠く見つめる身分へと追いやられた。

今、あの玉座に座る者は古来からの血に連なる者ではないが、それに大した感慨は何故か湧いてこない。私の中を占めるのは今はただ、何のために私はここにあらねばならぬのかと言う疑問ばかりだ。国のためにあれ。己より民に重きを置いてその身を生涯に渡り捧げる者たれ、と教わってきた私には、失敗し全てを失った私を受け止める術はどこにもなかった。

この国には緑が多い。

石を敷き詰め文明の発展を露わにした町並みより、緑多い景観を

祖父と父とが好んでいたための名残だ。街々の間には深い森が茂り、成長しすぎたそれらは深く懐に入り込んだものを容易くは手放さないほどだ。

そんな森の一つの懐中に私は居を据えている。

追われた身であり国内に留まることは危険なことではあったが、やはり生国には離れがたい引力を感じる。共に落ち延びたただ一人の家臣であり、知己でもある乳兄は難色を示したが、結局この居場所を私へ与えてくれた。

ここへ来て一度として人には会っていないが、生活をするのにはどうしても人に会い買物物をせねばならない。その役目も彼が担ってくれた。その彼が、一昨日から戻らない。

離れているとは言え町までは往復で一日とかからないはずだ。今までとてこんなにも帰りが遅くなったことはなかった。

何かあったのだろうか。

一抹の不安を感じた私は、彼を迎えにいくために一年と三月ぶりに人のひしめく土地へと赴くための準備を始めた。

果たしてここはどこなのかと、ここは本当に記憶の中の自国と同じ場所なのだろうかと、誰かに訊ねたくてならない。

家々はこんなにも朽ちていたか。人々はこんなにも淀んでいただろうか。

国が荒れたあの直後と言うのならわからないでもない。けれどこれは。ここはいわゆる下町と区分される地区だろう。確かにかつて受けた報告では問題の絶えない場所だったが、これほどではなかったはずだ。少なくとも私の元へ届けられた書類には排水や吊いの不備などは一度として目に入らなかった。

町の有様に愕然とし大儀そうに歩を進める私に目を向ける者はなく、呆と座り込む者か食物を獲りあう者ばかりだ。

引き摺るようにしていた足を止める。眼前には幼子を背負った少女が私を見上げて立っていた。

用心のためと目深にフードを被り影になった私の顔を、他意のなさそうなきよんとした瞳で覗き込んでくる。顔を隠すことへ気を回すのには、今見た惨状は私には衝撃が大きすぎた。

「あなたここいらの人？」

少し掠れた高い声に、街の外から来たとだけのろろと答える。

ふうんと詰まらなさそうに鼻を鳴らした少女に、この有様は一体どうしたことが、何があったのか、何故このような荒廃が放置されているのかを訊ねる。

するとやはり鼻を鳴らし、

「あなたごこの馬鹿者よ。そんなのお偉いさんが働かないからに決まってるじゃない」

と言つて私へずいと手を差し出した。

何かと思ひ、その手を握ってみると勢いよく叩かれて駄賃を要求された。

例によつて街へ来ることがなかった私には金品を持ち歩く習慣がない。その必要も感じなかったため、駄賃となりそうな代物は全て探し人である者が所持していた。

けれど金品以外の対価なら、ここにもある。

「少女」

小さく呼びかけ、視線を合わせるために少女の前へ膝をつく。たださえ建物の影となった場所にいたため、下から僅かに望めていた風貌がより深い影に覆われて少女からは見えなくなっているだろう。

その二つ目の影を作り出している元を、私はゆっくりと持ち上げて取り扱った。

開けた視界に先と変わらず強く、どこか皮肉気な少女の眼差しを捕らえる。

「名は？」

「代金を貰わない内はどんな質問にも答えないよ」

一瞬言われたことの意味理解しかね、ぼかんとした私はその言葉

を飲み込んだ後、思わず笑みを落としてしまった。まさか名を訊くのにすら対価を要求されるとは思いもしなかった。

「それでは私の名を対価に、お前の名を教え」

「おやめ下さい」

紡ぐ言葉は後ろから近付いてきたらしい僅かな足音の主に押し返されてしまった。

その声はここまでやってきた目的である探し人のものであった。

「あなたはご自分から窮地に立たれるおつもりか」

「しかし」

「あなたの名前なんか対価になんてならないよ」

いつになく厳しい目で私を見据えていた彼の視線が少女へ移る。

つられるように移した私の視界には、やはり鼻を鳴らさんばかりのややふてぶてしい少女の様が入り込む。

「もう知ってる奴の名前なんて対価になんてならないよ、元暴君」

少女が言葉を放った後、瞬きの内に彼が少女へ近付いた。

「どうされるおつもりですか」

投げかけられた問いは、果たして何に對してのものか。

今後の私の身の振りはもちろん何れ決めねばならない。いつまでもこうして森に巢食っているわけには行かない。国を出るか、ここにとどまり何らかの行動を起こすか。前者なら容易い。乱の直後は針の穴ほどの隙もなかった国境門は今はいくらかの綻びがあるだろう。元平定者としては如何ともしがたい事実だが、今ほどあからさまではないにしろ昔からそうだった抜け道はあったようだ。皮肉なことにこんなことにでもならなければ、きっと私は生涯その綻びに気付くことはなかっただろう。

国境門管理は国の末端に位置するとは言え、重要な責を担っている。とどのつまりそれが綻んでいるとなれば国の中核核それすらも縛れているという証拠だった。

そう結論付ける事実を齎した目の前に横たわる少女にちらりと視線を差し向けた。

少女は言った。

私が目にした惨状すら、程度の差はあれど私の在位中からそう變わりのない光景なのだ。それに私は反論をせずにはいられなかった。私は何より法を尊んだ。法とは民が、国が、国として成立するための最低限のルールなのだ。少なくともそれを蔑ろにしなければ国状は荒れはしまいと信じ、日々刑罰を厳命していたのだ。

しかし少女によればそれは国を荒廃へと導く手助けだったのだと、そう言い捨てられた。

下町に住む民は皆貧しい者ばかりだ。明日の罰より今日の飢えをしのぐことすら難しい者が多い。全うな方法では三日日保つても四日目は迎えられないのだという。だから民は法を犯すのだと。そうせざるを得ないのは私たち中枢に関わる者の責任だと、そう言って少女は意識を失った。

彼が私の手を振り払って少女を打ったのだ。

それから森の中へと戻り、長い時間を私は思考に費やしている。

正直に言おう。私は少女の話を信じたとしても、納得してやることは出来ない。

けれど同時に否定することも出来ない。

どうする。

でも、何も出来ない。

今の私には何の権利も権力もない。

窓辺に立ってこちらを変わらずに見つめ続ける彼を見返す。

窓の外には月がほんの少しの雲に欠けた輝きを放っている。月光

を受けて先程より鮮明に見えた少女の顔色が青いのは何故か。

それは少女に抱きこまれるように眠っている幼子の顔色と少女のそれを照らし合わせれば自ずと答えが見えてくる。

私は、結局何もできはしなかつたのだ。いや、しているつもりではいたが何もかもを知らなさ過ぎたのだろう。

理想も目的も何もないまま、ただ引き渡された玉座はただの椅子でしかなく決してそれに座するだけの者が王ではないのだ。それは今その座近くにある者、そして、私を見ても明らかだ。

理想だけでも道理だけでも足りない。何故なら国とは、法とは、それを望む者なくして意味はないのだろうから。

暖炉の火が消えているのを確かめ、昼間潜った戸を再び潜る。

音もなく付き従う彼を振り返って軽く口端を上げると、彼は常の上目遣いの無表情をほんの少し崩してそれに答えてくれる。

私はきつと戻ってみせよう。

私が生まれ、育ったあの土地に。けれどそれは今すぐではならぬのだ。

遮る雲を流され、露わになった月光が燦々と降り注ぎ、行く手を照らす。

王と傀儡王（シリアス／ファンタジー）（後書き）

（2008／3／13）

くしゃみ(ほのぼの)(前書き)

ブログ短編

## くしゃみ（ほのぼの）

「ふい……ツクチュンうい」

「……何その親父みたいなくしゃみ」

辛そうに鼻をグジュグジュ鳴らしている生徒その一へ向けたのは、  
気遣いの欠片も見えないそんな言葉。

赤い目と鼻で人の気も知らないで、と恨みがましく睨まれても人の  
気だから知りませんとさらっと流す。

「どうでもいいけど感染すなよ」

「…感染りませんよ」

「何で…ああ、花粉症？」

「違います」

「じゃあ何そのくしゃみ鼻詰まり目の潤みは」

間髪いれずに否定してきたのが生意気で、俺もすかさず問い返す。  
と、途端に生徒その一はぐうと唸って黙り込む。

まあ、それまで対岸の火事ではなかった症状にいざ自分が陥る  
と、事実を認めたくないという気持ちはわかる。

が、俺がコイツをからかわない理由にはならない。

我ながら大人気ないとは思いつつ、毛を逆立てた小動物のような  
そいつで思う存分遊んでやろうと口元をニヤリと笑ませる。

「ああ、ああ。そんなに鼻赤くしてたんじゃトナカイだって逃げ出  
すんじゃないか？そしたらソリ引く奴がいなくなつてサンタも子供  
もお先真っ暗だ。どうするお前、責任重大だぞ。まあでもお前が代  
わりにソリ引いてやれば問題ないか。でもなあ、くしゃみばっかし  
てて煩い代役だとガキも起きちまってやっぱりサンタは大迷惑か。

恨まれる前に早くその鼻治せよ自称健全者」

「先生こそ…ツクシユ、その変な妄想いい加減にしとかないと、ズツ、作詞した人に訴えられますよ…ツぶえツクシユンうい」

「わ、汚ねっ！おらティツシユ使えよホラ」

ぐじゅんくしゅんグツチユンとくしやみを連発する生徒その一。  
かみ過ぎたせいでいつそ哀れなほど真つ赤な鼻頭を晒すさまをみて、  
流石にこれ以上からかうのは気が引けた。

「…そういえば、三回連続のくしやみは惚れられくしやみって言う  
な」

ズピズピ鼻を鳴らしながら、生徒その一が怪訝な顔で見上げてくる。

「昔からよく言うだろ。くしやみ一回褒められて、二度目ふられて  
三に惚れられ、四度のくしやみは間抜けの風邪引き…って」

「…そうなんですか？」

「地方によって微妙に違うらしいけどな。俺の田舎じゃそういつた  
よ」

と言う間に窓から風が吹き込み、つられてか再び連続してくしや  
みの音が響く。その後に、

「先生と田舎ほど似合わない言葉ってないですよね」

なんて可愛くないことを言う生徒その一に、ニーツコリ満面の笑  
みを向けてやる。

大衆からの受けは良いがコイツにだけは怖いと称される笑みだ。

狙い通りぴくりと顔を引き攣らせた生徒その一に、俺は満面の笑  
みのまま口を開いてやる。

「俺としたことが風邪気味の生徒に手伝いをさせちゃっていたよう  
だな。忙しいのは山々だが、間抜けならしょうがない。俺は職員室  
に戻るけど、その本片付け終えたらそのまま帰っていいからな」

指差した机の上には積み重なり、崩れて更に積もった本の山。  
それを呆然と見ている生徒その一に気付かない振りをして準備室  
のドアを閉める。

その後から、

「鬼……」

なんて呟きが聞こえた気がしないでもないが、その後盛大に響いたくしゃみの音に直ぐに掻き消されてしまった。

職員室へは向かわず、学校付近の薬局への道筋を辿りつつ、花粉  
症用の薬を手渡してやったら生徒その一はどんな顔をするだろうか  
と想像してはほくそ笑まずにいられなかった。

くしゃみ(ほのぼの)(後書き)

2008/03/15)

螺旋階段（シリラス／現代／視点入替有）（前書き）

傷つくのも、気付かないのも、醜いのも全て××に囚われているか  
ら。

## 螺旋階段（シリラス／現代／視点入替有）

心は捨ててしまった。だから、この体だけなら差し上げよう。

そう答えると、彼は口端をクツと上げて晒った。

私と彼の生活リズムは月と太陽にたとえられる気がする。月が出ている時はどこかで眠っている太陽が彼なら、逆に太陽が出ている時に眠っているのは私だ。見事なまでに真逆な私たちは言葉を交わすことは少ない。当然、目を合わせる事だつて稀だ。

彼は私に生活を求めた。食事を取り、湯に浸かり、そして眠る。そのあまりにも当然なサイクルを彼は私に差し出せと命じたのだ。

低い日が窓から差し込む前に起き出し、食事を作つて家を出る。私の顔を火照らせた料理は彼が口にする頃には被せてきた蓋に付着した水滴に浸つて奇妙な味に成り果てているだろうけれど、食事に味は求められなかったのだから気にしない。

平坦で単調なデスクワークに勤しみ、彼の眠る狭い箱の一角へ戻る途中、翌朝の食材を買いにスーパーへ寄る。蛇行の後に行き戻った部屋へ入つて先ず浴室へいく。シャワーから溢れるのは水、浴槽を埋めるのは蒸気沸き立つ熱湯だ。それを縁ギリギリまで溜め置いて、蓋と密着するように気をつけて保存しておく。

その後、やることのないまま起きているほど不毛なことはない、と、寝室へと向かった。

\*\*\*\*\*

彼女が布団へ倒れこんだのを確認し、同じ布団の数センチ先に横たわる彼女を気にかけてゆっくりと起き上がる。お休み三秒。どこかの野比さんもびっくりな寝つきは、彼女に安眠を届けてくれるのだろうか、目元に浮かんだ隈を擦りながら思った。

日課になりつつある溜息を一つ吐いてリビングへ向かい、いつもと同じ湿気たつぶりの存在と対峙する。いつもながら心の準備が必要な様を呈しているそれを迎え入れる気持ちの整理をするため浴室へ向かうと、触らば焼かんと言わんばかりの蒸気が立ち上がり、思わず閉めた蓋の上に再び溜息が落ちる。

こんなはずではなかった。

日常の当たり前のことを要求することで、彼女をその当たり前に絡め取って巻き込んでしまおうという目論みは見事に失敗した。当然、その後期待した人間らしい感情の起伏も彼女の元を訪れることはない。

高校を卒業して以降、初めて見た彼女は在校中に纏っていた雰囲気ガラリと変えていた。それが社会にもまれ草臥れた様相ではなく、高校の頃に負った傷を引き摺ってのことだということは、その瞬間を見てしまった僕だけは断言できる。

僕には幼馴染がいた。子供の頃は仲が良く、けれど年を追う毎に口煩くなり、僕を縛り付けるそこから逃げ回ることがその当時の僕の急務だった。そんな中、逃げ場所のひとつに音楽準備室があった。無秩序な秩序に基づいて散乱した楽器に囲まれたそこで、昼

休みになると隣室から流れてくる柔らかなピアノの音にささくれた心を癒して貰っていた。

けれどその日は乱入者によってそれを妨げられてしまった。乱暴に開けたために跳ね返って大きな音を立てた扉をもう一度伸ばした腕で遠ざけて固定した際、再び大きな騒音が響いた。その頃には隣室の音色も消えてしまっていて、代わりに訪れたのは何事かと顔を覗かせた彼女だった。

僕の背筋を嫌な汗が沁った。彼女に目を向けたとき幼馴染は、ニヤリと嗤って確かに僕を見据えていた。

予感は当たり、幼馴染はどう誤解したのか彼女にちょっかいをかけるようになった。最悪だったのは彼女がそれを嫌がるどころか頬を染めて受け入れてしまったことだ。彼女のピアノとは違い、彼女自身に対してあまり関心がなかったとは言え、今まで飽きるほど見て来た光景が繰り返されるのが厭で、僕は更に幼馴染を避けた。

それがさらに誤解を植えたのだろうか。彼女は僕の見ている目の前で勘違いした幼馴染に手酷い言葉で切りつけられ、今尚その痛みに苛まれることになったのだ。

彼女は僕を知らない。初めて顔を正面から見たとき、彼女の瞳は何も映してはいなかったから。

そんな、彼女にとっては見も知らない他人の要求に諾々と従ってしまえるほど、彼女はあの言葉に縛られているのだろう。

彼女に非はない。ただ、僕の所為でとばっちりを受けてしまったがためにこれほどに人生を狂わされてしまったのだ。だから僕は、その責任を負わなくてはいけない。

仕事用とは別けて使っているパソコンを開いてメールを確認する。案の定届いていたメールに目を通し、何度も見直して確認した文書を返信した。

\*\*\*\*\*

二度と、顔も見たくない。

どんなに怒っても俺を選んでくれた幼馴染からの、それは決別の言葉だった。

自分の想いが受け入れられないことは認識していても、他の想いが受け入れられることを容認することは到底できなかった。異性が同性か、それだけの違いで、同じ事をしても違う対応をそれぞれに返してくる幼馴染にも腹が立った。

あの頃の俺は煮詰まっていた、馬鹿で。どうしようもなく、焦がれていて、冷静に判断することさえ思いつかなかった。その所為で失った信頼はあまりに大きすぎて、俺は心に大きな穴ができてしまったように感じた。その穴は塞がるどころか、時を経ることに大きく開いて行っている気がする。

毎日会っていた、会ってくれていた幼馴染を怒らせてしまったことを、俺は今でも悔いている。けれど…それを知って尚許してくれない、俺の傍へ戻ってきてくれないあいつが、理不尽だとはわかっていても憎くてたまらなかった。

しかし何より憎み抜いているのは、俺と幼馴染をここまで隔てる原因となった、あの存在だった。アレさえ存在しなければ、大事な幼馴染はきつと今でも呆れた顔をしながらも俺の傍にいてくれたはずなのに。

あの時一瞬で変化した邪魔者の表情を思い出す。その絶望に今で

も、いや、一生でも囚われてしまえばいい。雁字搦めに縛られて、俺より深いどん底に墜ちていればいいと、願わずにいられない。

\*\*\*\*\*

朝。低い日が窓から差し込む前に起き出し、食事を作つて家を出る。

いつもこなしているそれが狂ってしまったのは、目が覚めるずっと前から手を包んでいた温もりのせいだ。冷えた室内にあつて、夢現にその熱にすがってしまった。

そのあまりにも温かい感触が、何かを埋めると同時にそれを抉つて行った。

古い軋みは新たな軋みを生んで更なる歪みを生み出している。

眠っている間、その痛みに涙することが今でもある事が不思議だった。それを不思議と感じる感覚は、彼が来てから、涙を拭いた痕を見つけてから生まれたものだった。

螺旋階段（シリアス／現代／視点入替有）（後書き）

（2008／3／15）

温度（シリアス）（前書き）

ブログ短編

## 温度（シリアス）

「わたし、ちゃんと笑えていたかな」

夕日に照らされた堤防の上を歩きながら。静かに零れる露のよう  
な声が落ちた。

「何故だろう、口がね、もごもごするの。でも」

ちゃんと笑えたよね、と、頬を晒して半ば縋るように、呟く。

俺はその言葉に何も返してやることができなくて、ただゆっくり  
と後を追った。

するとカナエはするりと口唇に弧を描かせて、

「きみは何も言ってくれないね」

と、声を緩めて呟いた。

できるなら慰めを

共に痛みを感じたい。

そうできればどんなに良いか。

けれどそれは報われない俺の願望でしかなかった。

「ねえ、そこにいる？」

そう言っただけで伸ばした手は、俺に触れずに空を掻く。

カナエはそれを当然のことのように受け入れて、伸ばした手を地  
に垂らした。けれどその心境とは逆に表情に微かな苦さが浮かんだ  
のは、きつと俺の気のせいなんかではなかった。

確かだと思っていたモノが不確かな幻であったなら、不確かな存  
在が何より確かなモノとなることが赦されても良い筈だ。赦された  
って、構わないだろう。

今、この瞬間だけならば。

夏の残り陽に火照る有機に、伝えられない言葉を込めて腕を回す。  
そして一言、

「冷たいね」

涙が零れた。

温度（シリアス）（後書き）

（2008/03/16）

痴話喧嘩（ほのぼの）（前書き）

ブログ短編

## 痴話喧嘩（ほのぼの）

「だーれだ」

突然脇から生えてきた腕に両目を塞がれても俺は決して慌てない。自身では、隣室から出てきた所から気配を消していたつもりなのだろうが、扉が開く際の空気が流れまでは隠せない。

それ以前になにやらガタンゴトンドカンと騒いでいたのがいきなり止んだとなれば、耳を澄ましたくなるのが人間だろう。それゆえ扉が軋む微かな音だっけとしかこの耳に届いていた。

…まあ、言ってしまうとこいつの努力は端から無駄な努力だったということだ。

そんなかわいそうな奴だろうと、俺と書物との間を裂くとなれば容赦はしない。

俺は未だに能天気誰何を求めてくる奴の手の甲を爪の先でこっぴどくねじってやる。抓るなんて生温い。捻じ切ってやる気概で、殺れ。

と、思惑通りにけたたましい奇声を上げつつ両目から手を引かせた奴は、俺の背後でゴロゴロのたうちまわっている。

「うう、酷いサヨリちゃん…っ俺よりそんな老本を取るっていうのねオヨヨヨヨ」

「…その老本ってのはどういう表現だ」  
わざわざ口でオヨヨなんて泣き真似をしたことについては突っ込んでやらない。

そんな覚めた反応が不満だったのか、新木は口を尖らせる。

「だって折角今日なのに」

「何が」

「ちよっとカミサマこいつ薄情に作りすぎじゃないのー!？」

「だから何かと訊いている」

勝手にフェードアウトしていく新木に焦れて先を促せば、キツと言ふ擬音がぴったりの様で俺を睨み見る。

「今日、本当にわかんないの」

「そうだと云っている」

「俺がこんなに泣いてるのにつ？」

「それが何だと言ってるんだ」

一向に進まない会話に苛々が募る。が、

「あの時は雨が降ってて、俺を汚いもの見るみたいな目で見てたって言っても？」

「……………」

思わず絶句すると、もう言いとぼつりと言い残して新木が立ち上がろうとする。

「っ待て」

「もういいよ。本でも何でも好きなだけ読んで」

「待…っ！そんな積りじゃなかった！」

なんて、都合のいい言葉だろうか。

新木はそんな俺を温度のない目でひたと見つめた。

「そんな、積りじゃなかった、ん、だから…な？」

「ん」

「ごめんと云えない俺に、そうやって結局折れるのはいつも新木の方だ。」

いつも五月蠅く煩わしく鬱陶しく纏わり着いてくるのをどうしようもなく邪険に扱いはするも、決していなくなって欲しいとは思わなかった。

眉間の皺が定着しつつある俺に更に溝を作らせるのも、またそれから全てを平地に均すのもこいつだけなのだ。

決してそれを、悟らせることはしないけれど。

「新木」

「もういいって」

先ほどと同じ響きの言葉が、違つ余韻を引いて室内に満ちた。

痴話喧嘩(ほのぼの)(後書き)

(2008/03/25)

影踏み（シリアス／高校生）（前書き）

ブログ短編

## 影踏み（シリアス／高校生）

そんなものが欲しかったんじゃない。

小さい頃は年齢なんて関係なくて、山に遊びに行くのも、空き家になった廃屋に忍び込んで秘密基地を作るのも、何をするのも一緒だった。

それでも一学年の違いは確実に僕たちを離して行つた。僕より先に中学生になって、僕とは違う友達と付き合つて、僕には追いつけないタイムを弾きだすのは、僕の知らない先輩だった。

先輩はそれでも昔のように僕を構ってくれたけれど、それは対等だった、仲間だった僕たちの関係を粉々に壊してしまうものでしかなかった。

どうしてこうなつてしまつたんだろう。

もし僕が先輩と同じ年だったら、僕たちは昔のままでいられたのだろうか。

倉庫の中が薄暗いのは今が夕方の所為だけではない。ハードルを運び入れる時には開けていた扉を、数人分の人影が塞いでしまつているからだ。

幼馴染だというだけで先輩に目をかけられている僕が許せないのだと、彼らの一人が言った。他の数人に服の下を殴られる感触をまるで他人事のように感じながら僕は考えに沈む。

けれどそれも長くは続かず、僕を呼びに来た先輩が事を治めに割つて入ってきた。小さかつた頃のように相手に向かつていくのではなく、言葉で、”先輩”という権限を使つて。

確かにそれは僕を守ってくれようとしての行動だった。けれど。

”目をかけられる”

”守ってくれる”  
保護者と被保護者のような関係なんて、そんなものが欲しかったんじゃない。

昔のように手を引いて歩いてくれる先輩の体温すら子供の頃とは変わってしまったことを感じながら、僕はひたすら涙を流し続けた。

子供の頃の思い出は宝物。

そんな言葉をよく耳にするけれど、僕は思い出になんてしたくない。

それなのに、思い出を現在に求めてしまうことはどうしてこんなに虚しいのか。

逆光で見えない先輩の背中、僕が知らない道の一步先をこれからも歩いていく。

影踏み（シリアス／高校生）（後書き）

（2008／03／27）

白か黒か（シリアス／軽い）（前書き）

父親に言われて行った場所で遭遇した男は、自分を貰いに来たのと  
たまった。

## 白か黒か（シリアス／軽い）

「ふわふわ湯気のたつ『私を飲んで』と言わんばかりのホットミルク。」

本当は湯上りに飲みたいところだけど、体質なのかぼかかしている時には気持ち悪くなって飲めない。が、それならそれで他の時に存分に飲んでやるのが俺のやり方だ。

だって人生は短いんだ！

後ろ向きになってたって時間の無駄。ダメなものはダメ。

人生は諦めも肝心なんだってのも俺のモットーだ。

「ああでも今の俺には目の前で冷めていくホットミルクの存在が遠い。」

「…何？聞こえなかつたんだけど、おたく、どちらさんだつて？」  
できればそのまま答えなないで、俺の前から消えて欲しいと願ってしまった相手は、

「はい。貴方のお父上に頼まれて、貴方を戴きに上がりました」

耳遠いんですね、と失礼なことまでのたまってニッコリ笑った。

俺は、人生何があるかホントーにわからないって事を、改めて学んだ。

「大丈夫ですよ、環さん。俺より先に寝たり、俺より早く起きなきゃ追い出す、なんてことは決して言いませんから」

関白宣言を全否定した男は、料理はできないが片付けは得意だと続けて言って、またあの胡散臭い笑顔を向けてきた。なんでも掃除屋をやっているらしいと訊いてもいないのに勝手に色々喋っているけれど俺が溜息をついたのはそんなことが理由じゃないって事を、誰かこいつに教えてやってくれ。

そう思えてならなかったがここにいるのは俺とコイツだけ。他に誰かいる気配はない。それと言うのも今いる場所はコイツの住処ら

しい独身男にはちょっと広めのマンションだった。

根本的なことだけど、何で父さんが俺に何も言わずにコイツに俺を預けたのか、そもそもコイツの言っていることは本当なのかと疑った。けれどコイツと会った場所へ行くように言ったのは父さんだし、ここへ来るまでの車の中で電話したところ、直接は話せなかったがコイツと会わせるのが父さんの狙いだったって言うのはわかった。

でも。

「環さん？」

一体、俺を貰ってコイツはどうするんだろうと思った。

あれから何度か試みたが、一向に繋がらない電話をかけることは放棄した。

人生は短いんだ。無駄なことなんてしていられない。

佐紀也と言うらしい男も宣言通り俺がいつ起きようが眠ろうが、ついでに作った飯がどんなに不味かろうが俺を追い出すことはしなかった。住む場所さえあれば他の事はとりあえず、今はどうでもいい。そんなこんなで、俺は佐紀也との生活にも早々に慣れた。我ながら素晴らしい順応性だと思う。

「今日の夕ご飯は何だい」

冷蔵庫の中身を確認している時にノシツと覆い被さられたもんで、俺はひんやりした庫内に頭を突っ込んでちょっと咽た。背中の上は変わらず押し掛かったままなので、俺は意趣返しに佐紀也の大嫌いな納豆を掴んで鼻面に突き出してやる。狙い通り嫌そうな声を上げて背中から剥がれたのを更に押しつけて、もう片手にワントンの皮を持って扉を閉める。そこから献立を察したらしい佐紀也は眉間にしわを寄せてブーブー文句をたれたが、それでも俺は気にせず手を進めた。

改心の揚げ色をした納豆揚げの山を前にして、佐紀也は微妙な顔をしつつも箸を止めることはなかった。別段好き嫌いはない俺はと

言うと、それを見ているばかりであまり食べてはいない。何分俺は小食なのだ。だからこの揚げ物の山を佐紀也が残さないように見張っているのが、目下俺のすべきことなのだ。だって、食べた後の片付けは佐紀也の仕事らしいのだから、それ以外にすることがない。最後のひとつまで食べ終わるのを見届けてから、俺は入れたばかりの緑茶を差し出してやる。そうすると佐紀也はとても嬉しそうに笑った。初めて会ったときの胡散臭そうな笑みとは違う、少しだけ親しみのこもった笑顔だった。

俺の夜は早い。人生短し時は金なり、が俺のモットーだと知っている友人たちは、そう言うと大抵意外だと笑うが、健康第一もモットーなのだと言ってやると、環らしいと言ってまた笑うのだ。

全くだとその時は一緒になって俺も笑いに混じったが、この家に来た時、早寝の理由がひとつ増えた。寝台がひとつしかないこの家では必然俺と佐紀也は一緒の布団で眠らなければならぬ。佐紀也がどんな理由で俺を貰ったのか、そして何故俺の日用品は運んできたくせに寝台は運んでこなかったのか、そんな理由は知りたくもないが、俺は大の男がシングルベッドにひつついて眠るさまなんて想像も実感もしたくなかった。だから佐紀也の就寝時間には常に深い眠りの中にいたかったのだ。

しかし、ああ何故。俺は今起きてしまったんだ。

草木が眠っても新聞屋さんはきつと起きている時間、目が覚めてしまった俺は、俺を抱えるようにして眠っている佐紀也の寝顔を一寸ほど先に見て取ってしまった。はつきり言って寝覚めは最悪だった。できれば見なかったことにしたい。

が、後悔しても仕方がないと割り切り、割り切れないのはこのままの体勢でいることだと寝台を後にして洗面所へ向かう。

用事を済ませて、さてどこで寝ようかと考えていると寝室から佐紀也が出てきた。ちょっとバツが悪そうにもう起きるからと、俺から目を逸らせて告げてくる。その様子で俺は悟ったね。多分、俺の

思ってたことにこいつは気付いてる。

溜息を吐いて、リビングへ向かう佐紀也のパジャマの裾を掴んだ俺は、そのまま寝室へ入る。不審げな佐紀也をとりあえず蹴飛ばして寝台に乗せてから俺もあとに続く。

正直、新しくできた早寝の理由を佐紀也に知られているとは思わなかった。でも、知られていないと知らない振りは何故だかできなくて、戸惑う佐紀也の気配を背に感じつつ、俺は知らん振りで眠る振りをした。暫くしてからおずおずと再び回された腕を、夕飯の侘びだと思って我慢してやろうと思ったのは、冷えた体に腕が温かかったからだ、そう理由付けた。

納豆入り出汁巻き卵を、佐紀也は苦悶の表情で食べていたのだ。

ここへ来てから、学校に入り浸る時間が減った。正確には入り浸っていたのは学校の図書館だったけれど。

この学校の図書館はそれが売りだというほど蔵書が豊かだった。実際、それが目当てで進学を決めた者が大勢いる。勿論俺もその一人だ。

深い知性溢れる本、世界の童話を集めた本、地質学の本、その他様々な世界が詰まった空間には様々な人間もいた。そいつらと討論したり、馬鹿話で盛り上がりたりするのも楽しかったが、今は得た知識を生かすほうが面白く感じた。とどのつまり、料理の腕を磨くことに意義を見出したのだ。

「何だい、これ？」

「ま、いいから飲んでみてよ」

俺の前には湯気と甘く香り立つホットミルク。佐紀也の前にはこれまた湯気と少々きつく香り立つ茶色がかつた液体。

促すまま、ゴクリと喉を鳴らして覚悟を決めたようにそれを喉へ流し込む佐紀也は、途中で咽て。口に入っていた液体を真向かいにいた俺に向かって噴き出した。

慌ててごめんと謝る佐紀也をよそに、口にまで入り込んだその液体に眉がよるのを止められない。どうやら俺にはアイディア料理の才能はないらしい。

できないことは無理に追求しない。これぞ人生を楽しく過ごす秘訣だ。因みにこれは、モットーじゃなくて教訓だった。

それが原因だった訳ではないが、借りていた料理の本を返してから俺は学校へあまり行かなくなった。

その代わりに夜中に目が覚めて佐紀也の腕を感じる回数が増えた。慣れとは不思議な物で、もう一々理由をつけて妥協しなくとも佐紀也の腕が回ってくることに依存はなくなっていた。

そんな生活が、ずっと続くなんて思っていたわけではない。

佐紀也だつてまだ若い成人男性だ。気まぐれで貰っただろう俺に飽きるのは時間の問題だ。それ以前に短い人生楽しくがモットーの俺が、学校にも行かなくなれば、残る暇つぶし、もとい、楽しみは佐紀也への納豆攻撃のみ。

それもできないのなら、俺がそこにいる理由はない。

佐紀也は俺の所へ帰つてこなくなった。

帰ってくるわけがない。

だつてここは、あいつの家じゃないのだから。

一人で寝台に横になつて、ゆっくり考えてみるといろいろなことがあった気がする。そのひとつは、意外にも俺は随分と佐紀也に助けられていたってことだ。

佐紀也はどんな時でも笑っていた。俺が佐紀也の大嫌いな納豆料理をテーブルに並べても、とんでもない物体を飲ませた時も、夜中に洗面所に長いこと籠っていても、どんどん柔らかくなる笑顔で俺を見てくれていた。

毎晩回した腕が余っていくことに気付いてもいただろくに、朝起

きると何も無い顔でおはようと声をかけてくれた。

あの日、何も告げずに俺と佐紀也を会わせた父さんは、俺を捨てたんだと思った。けれど違った。

それにやっとなり付いたのは、見舞いに来てくれた父さんが、以前より大分痩せて、辛そうな顔をしながら笑おうとしているのを見たときだ。俺は、父さんが俺の願いを叶える為に俺と佐紀也を会わせたのだと、初めてわかった。そして、どれだけ辛いことを願ってしまっただのかも。

「ごめん、父さん。もう、無理に笑わないでいいよ」

父さんはもうずっと、俺を見て笑えなかったのだろう。

俺は生まれつき爆弾を抱えていて、長くは生きられないと言われていた。母さんも同じ病気で亡くなったそうだから、多分、遺伝性のもものなんだろう。

父さんは言うつもりはなかったみたいだけれど、人の口に戸は立てられるもんじゃない。

病院にいく度に沈痛な顔をして出てくるのを見るのが嫌で、俺はひとつの頼みごとをした。父さんはそれをずっと叶えてくれていて、叶える為に無理をしてくれて、それがどうしてもできなくなっただから俺を佐紀也に預けたんだろう。

でも、だったらどうしてだろうか。俺を預かったって何の得にもならないとわかっていて、佐紀也は何故俺を貰った、なんて言ったんだろうか。

目が覚めると、白い天井の代わりに長い睫毛が映った。

危うく寿命が尽きるころだった。どうしてくれるんだと睨むと、佐紀也はニヤリと笑った。今まで見たことのない笑みだった。

「環さん、知っているかい？」

「知ってるよ」

そう言うと、佐紀也は面白そうに何をと訊ねてきた。

「あんたが掃除屋じゃなかったって事くらいは」

だって基礎がなつてないんだもん、とダメだししてやると笑いながら凹んでいた。器用な奴だ。

「いや、あれは元から冗談のつもりだったんだけどね」

「あー、じゃあやつぱり片付けじゃなくて抹殺とかの方って誤解して欲しくて言つてたんだ、あの時」

ノツてやらなくてごめんなと棒読みで謝ると、今度は本気で凹んだようだ。してやったりとにやりと笑つてやると、佐紀也はいきなり手を伸ばして俺の頭を抱きしめてきた。

「ちよつ、苦しい」

「うん。でも俺はこうしていたいで、ちよつと我慢して」

「無理つて、死ぬから。息できないから今現在本気で」

笑つて、今度は体ごと起こしていつかの背中から俺を抱きしめる。

「…後始末とか、全部させてごめんな」

「何を仰る。環さんの創作料理の片付けくらいいくらでもやりますとも。どれだけ納豆臭さが取れないキッチンになろうと、五徳の下に入り込んだ粒のひとつまで残らず取り除くくらいわかりやすいよ」

「失礼だな、わざわざ残しといてやつたんだよそれは」

「それは毎度、どうも」

お前はどこの商売人かと突っ込みたかったが、さて置き。

「俺が言ってるのは洗面所の方だよ。排水溝とか、今頃凄いことになつてんじゃないかねえの？」

佐紀也は答えず、代わりに笑う口元だけが見えた。

「ねえ、環さん。愛つてなんだかわかりますか？」

「は？」

「よく愛は純粹なものつて表現を聴くでしょう？でも純粹つて、綺麗なものつて意味じゃないと思うんですよ」

「何言つてんの？佐紀……」

後ろを振り向こうとするも、回された腕に力を入れられては見え

るのは佐紀也の口元だけだった。

「ほら、子供：特に赤ん坊なんかも純粹だつて言われるじゃない。でもやることは結構えげつなかつたり我侂だつたりするでしょう。だから、俺は愛とは利己的なものだと思つてゐるんです。所謂自分勝手な主張を無理矢理押し付けるつて意味で」

「…よくわかんないけど、あんたが勝手にやつてたことだから俺に氣にするなつて言いたいのか？」

「いいえ、存分に氣にしてくれてもいいんですよ。ただ、氣にするのは環さんのしたことじゃなくて、それを俺がどう思ったか、にして欲しいだけ」

…よし、聴かなかつたことにしよう。

短い人生、わからないことを氣にし続けても仕方ない。これ、俺のモットー。

とりあえず、佐紀也なりのやり方で慰めてくれたんだと思うことにする。人の行為には甘えるつてもモットーつてことにしておく。「ところで、それじゃああんた何して生計立ててるんだ？」

そう切り返すと、唇が薄く笑つた。

「教えなかつたら、どうしますか」

未練に思つて、わかるまで傍にいてくれますか。

小さくそう言つた佐紀也を今度こそ振り返つて、俺はニヤリと笑つてやる。

「俺は悔いは残さず、がモットーなんだ」

そう吹き込んで、佐紀也に思い切り体重をかけてもたれかかつてやつた。

そうやつて過ぎていく時間は、大好きなホットミルクよりも甘く、大切なものに思えた。



白か黒か(シリアス/軽い)(後書き)

2008/3/30

おもいで(ほのぼの)(前書き)

ブログ短編 知らない人について行ってはいけません

## おもいで（ほのぼの）

目を閉じて、その時の光景を思い浮かべる。

それはもう随分と昔のことと、ところどころが薄ぼやけていて、最早それがどこであったかなんて思い出せない。それほど昔の記憶。僕はまだ幼くて、疑いもせずに誰にでもついていってしまう、少々おつむの足りないガキだった。そんな誘拐にはもってこいと思われる僕がこれまでを平穩無事に過ごしてこられたのは、一重にどこにでも転がっている顔と、見るからに一般家庭のそれほど裕福でもない、本当に普通の経済状況の家庭だとわかる恰好をしていたからだろうか。

あるとき、僕は近所の少し大きな公園で一人で遊んでいた。目線の先には同じ年頃の子供。一緒に遊びたいと思ったのかどうかは覚えていないが、昔から口下手で人と仲良くなるのが苦手だったのはよく覚えている。

ひとり遊具で遊んでいると、近所に住んでいるのだろうか、公園適齢期を過ぎたお兄さんが見えた。彼が何をしていたのか、どうやって仲良くなつたのかもよく覚えていない。僕が一方的に懐いてまわり付いていただけかも知れないが、彼は僕の遊び相手になってくれた。

暫く遊んだ後、彼はやはり近所にあるらしい自宅へ帰ると言ってきたが、折角できた遊び友達を僕は手放したくなくて、駄々を捏ねて彼の後を着いていった。

彼は困ったように何度も僕に公園へ帰るように言ったが、僕はニコニコして聞き流した。急な坂を登り、庭に柿木が植わった家を通り過ぎてほんの少し歩くともう彼の家へ着いてしまった。

僕にはそれがとても残念だったけれど、それでもまだ公園へ戻る気にはなれなくて、彼の用事を手伝った。彼は諦めたのか僕に帰る

ようと説得するようなことはしなかった。ただ呆れたように、自分が悪人で誘拐犯だったらどうするのか、とか、もうこうやって知らない人について行っちゃだめだよ、と僕を諭した。それに対し、ホントに悪い人ならそんなことは言わないんだよ、と、恐らく得意そうに言い放ったのを覚えている。我ながら、小生意気なガキだ。

その後、彼の手伝いも終わってしまったてしよんぼりしていると、彼は僕を車に乗せて近くのスーパーへ連れて行った。そして、お手伝いのご褒美にお菓子を買ってくれと言った。

僕にはご褒美を貰うつもりなんか全くなくて、それを伝えても納得してくれない彼に、初めて悪いことをしてしまったんだと申し訳なくなった。

辞退しても引き下がってくれない彼に負けて、遠慮しいしい好きなお菓子を一つ買ってもらった後、彼にあった公園へ車で送られた。今ではもう殆ど顔も覚えていない彼だけれど、その後の僕が彼と過ごせた短いけれど楽しかった一人じゃない時間を忘れられなくて、積極的に周囲に声をかけられるきっかけをくれたのは事実だ。自分を通すことで相手の気を揉ませてしまうことへの罪悪感を教えてくれたのも、彼だ。

その記憶をくれた彼に、今でも僕は感謝が止まない。

僕は今きつと彼と同じくらいの年齢で、だからこそ、貰ったかけがえのない記憶を嘗ての僕のような世間知らずな子供に還元できればと思えてならない。

おもいで(ほのぼの)(後書き)

(2008/04/11)

あわれな彼の恋人（コメディ）（前書き）

ブログ短編

## あわれな彼の恋人（コメディ）

味覚音痴な恋人を持つと、苦勞するものである。

俺は今窮地にたたされていた。

それと言うのも、目の前には件の恋人が朝から張り切って作った料理がテーブルいっぱいには並べられているからだ。何も知らない者が見れば美味しそうだと唾を飲むだろう程の見栄えがいい料理が。

：見栄えだけはいい料理が。ほんの数分前の俺はまさにそんな状態だった。

しかし普段は照れ隠しばかりの素っ気無い態度ばかり取るつれない恋人がこのご馳走を作ってくれたのだ。このまたとない甘い雰囲気を用意を不意にしてしまえば、恐らく次が訪れることはない。

だったら、味はどうあれ完食するしかないじゃないか。

「どうしたの、顔色悪いよ？」

「いや、なんでもないよ」

人間の限界と言う強敵にタケヒゴで挑みながらなんとかひねり出した笑顔で答える。

「でも辛そうだ」

「ん…ちよつと食べ過ぎちゃったから、かな」

あんまり美味しかったからつい、と続けると、恋人は無言で俯いてしまう。前髪でよく見えないが、もしかして、照れているのだろうか。

そんな美味しい状況を見逃しては男が廃ると、椅子から立ち上がろうとした俺は、

「じゃあ少し早いけどデザートもって来るね」

と言う恋人の言葉で、中腰のまま固まった。

パタパタと台所へ消える恋人の後ろ姿を目で追いながら、握った

拳に汗が滲むのを感じずにはいられない。

俺は甘い物が苦手だ。本当は甘ったるい匂いを嗅ぐのすら遠慮したいが、甘味を食べて綻ぶ恋人の顔見たさに何度も甘味屋へ連れて行っているんで恋人は知らないだろうが。

加えてこの殺人的な味付けの料理を作った本人が手がけたデザート……。

ああ愛しい人よ。

君は相乗効果と言う言葉を知っているか？

ウキウキとした様で戻ってきた恋人の手にある視覚の暴力を見つめながら、俺は心の汗で滝を作り、堪えきれずに卒倒した。

どうしたの、大丈夫か、と呼びかけてくる愛しい声は聞こえても俺から返せるのは不明瞭な呻きのみ。

なんとか体を起こして大丈夫、と言葉を返そうとすれば、言葉ではなく胃の辺りからせり上がって来るものを感じ、恋人の驚く声を背に聞きつつも俺は慌ててトイレへ駆け込んだ。

部屋へ戻って俺は固まった。

大切な大切な愛しい恋人が涙目で俺を見つめてきたからだ。その手には取り皿に盛られた恋人の手料理。

状況が飲み込めず呆然としている俺に、涙目のまま恋人が声をかけてきた。

「ごめん俊明っ！こんなもの食べさせちゃってほんとにごめんなさいっ！」

うわーんと擬音がつきそうな泣き声混じりで、涙に濡れた顔でも恋人は飛びつきりに可愛い。

なんて思っていたがちよっと待て。

こんな料理を作ってしまうほど、恋人は味覚音痴なんじゃなかったのか？いや、でもそういえば、甘味屋では美味しそうに、そう、美味しそうに顔を綻ばせてやいなかったか……？

いやいや落ち着け。だって料理の際は必ずあれを…もしかして、しなかったのか？

「…味見は、しなかったのか？」

「あじみ？」

知らなかったのか！？いやいやいや、しかしあれだ、普通に作っていけばあんな味には…

「分量はちゃんと守ったのか？」

「分量つて、何かあるの？」

「いやほら、本に書いてあるだろう、何人分の材料とか、調味料の量とか…」

「ええっそうなの？俊明つて、料理に詳しいんだね！」

普通だろうこれぐらい！

思わず突っ込みそうになったが、純粹な尊敬を込めた目で見られては俺に言える言葉はない。というか、こんなに頬を赤らめてモジモジと俺を見つめる恋人を見て、そんな突っ込みは風の前の塵の如く跡形もなく消え去り、代わりに残ったのは荒くなる鼻息のみ。

期待、してもいいだろうか。むしろ期待されているだろうこの顔は！

今まで健全すぎて接吻すら交わしたことがない俺たちの関係に、今この瞬間、進展と言う名の極楽を与えても許されるだろう！

恋人の肩をがっちり掴もうと上げた俺の両手を、けれどきらきらした瞳のままの恋人にがっちり掴まれた。

「お願い俊明！料理教えて…！どうしてもおいしい料理を食べさせたい人がいるんだ…」

ああ、なんて健気な恋人なんだ。

俺においしい料理を食べさせる為に俺に料理の指導を頼むなんて…何かおかしくないか、恋人よ？

まさかとは思いつつ、おそろおそろマイスイートラバーに問いかける俺。「それは、誰か訊いても…？」

言った途端にかあつと頬を染めぱつと俺から目を逸らし恥ずかし

そうに、内緒、とは言わず、

「武彦に……」

と言った後で内緒だよ、と可愛らしく呟いた。

武彦？武彦って誰だ！？

いや、きつとタケヒゴを言い間違えたんだ。

飯を食べるタケヒゴなんて聞いたことがないが、そうやって己を誤魔化していると、恋人は俺の心も知らずに更に続けた。

「でも良かった。武彦にこんなもの食べさせられないもの。俊明が味見してくれて助かったよ」

恋人の俺よりその武彦とやらのが上なのか？どこまで照れ屋なんだ可愛い奴め！ああでも今はそのツンデレさが痛い。

と一人現実から逃げていると、その逃避すら許さないかのように残酷な言葉が、愛しい、大切な可愛い恋人の可憐な唇から落とされた。

「俊明が友達でよかった」

これからもよろしくね、とニッコリ微笑んだ恋人は、本当に可愛らしかった。

て、恋人だと思ってたのは俺だけ！？

そんな馬鹿なー！

俺はその場で再びぶっ倒れた。

あわれな彼の恋人(コメディ)(後書き)

(2008/05/23)

情（シリアス）（前書き）

ブログ短編

## 情（シリアス）

キミのその無遠慮な優しさが、僕はずっと憎かった。

キミの懐が途轍もなく広いのか、それともただ何も考えていないのか、僕には未だにわからない。

ただ時折見せるキミの細められた視線が、何故か背筋が凍るほど恐いと言う不可解な事実だけだった。

「カナト」

黙々と焚き上げられ、空へ消えて行くもはや環境汚染物質と化したそれを見上げていると、頭上から降ってくる声と、緩く首を囲ってくる腕。

それが誰のものであるのか疑問を持つこともない僕はされるがままで、視線の一つさえ向けることはしない。

僕の心は今にも雨が降りそうな曇天が広がっているのに、現実の空は残酷な青がどこまでも続いている。当たり前のことなのに、その当たり前が理不尽だと、そう思う程度には余裕が戻ってきている自分を我ながら情が薄いと嗤った。

「カナト。こっち見て、カナ？」

けれど。けれど、と僕は思う。

僕は確かに情が薄いが、それは彼らも同じだった。僕へ向けられるのは温かな温度のある”情”ではなく、強いて名を付けるなら”冷情”と言うものだろう、冷ややかな認識。

僕の劣悪たるを上げ連ねては喜ぶ彼らと、その先で持ち上げられた傲慢な彼を喪ったとて動く情は僕の中にはない。

だから、僕は確かに情を知らない分、情に薄いかもしれないが、全くの無情ではないと思っている。

僕が今何も感じないのは、全て彼らの自業自得。因果応報とか、多分そんなものと同義だ。

「哉人、こつちを向いて」

同時に回されていた手が僕の顎をグツと掴む。

その痛み思わず身じろぐとばらばら落ちてきた水滴がキミの手を濡らしたのがわかった。

「哉人には、すつと俺がついていてあげる。寂しい思いなんて、もうしなくていいんだからね？」

だから…と続いたキミの言葉はやはり無遠慮な優しさしか含まない。

僕は認めない。あんな人たちのために流す涙なんてものがあることを、どうして認められるというのか。

「…妬けるな……」

ぼつりと溢された冷氣に僕はゾクリと背を凍らせながらもキミを見失ってしまった。キミは冷たく目を眇めながら僕に目を向け、僕以外の何かをじつと見据えていた。

そして独り言のように紡がれた言葉に、ああやはり、と、納得してしまったのだ。

僕はキミが恐い。

その瞳が、その執着心が、その、独占欲が。

キミはいつか、僕と言う存在を投げ出すかもしれないのに、そうされた跡の僕にはきつともう何も残っていない。キミによって作られたキミだけを心に残した僕はきつと、そうなった後、絶望も感じることができないに違いない。

「あんな奴等にカナはあげない。カナには俺がいればそれでいいでしょ？」

けれど唯一の救いは、キミが奪った僕の中身がキミに吸い取られるのではなく、ただ消滅していくということ。

キミが僕以外をその内側に閉じ込めるのはずっと先だろうと、保証もない事象を夢想できることだけ。

「俺にはカナしか要らないんだから」

キミの手が赤く染められた幻に犯されながら、愛おし気に僕の頬

を撫でるのを感じ、そして全てを拒絶するよつに僕は瞼を閉じた。

情（シリアス）（後書き）

（2008/07/25）

懐かしい客（シリアス）（前書き）

ブログ短編

## 懐かしい客（シリアス）

例えば、目にかかった前髪が、その近さからぼやけて見えてしまうように、けれど決して近くにはないそれら。至近距離にはないが隣り合う程度には近くあるそれらを、皆は一体どう捉えているだろうか。

戯れに手を伸ばして見れば霞の如き手ごたえを返し、声をあげれば壁に返される響きでもって応える。それらに抱いた印象は、不思議の一言に尽きた。

成長するにつれ、それらとの接し方を学んだ俺は、こちらからそれらへ何某かのアクションを起こすことはなくなつた。それらはこちらにそれとわかるような影響は及ぼさない、云わば空気と同じような存在なのだと思つていた。

それが崩されたのはとある夏の夕暮れのことだ。敷地内を掃除しているとき声をかけてくる者があつた。

俺は軽く驚きつつも挨拶を返し、暫し世間話に興じた。その頃にはもう、それらが世になんと呼ばれる存在かを認識していたが、そんなそれらと、目の前の彼との在り様の差に始終関心していた。

彼はそれから毎日夕刻になると現れ、何気ない話を楽しんでは帰つて行くようになった。長くはないが決して短くもないこの四半世紀にはなかつた現象に、そして純粹に彼の深い知識と翳のない穏やかな在り様に惹かれ、俺も彼の訪れを心待ちにするようになっていった。

その日も彼は現れて、いつもと同じく会話を楽しんだ。その会話中、急に空が暗くなり、今にも雨粒を落とさんとする天候に変わっ

た。

彼は帰ろうと挨拶を口にしたが、彼ともつと話をしたいと思った俺は家が上がっていかないかと彼を引き止めた。けれど彼は…

彼は俺ですら忘れてしまった認識を、俺よりはるかに正確に捉えていた。

彼は束の間寂しそうに笑っていたが、やがて背を向け一歩一歩来た道を戻っていった。そして降り出した最初の一滴が彼に触れる寸前、煙のように姿を消して二度とは現れなかった。

俺は既に見えなくなってしまうた彼の背を、石の鳥居に寄りかかりながらいつまでも見送っていた。

雨に濡れ数日寝込んで溜め込んだ仕事を片付け、最後に倉の整理をしていると、古ぼけた木箱を見つけた。幼い頃は遊び場になっていたここで見た覚えのないその箱を開けると埃がたまって咳き込んだ。

目に涙を浮かべつつ見た未知のはずの箱の中に、たった一つ既知の存在を見つけた俺は瞠目した。

勢い母に尋ねれば、彼は俺の曾祖父に当たるのだと知った。

そして、母から見た彼を深く知ること、彼は俺に会いに来てくれたのだと、改めて得心したのだ。

後に、彼の訪れが旧暦の盆と一致するのだと気付いてから、毎年迎え火を焚いては、もう一度彼と話す日がくることを願うようになった。

懐かしい客（シリアス）（後書き）

（2008/07/29）

あまのじゃく(ほのほの)(前書き)

ブログ短編

あまのじゃく(ぼのぼの)

「天馬 渚です。よろしく」

「あまめ？甘党？」

「どちらかと言うと辛党です」

その軽そうなおつむにしっかり叩き込んで追いてくださいね、と笑顔で言つてやると、相手の顔が若干ひきつった。しかしそんなことは僕の知ったことじゃないので変わらずニコニコと愛想笑いを浮かべてやる。

「？みぎ…」

「なぎさ、ではなく、みぎわ、です。自己紹介はしましたからね、言い間違えられでもしたら僕何するかわかりませんからね」

ニコニコ。

ヒクヒク。

僕と相手の口元の形容をするなら、これ以外の言葉はないだろう。部屋割りの紙を手の名を訊かれたので応えてやればこの反応だ。全く、男の癖に肝っ玉の小さい奴だ。ちよつと見た目と中身が違ってくるくらいでこつも固まっていたら世の中を巧く渡るなんて夢のまた夢に違いないだろう。

大体なんだ。人の名前がそんなに不思議か。いい名前じゃないか水偏にあつまるで渚。一見簡単な字ばかりなのに一筋縄では読めないところも僕にぴつたり捻くれ具合じゃないか。何が不満なんだお前は。

そんなことを思いつつも顔には笑みを浮かべたままだ。しかしもう用件は済んだのだから、顔を保つたままサラツと固まったままの相手を見無視して荷物を片付ける。

暫くして、ようやく相手が解凍してこぼした言葉に、

「名は体をあらわすの権化みたいな奴だな…」

僕は聞こえなかった振りで応えてやった。

なんだか…自分で言うのはいいけれど他人に言われるのは我慢ならない心地を初めて味わわせてくれた、奴の名前が気になった。

あまのじまく(あまの) (後書)

2008/08/03

ワレナヘ(コメディ)(前書き)

ブログ短編

## ワレナベ（コメディ）

「俺さー、思うんだけど」

出た、加賀見の”思うんだけど”戦法。

内心冷や汗を流しながら、それをおくびにも出さず平静を装って  
「何が」と返す。

「俺達ってさ、なーんか風呂敷みたいじゃねー？」

「……どういう意味だ？」

今度はまた何を言い出すのかと身構えてみたが、敵はそんな俺の  
足を陥没させる攻撃に出た。風呂敷ってなんだ、風呂敷って。

いや、風呂敷と言う存在自体を知らないわけじゃあない。古くは  
戦国の世辺りで旅荷物なんかを包むのに使ってた気がする、和風鞆  
のようなものだろう。昨今でもあまり見かけなくなっただが、俺の  
祖母なんかも確か愛用していたはずだ。…そういえば祖母は元気に  
しているだろうか。そろそろ白寿も迎えようと言うのに、近年はま  
ったという海外旅行へあちこち飛び回っているために碌に会えもし  
ないのだが…まああの人は使りがないのはいい使りの典型みたいな  
人だし、心配はないだろう。

なんて密かに現実逃避をしていたが、のんびりした加賀見の言葉  
が俺を現実へ呼び戻す。

「だってさー、アレって平べったい原形は同じなのに、畳み方とか  
中身とかで形変わるじゃん？てか、たたむのが下手だったら中身が  
零れたりしそうだし、零れたものが本音だったりボロだったりうっ  
かり理性だったりしたらさ、それお前そのものじゃん」

そのものじゃん、なんて言われても。俺にどういう反応をしろと  
言うんだお前は？大体俺は神経質なんだよ。中身が零れるようなお  
粗末な包み方をするなんて加賀見じゃあるまいに

「ほら本音零れてるし」

「え…っ」

くつくつ笑いながら加賀見に指摘され、俺は今初めて思考を垂れ流していたことに気付いてバツが悪くなる。

「うん。でも、お前の風呂敷はきっちり縛ってありそうだ。で、『俺完璧』とか思っても底にでかい穴が空いてそうだよな」

「…じゃあ加賀見の風呂敷はどうなんだよ」

半ばやけになっていたのか、返す声は思った以上につけんどんになった俺の問いに、加賀見は更に声を上げて楽しそうに笑い出した。「俺のは中身がいっぱいすぎてたためないよ。端っこを縛っても反対側からぼとぼと落ちるし、その反対も同じことになりそうだし」

加賀見の自己分析を聞き、ふと脳裏に浮かんだその姿のあまりの合致具合に俺も思わず笑が零れた。

「なんだ。それじゃあお前のは風呂敷じゃなくてただの布じゃないか」

そう冗談半分に返せば、加賀見はにこりと笑って、

「うん。だから俺の中身は半分お前に預ける。それで俺の風呂敷を縛れるよう、お前が頑張ってくれるんだろ」

なんだそれ。

俺はお前の世話係か。

思い浮かんだのはそんな憎まれ口ばかりだったが、口をついて出たのは別の言葉。

「お前の中身で俺の風呂敷が包めなくなったらどうしてくれるんだ」ボソリと呟いた俺の言葉に、加賀見は笑みを深めて答える。

その言葉に、俺は自分の顔面が真っ赤になったことが不思議なくらいよくわかった。

それは単なる刹那の思いつけではないと、信じてもいいのだろうか。

答えはわからないままに、俺たちの時間は折り重なって行く。



ワレナヘ(コメディ) (後書き)

2008/08/28

観察者の底意地（コメディ？）（前書き）

ブログ短編

## 観察者の底意地（コメディ？）

瞼を持ちあげること、かつてこれほど苦勞したことがないと思うほどギスギスしている。余分な力が入っているのか、せつかく開いた瞼が痙攣して今にも閉じてしまいそうだ。

間近で聞こえ、瞼を開くきっかけとなった人声の大元を探して眼球を動かすと、やはりこちらもぎちぎちとしか動かない。

一体これはどうしたことかと疑問が浮かぶのと同時に、その声は放たれた。

「俺のすべてを、あなたに捧げさせてください」

…一体、何事だろうか。

医師や親族とやらの怒涛の訪問がひと段落し、漸く詰めた息を吐いた。どうやら長期間眠っていた、いや、半ば植物状態となっていたところからの目覚めに彼らはいろいろな反応を見せた。驚く者、不快そうな者、興味を持つ者、喜ぶ者。そしてばつの悪そうな者が、それぞれ複数。

目覚めのきっかけとなった二人はそれぞれに違う反応を示したが、それほど特出した反応を示しはしなかった。むしろ、ありきたりなつまらない反応を言えるだろう。

察するところ、彼らは聞く者がいないとたかを括って、よりにもよって病人のいる病室内で大告白劇を展開するという奇行を繰り広げていたというのに、凡庸なその後の反応が残念でならない。そんな奇行を冒した一人は我が家の、というよりも一族の使用人、もう一人は一族の人間で従兄にあたる人物らしい。なるほど、驚き、そしてばつも悪くなるわけだ。

目は醒めたものの、すぐに退院とはいかないらしく数週間は検査漬けの日々を送らなくてはならないらしい。足の機能も衰えている

こともあり、歩行訓練も兼ねていん内の散歩に空き時間を費やしていると、件の従兄殿が同行してくる。もちろん、心酔ベタ惚れ駄犬状態の従者殿も一緒だ。

所で余談だが、従者というのは主人の半歩後ろを付き従うように歩くものだと思っていたが、どうやらその認識は正しくないらしい。従者殿は懸想人の隣を奪われまいと思っっているのかは知らないが、従兄殿の隣に強力接着剤を塗りたくったかのように張り付いて離れない。三人並んでは対向者の邪魔になってしまうので、前から二人と一人に別れて帯となっている。これではどちらが従者か分からないではないか従者殿。こうなれば従者役に徹し、二人を背後から観察することに努めようではないか。勿論、慎ましい所作や丁寧な物言いも忘れてはならない要素だと、まずは一人称を整える事にしよう。：従者も楽ではないと、早くも思い知る。

従兄殿はと言えば困った表情を浮かべつつも状況に気づくことなく受け入れていることから、満更でもなく感じているのではないかと予想くしている。目覚めて以降、この二人の観察くらいしか面白みのない日々を送っている物からすれば、そろそろ何らかの進展があつて欲しい所だ。もう一押し、頑張れ従者殿。振られるなり？ぎ取るなりしてくれ。

二人の後をよたよたと付き従いながら、眠っている間に世は随分と進化したらしいと感じる。医療システム、テレビ、それを通じて知る世界にしてもそうだが、何よりこの二人。元氣澆刺に動いていた頃には見られなかった男同士でのほれたはれたの愛憎劇は、時の流れをいまいちつかみ切れずにいた感情を怒涛の勢いで突き動かした。だがしかし公の場での猛アタックは控えてほしいと思うのが今の心境だ従者殿。従兄殿も浸ってないで止めるくらいの建前を身につければいいものを。これでは傍から見れば従者の位置にいる身のこちらの方が恥ずかしいぞ当人等め。

この恥ずかしいで賞を総なめできそうな責め苦は入院中も、そして退院して屋敷と呼ばれる邸宅の庭を散策中も絶えることなく催さ

れた。

院内のように対向者とすれ違う事はなくなつたが、身についた習慣が二人の一人に別れて歩く位置関係は変わらずにいる。妙なところで奥手な二人ははなかなか進展を見せず、最近は観察することにも飽き始め、いつ付き添いを断るかという段に来ている。とはいへ、この二人の行く末が気になるのも事実。あの病室での勢いをもう一度見せてもらいたい思いが、付き添い辞退申し出の妨げとなつてゐる。

今日も今日とて初々しいを通り越し、鬱陶しいの域に達している二人から目をそらして広い庭を眺める。

そこここへ配された植木などの感覚は絶妙で、どの位置から見ても互いが互いを生かす見せ方を呈している。それはそれで美しいとも言えるが、けれど自然的でない作られた美しさは今ひとつ迫力に欠ける。

眠りにつく以前の記憶がどうしてだか判然としないが、そう感じるからには自然体の持つ迫力というものを身を持って知ることのできる環境に身を置いていたのではないかと思う。想像するのは簡単だが、けれどどうしても眠りこんだ原因を探ることは難しい。

事故、過失。偶然起こつたことか必然的に起こされたことか、それすら断定は難しかった。体に残る痕跡は全くと言つていいほど見られないことから、おそらくは心因性の健忘。故に医師や庇護者から芳しい情報は得られなかった。とすれば、この一族の半端者が頼りと思つたが、誰一人として目ぼしい情報を教えられたものはいなかった。

そんなことを思い出していると、ふと足音が多く響くことに気づいた。広い庭で、しかも高々足音だ。遠くの音が響いてくるとも思えない。そうしているうちに段々と複数の足音が近づき、音の数だけの見知らぬ人間が垣根を作つた。

そしてあつけなく私が羽交い絞めにされても従者殿は従兄殿を庇い謎の男たちと格闘を続けた。頑張れ従者殿。ここで従兄殿を護り

できれば想い成就はすぐそこだ、などのんきなことを考えていると、男たちの怒声がさらに焦りを帯びて強くなるのが伝わった。

「何してる、狙いは檜崎の後継者だけだ。足止めだけして早く散れ！」

主犯格らしき男の声を境に、男たちは従者殿に一斉に取り掛かり、残った声の主が従兄殿へと取り掛かった。

ああ、馬鹿な奴等め。

男たちは数に任せて従者殿をやり込めると、目的とする人物を取り違えているのにも気づかず撤収を始めた。

くずおれる従者殿を目にした従兄殿の悲痛な声を聞きながら、腹の痛みを堪えて必死に男等の顔を目に焼き付ける。

男たちは浅はかだ。長年眠り続けていたらしい私が、何よりも自失を恐れることよって気絶せずにいられたことに気付かなかった。そして標的の顔すら知らず、立ち位置のみで従兄殿を私と勘違いして連れ去ってしまった。

男たちは浅はかだ、そして愚かだ。それ故に決して従兄殿が私でないことに気付かれてはならない。愚か者は己のミスを目の当たりにすると何をするか分からない。それは推測ではなく、確信として知っているようだ。

何としても従兄殿を無事に取り戻さねば。その思いだけで痛む腹を抱え、従者殿を起こすべく這う。

内心に、味わった覚えのない、具体的な焦りと恐怖が渦巻く。この思いを、あの従兄殿にも味わわせるわけにはいかない。彼には今のまま、無垢のまま置いてほしかった。

従兄殿と従者殿の行く末を見届けることが、私の最大の楽しみであるのだから。



観察者の底意地(コメディ?) (後書き)

(2009/02/07)

猶予（シリアス）（前書き）

ブログ短編

## 猶予（シリアス）

その呪文を口にしたら、今のこの関係が終わってしまうのは知っていた。

けれど言わずにはいられなかった。もしかしたら、ほんの少しの可能性にかけてみたかったのかもしれない。

呪文が空気に溶けて、なじんで消えてしまう、その寸前。彼はクツと口端を歪めてこう言った。

”俺も好きだよ”

こうして俺の呪文は完成した。刻一刻と、俺には期限の分からない時計の砂が、音もなく積もり始めた。

+++++

まっすぐ向けられずその視線が、いつもとは違う色を決しているのを見逃すことはなかった。

いつもは嚴重に隠し通しているそれが、今は真摯なまでにぶつかってくる。

それが意味するものを俺は知っている。そして俺がそれに答えられないことも。

これは賭けだったのかもしれない。俺が抱く、報われることのないこの想いを振り切るための。あるいは、ほんの少し残された罪悪感だったのかも。

けれどあえてその答えは見つけない。なぜならそれは、意味のないことだから。

普段から好ましく思っていた人物からの精いっぱいのを、俺は俺のために利用する。

そんな己を嘲笑いつつ、これから投げる言葉を止めようとは思わない。

そして俺は、彼のあどけない赤らみが失せるその様を見届けた。

ほんの少し疼いた胸の内には気づかぬふりで蓋をした。

+++++

彼との日常は、それまでと変わらずに繰り返された。

俺が笑い、話しかけ、そして彼がゆるく笑んで言葉を返す。

それまでと変わらないようできて、確実に内側を苛む罅は乾いたそこに領土を増やしていく。

放っておけば、それはいつか崩れてしまうだろう。けれど、その時に起こすだろう俺の行動は、俺の望むものではなかった。

嘘で固められた彼への、俺の意地もあつたのだろう。

胸に広がる罅を上から塗りつぶすことで、俺はそれを食い止めることにした。

上塗るそれすらからからに乾いていることも知っていたけれど、ほんの少しでもこの偽りの幸せを長引かせることができるなら、俺も俺にうそをつき通すことくらいなんでもないと考えた。

それはいつしか、痛みという感覚を、俺のうちから消し去ってくれた。

+++++

もともと仲の良かった人間との今までは違った日常の共同は、それほど苦もなく受け入れられた。

彼から向けられる無垢の笑みは、深く根付いた俺の傷を否定するのではなく、その傷ごと包み込んでくれるような暖かさでもって浸透する。

深すぎた傷は大きな痕を残し俺を苛み続けていたが、彼に触れた指先から癒されていくような気すらした。

このままでもいい。この傷と、その源となる過去を含めてすべて俺なのだ。

否定し、否定され、自らの膿だと思っていたそれなのに、今は殆ど抵抗なく受け入れることすらできるようになっていた。

古傷は時折ひどく俺を苛むけれど、その度に脳裏に浮かぶ彼の全てが、涙に乗せて浄化して行ってくれた。

内心の変化は周囲の認識も変化させていたらしく、以前は考えられなかった輩が俺の周りを囲い始めた。

まるで新世界のようなその状況は俺に新たな光を見せてくれたが、それにつられて煩わしい輩も呼び寄せてしまう。

俺にとっては煩わしく迷惑でしかないそれが、彼の堰を切るその大きなきっかけになってしまったことを、俺は愚かにも彼に告げられるまで気付くことはなかった。

+++++

彼が変わった。

それは悪い方向にはなく、むしろ良い方へ。けれど俺には歓迎できない方向へ。

俺は別に、あの頃のいわば退廃的な空気をまとわせた彼だから惹かれた、というわけではない。竹馬の友人であったのなら、むしろ喜んで受け入れたであろう、この変化。けれどその光あふれた世界に繰り出す彼の姿は、あまりに眩し過ぎてその背中さえ俺から隠してしまった。

それまでの彼と同じ、どこか気だるげな仕草は、せれどそれまでとはまるで違う事柄に苛まれているようだ。

それはあまりに健康的で、そして世にあふれた若者特有の色をしていた。

彼との在り方に、このまま彼と共にいることに、それは影を落としはしたが決別の決定打とはならなかった。

俺を打ち抜いた弾丸は、そんなものではありえなかった。

++++

ぶつけるのではなく、放たれるのではなく、まさに零れるように落ちた言葉を、俺は最初、正しく受け取ることができなかった。

真っ赤な染料が白い布へじわじわ浸透していくように染み入ってきたその意味は俺にかつてない感覚を起こさせた。

信じられなくて、否、信じたくなくて聞き返せば、今度は否応なく突き付けられた言葉が誤りではなかったことが知れた。

何故、と聞き返すことはできなかった。

それは俺が持ちえた最後の分別だ。彼を最初に踏みつけ、その気持ちごと碑に縛り付けたのは他ならぬ、俺自身だ。

けれど、それでも。しかし。身勝手な欲求による言葉を、理性が打ち消して口だけが無様に喘ぐ。

俺は彼に何一つ答えられないまま、けれどそれを彼はあの笑みでもって受け止めた。

無償のものと信じたその笑みで、同じように俺の全てを受け入れた。

そう、思った。

俺の無言の葛藤を受け、彼は静かに背を向けた。

彼は何一つなじることなく、俺の愚かささえも受け入れたのだ。

+++++

日常は変わらない。

太陽が昇り、暖かな日差しは地上に息づく者すべてに平等に降り注ぎ、そして安らかなる慈しみの光に変えて日々を繰り返す。

そう、日常はそう簡単に変わらないのだ。それについていくか否か、個人の都合はそこには関係がない。

彼との決別に対し、後悔を覚えたことはない。

始まりからして不自然だった、一方的に擦れ違う互いの都合のうち、片方が消滅すれば自然ともう片方も同じ道をたどるのが道理だったのだから。

彼は、当初の目的ではないにしろ、俺という塗布を有効に使いきったのだ。そして様々なものを目にし、手に取ることもこれからは自由だ。

けれどその中に俺は入っていくことはできない。効果の切れた塗布は宿主の目に届かないところへ行つて二度と目に着かない個所に身をひそめるべきだ。

だって、近くにあればそれはいらぬ波を宿主の心に起こしてしまふかもしれない。そうでなくとも、無用となつた身でいつまでもまといつけば疎ましがられることだろう。そうはなりたくなかつた。

自ら離れるのが、最後の矜持でもあつた。

以前ならそんなつまらないものよりも痛みが少ない”今”をとつただろう。

そうならなかつたのは一重に、俺が彼との関係で得た、たつた一つの成果のおかげだ。

この胸は何も感じない。何故なら、しんしんと落ち続けていた時計の砂はもう、残っていないのだから。

+++++

彼は知っていた。一度失えば、二度とは手に入らないということ  
を。

そして。

彼らはまた、知らず同じ過ちを犯したのだ。

猶予（シリアス）（後書き）

（2009/06/15）

時（シリアス）（前書き）

ブログ短編 前話（猶予）関連

## 時（シリアス）

彼はあけすけに言えば、情に薄い性質だった。

彼自身を取つても、彼の周囲を取つても、そう言えるだろうと思  
う。

俺と彼とは幼いころから住まいが近く、近所に同年代の子供もい  
なかつたことから遊び相手と言えば互いしか知らなかつた。

今でこそ意外と思われるが、彼はそれは内向的な性質で、当時の  
俺も唯一にして貧相な遊び場へ行くよりも手近な庭などで遊ぶ方を  
取つて、ともにいる時間の大半を互いの家のどちらかか度過した。  
彼には歳の離れた兄が一人おり、俺が彼の家へ訪ねるときたま  
対面することがあつた。あの人はすつきりとしすぎて近寄りがない  
顔つきの割に、俺を見つけると控えめながら笑みを浮かべて構つて  
くれる人だった。

彼にするように俺にも応じてくれるあの人を、おれ達は違わず兄  
と呼んで慕っていた。

近所住まい故に日が沈み切つた後まで入り浸ることも多かつたが、  
彼の家で彼と兄以外のだれかを見たことはなかつた。

そんな家の中から、突然兄が消えた。

彼の両親が別れたのだとは後から聞かされたことだが、当時の俺  
たちにはそんなことは理解できなかつた。

彼は最初のころこそ泣きじゃくり、それが止むと哀しそうな目を  
して時折ここではないどこかへ意識を飛ばしているようになったが、  
ある日を境にそう言った色が一切かき消えた。

彼に何があつたか、ついに口を割らなかつた彼に、俺は追及を諦  
めた。

それから少しして入学した小学校は、ほんの一本の路地に邪魔さ  
れて別々の学舎へ通うこととなつた。

それでも互いの一歩の友人と言えば変わりはなかつた。互いの通

う学校やそこでできた友人の話。今思えば何がそんなに、と疑問にすら思うほど些細な差異を俺たちは楽しんでた。

けれどやはりそれぞれ身をおく環境の差は無視できず、学年を上げるごとに顔を合わせる日に間があいて行つた。それは仕方のないことだと理解していたし、全く合わなくなつたわけでもないのだからとその時はあまり気に留めなかつた。

彼の二度目の変化に気付いたのは、中学へ上がり、再び共に過ごす時間が増え始めた折だ。

普段は何でもなく見える眼差しに何か違う。そう、靄のようななんととも言えないものが宿ることがあり、けれどそれが現れるのはほんの一瞬で、次の瞬きで消えてしまうようなものだった。

思いすごしかと思つたのはほんの短い間だけ。けれどその僅かな間に彼自身のまとう雰囲気にも変化が現れ、気づけば彼は俺にすら滅多に本心を見せることがなくなつていた。

なぜ、どうして、何があつた。そう問いただしたかつたし、困惑したままでいる気もなかつた俺だが、偶然漏れ聞いた彼と女性との告白とも懇願とも脅迫ともつかないやり取りで大まかなことを悟つた。

彼はそれを受けても平然と受け流し、室の入り口で鉢合わせ倒れに対しても薄く笑うだけだった。

俺はこの時、彼にとっての俺の新たな位置づけを悟つた。

彼はそれから表面上は俺の知つている彼であり続けた。その遠まわしな拒絶は確かに俺を痛めつけたけれど、俺は彼から離れることはできなかつた。

それは決して、彼のためになりたいとか、支えたいなんておキレイ感情ばかりではなかつたけれど、俺は俺なりに彼とのあいだにできてしまった溝を埋めることに没頭した。彼も多分、それを許す程度には俺を受け入れてくれたのだと思う。

どちらかが無理を通して成り立たせ続けるような、短くない時間

を俺たちは共に穏やかに過ごしていた。

結局それは俺がいつからか抱いてしまった感情によって破たんしてしまっただけだ。

それでもおかしなことに、おれ達は互いと過ごす時間を他の誰といる時よりも多く持ち続けた。それは不思議な均衡を保ってあり続け、今も崩れることなく触れ続けている。

俺はともかく、彼がこういった関係を続けることは苦痛ではないのか聞いてみたことがある。

絶対不動のものだと思っていたものを無くし、曖昧で不確かな理不尽を突き付けられることを嫌い、けれど何も要らないと突っぱねる強さまでは持たない彼だ。その痛みは今も昔も俺の理解を超える。今でこそほんの一握りの安らぎを得たようだが、この状況は彼が望むものではないと思っただけだ。

けれど彼は笑みを刻むだけで答えようとはしなかった。代わりにくれた熱は背に回るときつく俺に巻き付いた。

あれ以来、事あるごとに小さな声で紡がれる言葉がある。いや、何もなくても眉をよせてそれを絞り出すこともしばしばだ。

彼はきつと、再び失うことを恐れているのだと思う。裡に迎え入れ、深く根を張ったそれが引き抜かれることも朽ちることは、彼でなくともひどい苦痛を感じるのだらうから。

だから俺は彼を安心させるよう腕を回して返し、その背をあやすように軽く叩く。

誰かにはそれが子供をあやすようだからかわれ、俺も同意を示すと彼は抗議するように拘束を強めた。

けれどそれは確かに幼子のそれだと、半ば確信して言える。彼には幼いころに受けた傷が大きすぎたのだ。それを癒すためのこれはある種の退行なのだらう。だから人目があるうと気に留めず、己のうちにも切り切る。二度と離れないように、しがみつく。

決して離さないために振りも言葉も選ばないのだ。

だって今の彼は子供なのだから、どんな残酷なことだって平気で

できる。

俺にだけしがみつくのほ、俺が昔から続く最後の線だからというだけだろう。それでも、過去見過ごしてできなかったことを今してやれるのなら、俺にはこの時を何よりも幸せに感じる事ができる。

時(シリアス)(後書き)

(2009/06/16)

## ラプンツェル

その塔には扉がなかった。

近郊の村に住む幾人かの若者たちは暇を見ては塔へ赴き、内部への入り口を探る。そこには好奇心などと悠長な動機はなく、あるのはひたすら日々の糧を得る足しになる何かがあるのではないかという堅実な願っただけだった。

けれどそこには遙か高所に空いた物見窓が一つあるのみで、進入路となりうるウロも仕掛けも見つけることは出来なかった。そして若者たちはあるかどうかも知れない不確かな糧よりも、地道な労働を選び帰路へ着く。

幾組か目の若者たちがそれぞれの持ち場へ戻るのを見ていた、どこか疲れた顔をした中年の夫婦は彼らの辿って来た方向へ視線を向ける。

村の周辺一帯に群生した常緑樹からひとときわ高くそびえたつそれを、人々は幸呼の塔と呼んだ。

白く細い月が冴え冴えと天に君臨する頃、地上のどこよりも空に近い窓からスルスルと下ろされた何か。それをたどり、一つの人影がゆっくりと塔を上がっていった。夜虫も眠るこの頃、周囲にはかすかに縄の軋むような音が漏れ聞こえてくる。

しかしそれもやがて途切れ、辺りには静寂が戻った

「んもー！ばあ様、またふくよかになられたんじゃないのっ？さつきから首がぎっしぎっし言ってもげちゃうんじゃないかって冷や冷やしたんだから！」

「相変わらず口の減らない子だね。あんたのその馬鹿みたいに長い髪の手入れを誰がしてやってると思ってるんだい。道具もなにモアタシが揃えて来てやってるってのに感謝の一つもないってのか

い。全く、親の顔を見てやりたいね！」

「ばあさまがこんなところに閉じ込めるから悪いんでしょ！私だつてできることならとつと出て行ってやりたいわよこんな所。第一！私を親から引き離れたのは自分の癖に、どの面下げてほざくんだけこの厚顔婆ア！」

轟くのは月の化身とも見紛うばかりの髪の毛の長い少女と、深い皺が幾筋も刻まれた、小柄ながら背筋の伸びた老女の声。双方から発せられる言葉は外見から激しく差があった。

月の冴える神秘の夜が、こうして罵詈雑言の応酬に彩られていたことを、誰も知らない。

また別の夜。

長々と埒のない応酬を終え、本来の目的遂行へ移った。只でさえ体力と根気のいる作業を前に、体力を温存しようなどという考えは二人の中にはない。互いに肩を大きく上下させ呼吸を繰り返す二人の様子はとても他人とは思えぬほどに似通っていた。

「いたたたたたたたたつ！ばあさま引つ掛かっている引つ掛かっている！もつと優しく梳いて！」

「このくらい我慢おし！大体何だいこの髪は。毎回丁寧に世話してやっけるって言うのに途中でちぎれているわ艶はないわ傷んでいるわ。喧嘩でも売っているのかい？」

「だからっ、ばあ様がこれでもかっつてくらい引つ張るからじゃないの、登るときに！私だつてつやつやくきゅーていくるな髪の毛の方がいいわよ」

「文句があるんなら自分で登ってごらんよ！アタシみたいな年寄りにはただでさえ辛いつてのに、これ以上を求めんじゃないよ」

「嫌よ、やるわけないじゃない。だって私高いところ大っきらいなもの」

「全くなんて子だろうね！恩を受けながら仇で返すなんて、とんだ恥知らずめ！」

こうして、今宵も月の静寂は脅かされる。

「ねえはあ様。もうさ、私、腹くくりにしたわ」

「いきなりなんだい、藪から棒に」

いつになく穏やかな夜。赤みの増した月がやわらかく夜を包んでいた。

「だから、腹をくくりにしたの。あのね、別に突然言い出してるわけじゃないのよ？ずっと考えていたの。ばあ様ももう年だし、いつまでも私の面倒を見させるわけにはいかないでしょ。というか、本当なら私の方がばあ様を世話するべきなのよね」

「…おかしなものでも食ったのかい？アタシの持ってきた食い物に問題はなくても、腐らせたのを意地汚く食ったとか、生えてきたキノコを食って当たったとか」

「誰がそんなことしますか！っていやいやそうじゃなくて。…だからね、決めたの。私、ここを出るわ」

「……何だつて!？」

「そもそもきつく編んだ髪が地面まで届くのなら、髪を切ってしまうても編み方次第で長さの問題なんてなくなるわけよねっ。それでも包丁で切るのはちよつと不安だったからばあ様の持ってきてくれるはさみを待ってたのよ」

「ちよつとお待ち！何を考えてるんだい！」

「あつたあつた。えーと、とりあえず背中くらいまで残ればいいかな？すぐ伸びるし」

「お待ち！あなたの髪はアタシのお気に入りなんだよ？それを切るなんてあんまりじゃないかい？」

「ええ、じゃあここから出たらまた伸ばしてあげるわ」

「馬鹿なことお言いでないよ！その質の髪が一体どれだけ手間がか

かかると思っているんだい！ろくに日の入らないここだからその程度の痛みで済んでいるんだよ！一日中日に当たるようになったら、どれだけ値が崩れることになると思っっているんだ！」

「……………」

「……………」

部屋の中に不穏な静寂が漂う。

「やっぱりそういうことなんだ？ばあ様」

「……………」

「おかしいと思っただんだ。時々、毛先を揃えるには過ぎるくらい切られてると思っただもの。…そう、私はやっぱり金づるなのね」  
うつむいた少女に、目を彷徨わせつつも終いにはそれを座らせてから少女へ向け直した老婆は口を開く。けれどそれは映した少女も満面の笑みに、いつとき音を失う。

次いで、その音を吸い込み、飲み込んだ。

「そんな事だろうと思っただわよ、ゴウツク婆ア」

金属と硬物がぶつかる音の後に衣ずれに似た乾いた音が響く。それはもしかしたら持ち主から離れた長髪が丈夫な柱に縛り付けられる際の音ではなく、呆然とするしかない老婆のうちから生まれる音かもしれない。

そんな老婆をしり目に、着々と身支度を整え終えた少女はこれまでにないほど神々しく、晴れやかな笑みを養い親だった存在に向けた。

「それじゃあ、もう会うこともないだろうけど元気だね。本当は背負って降りてあげたいけど、荷物も重いしばあ様だったらしぶとい人だから放って行くわね。あ、ばあ様って私がまだ幼くて騙されやすかった頃にいた小屋にまだ住んでいるのよね？ため込んでいる財は手切れ金代りにもらっていくわ。ああそれから、この髪は選別にここに残して行ってあげるから、せいぜい高値で売ることね。それじゃ！」

窓の縁に足をかけた少女はいったんごくりと唾を飲み、極力下を

見ないよう、けれどすばやく塔を降りて行った。

突然のことに呆けていた老婆が我に返り、住み家へ戻った頃には蓄え続けた財どころか値の張る主な家財道具の一切が忽然と消え失せていた。

とある森の中に、程高い扉のない塔が建っていた。

近郊の村の誰もが近づこうとしないそこを、人々は幸乞の塔と呼んだ。

リブンスヘル(後書き)

(2010/10/5)

蛍（前書き）

夏祭りの夜、河原で遭遇したのはいつも目にしてきた少年。  
けれども彼の纏う雰囲気は普段とは違うもので…

## 蛍

初めてヤツと視線を交わしたのは、一年前のこの河原だった。

その日は年に一度、夏祭りの開く日だった。

台風のせいで延期はしたが中止にするという選択肢はなかったらしく、例年より五日遅れての開催となった。

この祭りは寂れた田舎町にしてはかなり大きなイベントで、毎年町の外からも大勢の人が遊びに来るほどだ。町の方でもこれを貴重な収入源にしている、その年ごとに様々な趣向を凝らしている。

けれど十二の時都会から越してきた俺には、街の喧騒を彷彿とさせるこの祭は少々苦手だった。

家においても絶えず雑音が聞こえてくるため、祭りの日は決まって町の外れの河原に行くのが自然と習慣になった。そこは傍らに広がる木林が吸収するのか、祭りの象徴ともいえるお囃子の音や賑々しいざわめきすらも滅多に届かない。

俺がその河原を気に入っている点がもう一つ。それは花火がよく見えると言うことだ。

花火は空で見るもの、けれど俺は下を見る。水面に映る火の華は流れのせいで揺らめき、酷く幻想的だ。誰もいない河原でその様を独り占めできるのはこの上ない贅沢だとは思わないか。

午後十時。そろそろ祭りが終わる。足を少し速めて河原に向かう。誰もいない、静謐に満たされた俺の聖域。

けれどそこには先客がいた。

身じろぎもせず、真っ直ぐに一点を見つめてヤツは立っていた。

今まで一度としてなかった状況に、一瞬ホカンとなる。

なんというか、その光景はある種荘厳で、俺が立ち入ることは許されないかのような神聖な空気に思えた。そんな錯覚を植付けるほどにその人物は張り詰めた空気を纏っていた。

だからその人物が見覚えのあるヤツだと気付くのが遅れた。何故なら学校で見るヤツは、ヤツを傍目にでも知っている者が見れば戸惑うほど纏う雰囲気違ったからだ。

俺の見知る限りヤツはとても活発で、校庭や中庭、果ては廊下などの屋内ですら友人たちと戯れては教師陣にお小言を貰い、それでも平然と笑っているような少々傍迷惑な存在だったはずだ。

今日だって日程は終業式だけだと言うのに、いつもと同じように友人連中と陽気にドッチボールに興じていたのを図書室のカウンターから何とはなしに見ていたのだ。

元来頼まれると断れない俺は委員でもないのにカウンターに立ち、唯一の気晴らしの彼らを目で追ううち、自然とヤツの顔を覚えた。

別段特筆するほどの容姿のきらめかしさはない。けれども本当に心から楽しそうに遊びに興じるヤツの明るい笑顔は、太陽光のせいだけでなく一際眩しく目を惹き付けた。

そのヤツが、だ。まるでそれまで俺が見てきたのは幻だといわんばかりの無表情を晒している。

こいつ、こんな顔もするんだ…。

だんだん俺はこの光景を見ているのが辛くなってきた。それは多分、じつと俯くヤツの目が哀しみを宿しているのに気付いてしまったからだろう。でも僅かな身動きすらこの空気を壊してしまいそうで、どうしたものかと案じているとヒュルルと間の抜けた音のあとに破裂音が響いた。

ああ、花火だ。

毎年の密かな楽しみを不意にするのは惜しいが、この場を離れるにはまたとない助け舟ではある。この音に紛れて戻ろうと踵を返す。

ヤツの注意を引かないようにそつと後退し、確認のためにちらりと振り返る。

ヤツの目は花火には向いてはいなかった。その目線はヒタ、と俺に向いていたのだ。

思わず心臓がドキッと跳ねる。

その不意打ち的な視線を受け俺は大いに慌てた。慌てすぎたのと暗くてあまり安定してるとは言いがたい足元のせいで見事にスツターンだ。

俺がいたのは雑木林の外れで、そこは川にかけてやや傾斜している。そのろくに障害物すらない傾斜を俺の体はゴロゴロと転がって転がって、ヤツのすぐ傍でやつと回転地獄から開放された。

けれどあまり強くない三半規管は今の眩暈をすぐに処理するには少々役不足で、俺は自分のおかれた状況を把握するのに暫し時間がかかった。

ようやくと落ち着いてきた俺のごく近くで空気が途切れ途切れに漏れる音が聞こえてきた。

「普通あんなに慌てるかな…」

いつも切れ切れに聞こえていたのとは違う、しつかりとした少し低めの声。

それを聞いた途端意識がはっきりした。苦笑交じりの声に反感を持ったからではなく（いや、それも全く無いじゃないが）その声の近さにだ。

声は俺の真後ろ、耳に息がかかるほど近くから聞こえ、あるう事か脇の辺りからはニユツと俺のものじゃない腕が生えている。

有り体に言えば、後ろから抱きつかれている状態だ。

その体勢に再び慌てた俺は急いでその腕の中から逃げようとしたが、腹に回された腕はさつきよりもきつく俺を押さえつけてきた。

なんでどうして、いつから気付いて。いやそれよりこの体勢は何だ何事だと半ばパニックになり、手足をばたつかせる俺を苦も無く更に拘束しつつヤツは楽しげに話しかけてくる。

「盗み見してたんだからこれぐらい我慢してくれないか、山岸くん？」

当然のように名前をよばれて硬直する。恐る恐る振り返りいぶかしむ俺を見て艶然と笑みを返すヤツには、先程の雰囲気は少しも残っていない。俺の見間違いだっただのかとも疑うほど空気が違っていた。

そんな俺の違和感をよそにヤツは俺の顔を覗き込んでくる。

「こんなところで何を…。ああ花火か」

ここは穴場だからね、と一人納得している様子だが俺はこの状況に全然納得がいかない。

「…離せよ」

「ん？何で？」

何でって…、居心地が悪いからに決まってる。よくも知らない輩に抱えられて大人しくしている趣味はない。思うだけでなぜか言葉にならないのがもどかしい。

顔を真っ赤にして口をパクパクさせるだけの俺を見てまた少し笑い、

「ちょっと感傷に浸りすぎた。悪いけどちょっとだけこうさせて」  
などと辛そうに言われれば俺は強く出れなくなってしまう。

抵抗をやめたが体中を硬くしたままの俺にアリガトと呟き、そのあと肩に思いのほか柔らかかな髪の毛の感触と微かな重みを感じる。

そのままヤツは動きを止めた。手持ち無沙汰になった俺はというと益体もないことに考えを巡らす。

先程の雰囲気は確かに今のコイツには無い。だけど毎日のように目にしてきたヤツでもない。

今、俺を抱えてるのは酷く不安定な存在に思える。伏せられた瞼の震えを微かに感じるし、暗がりの中でぼんやりと見える俺の腹に置かれた掌は、その大きさによらず頼りなく映ってしまう。

想像してたより大きい掌。長い指の感触や背中の熱を薄い夏服越しに感じ、微妙に居心地が悪い。なのに身じろぎすら我慢している

俺を自分でもどれだけ人がいいんだと情けなくなってくる。

「今日は眼鏡じゃないんだな」

ぼそりと言ったヤツの言葉でいつも掛けてる眼鏡が無いことに気づいた。大方転んだときに落としたんだろうが、この暗さでは探すのも無理だろう。

何でそんなことを知っているのだろう、ああそういえば俺の名前も知っていたし。もしかして同じクラスになったことがあったとかか？いやいや。流石にそれなら俺も覚えてはいるはずだ。

俺が何気なく見ていたように、ヤツも俺を見ていたのだろうかとも思ったが、それだと名前までは知られていたことに説明がつかない。調べればわかるだろうがそこまでする理由は、見ず知らず並みに関係すらない俺たちの間には見当たらない。

…もしかして知らずに恨みでも買っていたのだろうか。

なかば疑心暗鬼に陥り答えを返さないでいると独り言のようにヤツが呟く。この近さで無ければ聞き逃していただろう声で。

「山岸、毎日図書室にいるよな。あんまりよく見かけるから気になつてツテ使つて聞いてみたけどさ、友達に頼まれるんだって？そんな頼み断ればいいのに何で引き受けるんだろうって思ってたけど。

…なんとなくわかった」

なるほど。そんな理由で興味をもたれたのかと思うと同時に本気で情けなくなってきた。俺は人に何か頼られると、余程の事情がなければ断れない。もともとの性質でもあるが、引越してきた当時からここでの暮らしに慣れるための術として、それはますます顕著になった。今だつてそのせいでコイツを突き放せずにいる。きっとヤツはそれに気付いたのだろう。

何で俺はこう、意志が弱いんだと憂う俺にヤツは吐息だけで、山岸は人より優しさの度合いが大きいんだと囁いた。

それを耳で受けて思わず背筋をびくつかせる。

なななんて声出すんだ、と背筋に走った悪寒に目を白黒させる俺。妙に落ち着かない声音で更に言い募るヤツ。

「ずっと気になってたんだ。どんな奴なんだろうって。何が好きで何が嫌いなんだろう。怒るとどんな顔するのか笑ったら可愛いかなとか。他にもいろんなこと想像した。気がつくとも目で追うようになってたけど、いつもどうしても声が掛けられなかった」

言われたことには微妙に引くかかるとも含まれていたが、自分はそのなにかに付き合いつらそうに見えるだろうか、さっきから落ちて着かない頭をひねる。

どちらかと言うと自分でも意識しているためか、人には警戒心を持たせないやつだと言われることが多いのだが。

「ここはね、俺の友達が死んだところなんだ」

その突拍子もない告白にそれまでの思考が吹っ飛ぶ。いきなり何を言い出すんだ、この男は!?

「俺とは幼馴染で、ちよつと思ひ込みは激しかったけどよく気が合ったし、一番仲のいい友達だった。けど、あいつは違う想いを俺に持ってた。なんだか裏切られた気分だったんだ。当然俺と同じでいてくれるだろうと思ってたのに、そうじゃないって否定された。それに怒って頭に血い昇らせて怒って喧嘩して。俺はあいつの気持ちを受け入れらずに拒絶した。それから…」

「あの」

言いかけた言葉はぎゅつとしがみついていた腕が止めてしまった。微かに漏れた言葉は痛々しくて、息が苦しくなるほどの締付けはきつとコイツが感じてる苦しみと比例するんだろうと思う。けど。

酷なようだが俺に語られても困る。俺はその人を知らないから、共感してやることもコイツの重荷と一緒に背負ってやることも出来はしないのだ。

俺に出来るのはしがみついてくる腕を振り払わず大人しくしてやってやることぐらいだろう。でも、だんだん腕に加わる力が増してくる。息をするのも苦しくなってきた、思考力が追いつかなくなってきた。

それに気付いたのかヤツは俺を抱きしめる腕の力を抜いた。思わ

ず漏れた溜息にヤツが苦笑する気配。

「でもな、これまで全然わからなかったあいつの気持ちが今になってやっとわかったんだ。多分、今の俺とおんなじような心情だったんだと思う。だから、あの時の俺の行動がどれ程あいつを苦しめたかわかる。…山岸」

呼ばれて軽く振り返る。奴も今まで回していた腕を取り、俺はヤツと向かい合う体勢となった。そこには少しぼやけて見えるが、月明かりを反射する強い意志を込めた一対の瞳がある。

いつの間にか花火の音はやみ、聞こえるのは水の流れる微かな音だけ。

祭りの余韻や虫の音すら不思議なほど聞こえなかった。

静寂が、辺りを包みこむ。

最初に感じた荘厳さが蘇ってくる。けれどさつきほど居心地の悪さを感じないのは、俺がこの空気の一部であるからか。

それまで真一文字に閉じられていた唇が開き、覚悟を込めたように硬い声が空気を揺らす。

「俺は幸せになってもいいだろうか」

” あいつを拒絶した俺に、その資格はあるのだろうか ”

唇だけでそう呟くその聞こえないはずの声が、俺には聞こえた気がした。

コイツの背負うものは俺には見えない。

その幼馴染とやらとの関係も、死んだという経緯もまるでわからない。

正直、コイツ自身の事ですらよく知らない俺が言う言葉に、どれ

だけの意味があるかなんてわかるはず無い。わかるはずも無いが。

「きつとそいつもあんたが不幸でいるより、幸せでいた方が嬉しいんじゃないか？」

だつて友達だつたんだ。

それはつまり種類は違えど、お互い相手のことを良く思っていたつてことだ。それなら相手の不幸なんて望んでるはずはないと思うのは俺だけじゃないだろう。

顔をあげて、ヤツを見る。

真つ直ぐ俺を見つめて何かを噛み締めるようにしているヤツを、だから俺も真つ直ぐ見返す。

暫く視線を絡ませたあと、ちよつと躊躇つたかのように手が差し出される。

なんとなく、それをつかもうと俺も掌を差し出す。その手を思い切り引っぱられてよろけた俺は、またしてもすっぱりヤツに抱え込まれた。

ヤツの手が背中に回され、自然ヤツよりか随分背の低い俺の頬がヤツの心臓の辺に押し付けられる。心音は穏やかに、けれど少しだけ早く脈を刻んでいる。

「山岸。俺の傍にいてくれるか？」

少しだけ掠れているように響いた声が上がらふってくる。

その低めの声は耳に心地よく、俺は無意識に肯いていた。が、一つ大事なことを聞いていないことに気付いた。

目の前の厚めの胸板を、ヤツの顔が見えるくらいまで押し返し、そのときの礼儀だろうと思ひ目線を合わせる。

そうするとヤツはどこか陶然とした様子で俯いてきた。

ヤツの少し伏せた瞳を見つめ、俺は口を開く。

「お前の名前、知らないんだけど何？」

名前も知らないんじゃないや友達になりようがないだろ。

そういうとヤツは何故か数瞬硬直し、力尽きたかのように俺に凭れかかって来た。

ヤツの体重を支えきれず、俺は無様に後ろ向きに倒れこんだ。ヤツの手に庇われ固い石に頭をぶつける事はなかったものの、運悪く左足がグキツと嫌な感じに曲がり、俺は無様に苦鳴をあげた。

その声に隠れるようにヤツも何か呟いたようだが、俺に聞きとることはできなかった。

そして今、再びこの河原に来ている。

聞けばコイツは毎年ここへ来て自分の罪とやらを思い出しているらしい。けれど、とやっぱり俺は思う。コイツの幼馴染とやらはこんな行為は望んでいないだろうと。

だってあれから少しずつ聞かせてくれた思い出話では本当に仲のいい友人同士だった二人だ。相手に寄せる純度の高いその信頼は幼いころからの付き合いだからこそ培われたものだ。そこにはたとえ多少の気持ちの誤差があれど、負の感情なんて存在すら許されないで消えていくだろう。

隣に静かに佇み、無言の懺悔を続けるその片割れをみやる。面に浮かぶのはかつて見た無表情。

ヤツの中ではきつとずっと自身は許されないのだろう。

それなら、俺が許そう。

誰がなんといおうと、おまえ自身が己を断罪し続けようと、その

たびに俺が許しを与えよう。

おこがましいとは俺も思う。でも俺以上にそれを望んでるのは他でもないキミだろう。

未だ悔恨を拭えない友人の傍を、一匹の蛍が飛んでいった。

蛭(後書き)

(2006/5/13)

嵐（前書き）

『堂』の番外編。6年前の事件の真相。

## 嵐

物心ついた頃から俺の傍にいたのは和威、お前だけだった。

母さんは俺がまだやつと歩き始めた頃、我慢の限界を迎えてこの寂れた町から出て行ったきり。父さんは父さんで仕事だ何だと俺をばあちゃんに預けたきり滅多に顔も見ない。

ばあちゃんはそれなりに良くもしてくれただけ、俺に逃げつつた母さんの面影を見るのが嫌なのか、必要以上に関わってこない。

だから本当に俺にはお前しかいなかった。

和威だけが傍にいて、家庭にモンダイがあつてその上軟弱でいじめられがちな俺を庇ってくれた。

同情でも皮肉でもなく、ただのオノサキユウヤとしての俺に接してくれた。

それがどんなに俺の支えになったかわかる？

それはそれはヒクツだったこの俺が、周りから見ても和威の傍にいるのが当然だと周囲に認めさせるほど立派な自分に変える努力させるほどに。

ねえ和威。

和威は俺のヒーローだったんだよ。

テレビの中だけの俺を助けてくれない、偽者の安っぽいヒーローなんかじゃない。

本物のキユウセイシュ。

俺の、すべて。

その和威に否定された俺は、一体どう生きていけばいいんだ？

だって友達だった。俺の誇りだった。

俺が俺でいるために、必要不可欠だったのはオレという人格じゃない。和威と一緒にいられるオレだ。

だから俺と口も利かず、他の誰かという和威を見て気がふれそうだった。

だって友達だったら嘘はつかないんだろ？

和威は俺の友達だから、だから和威の全てを俺は求めたし俺も全てを和威にあげる気でいた。

嘘はいけない。だから正直に動いた。その何がいけなかったんだ？

ああ、頼むから和威。俺を見て。

俺以外にその笑顔を見せないで。

俺の傍にいて。

…寂しいんだ。不安なんだ。

和威がいないなら俺なんて意味がない。俺なんて要らない。本当に何の意味もないんだ。

俺は立派になったつもりだった。でも”つもり”でしかなかったんだ。

本当の俺は卑屈なまま。その卑屈をうまく隠す仮面を作るのに成功しただけで、根っこの部分はまるで変わらない。変われないでいる俺に気付いた。

だからなのか？

俺は昔から変わらず、和威に全てを依存している。だからいけないの？

和威の言った、対等な相手に俺はなれていないから。

それなら俺は変わるから。

今度こそ、つもりではなく本当の中身から変わるから。

最初から完璧には無理かもしれないけど、頑張るから、お願いだから傍にいて。

俺を見て、そうして笑って。俺を、ほんの少しで構わないから、

俺を想つて。

気が違いそうなほどに和威を求める想いを体現するように荒れ狂う大気の中、俺は独り川に向かった。

和威との思い出が詰まった川だ。思い出と一緒に、弱い俺が強く根付く場所。

そこで今までの俺と決別するよ。そうしたら和威、お前に逢いに行く。

俺を変えると決めただけど、それは一人では出来ないから。きっと、また和威を怒らせることもあるだろうけど、それでも俺にはやっぱり和威が必要だから。

俺は水際ギリギリに立った。  
目を閉じると眼裏に様々な光景が浮かぶ。

この川で泳いだこと、釣りをしたこと。あの時和威はじつとしているのに耐えられなくて、直接川に入って折角かかりそうだった魚を逃がして悔しそうにしてたね。その後服をびしょびしょに濡らして帰ったせいで、二人しておばさんに叱られたっけ。冬には薄く張った氷を割って歩いて、春にはメダカを追いかけた。夏祭りの日は決まってここから花火を見た。空だけでなく川にも映る花火はそれは綺麗に辺りを照らした。

そういえば、今年はこれなかったな。そう思ったとき、轟音に紛れて和威の声を聞いた気がした。

目を開けて振り返ると、和威が何か言いながら走ってくるのが見えた。

声はここまでは届かない。けれど幾日かぶりに向けられた俺への視線に俺の鼓動は跳ねた。

和威待ってて。

今、弱い昔の俺を捨てるから、そんなに走らなくていいよ。すぐに済むから。

俺はゆっくりと和威に背を向け、右手を川に向けて伸ばす。握り

こんだ掌を下にして、一本ずつ指を開いていく。けれどそれは突然起こった強風に邪魔された。足場が濡れていたのも手伝い、足を滑らせた俺は岸に留まることができずに、川へ倒れこもうとしていた。

和威が手を伸ばす。到底届かないとわかる距離なのに、思わずという風に。

俺は思わず笑みがこぼれた。

俺を助けようとしてくれたのも勿論だが、和威が俺をその瞳に映してくれたことが何倍も嬉しかった。

多分、この激流に飲まれれば俺は助からないだろう。それでも構わないと思えるほど、今の俺は満たされていた。

ああでも、これで俺が死んだら和威は泣くのだろうか。

和威は俺のヒーローだった。だから例え俺のためでも泣いては欲しくなかった。

俺が死んでもどうか悲しまないでほしい。

涙なんかいらぬ。どうせ俺のためにくれるなら満面の笑みがいい。

独り孤独にさいなまれていた俺を救ってくれたあの笑みが。

どうか笑って。この際俺に向けたものじゃなくても構わない。だからどうか。

俺は今、これまでと比べ物にならないほどの幸せの中にいるんだ。こんな気持で逝けるのは、和威のおかげだから…

この幸福の一欠けでも和威に宿ればいい。

和威の叫ぶ声が聞こえる。俺はクスリと笑みを刷く。

ちゃんと笑っているか、見に来るからね。

それきり、何も聞こえなくなった。

嵐（後書き）

（2006/5/14）

前（前書き）

下級生の一人に告白を受け、それを断ってみたものの…

## 前

「ごめんね、好きな人がいるんだ」

別に想い人なんていやしないが、こう言っておくと大人しそうな子は引き下がってくれやすい。

そんな内心をちらとも見せずに、眉を寄せて困った顔を作り、それでも笑顔を絶やさないうような顔の筋肉を動かす。

自分より頭半分ほど低い位置にある相手の目を覗き込むようにして視線を合わせると、いつもの如く涙を滲ませた瞳と出会う。

「でも気持ちはとっても嬉しかったよ、ありがとう」

そう言っただけでやると大概は頬を紅く染めて立ち去ってくれた。その際ちらちらとこちらを振り返って行ったり一気に駆け去るなどの差はあれど、皆面白いほど同じ手順を辿る。

けれどこの子は違った。

頬を赤く染めてはいるが、瞳に涙をたたえているが、表情に悲壮感と言うものがなかった。まるで何かを耐えるように口元がびくびくしている。

どうしたのかと気になって手を伸ばそうとしたら身軽にするりとかわされて、伸ばした手は空を切った。

「わ、わかりました。それじゃ失礼しますっ」

「ちよっ」

呼び止めるまもなくその子は走り去ってしまった。

人気のない放課後の裏庭に、俺は一人ポツンと暫く馬鹿みたいに立ち尽くしてしまった。

自慢じゃないが事実なので言っただけおつ。俺はモテる。

男女の別なく誰にでも好かれ慕われ、高校にあがって二ヶ月もし

ない内に告白を受けた数は両手両足の指では足りなくなつた。

二年になつて半年ほどたった今では、その数を覚えていることは難解数式を解くよりも難しいことだつた。

それは恐らくこの容姿のせいだと自覚している。隔世遺伝で俺に色濃く流れる祖父の外国の血のせいで色素は薄く、パツと見では外人と間違われることも珍しくない。手足は純粹な日本人より長めで、身長も図書館の最上段にも難なく手が届くほどにある。けれど俺は人目を惹きつけるこの容姿が嫌いだつた。

元々人見知りをする性格だつたのに周りはそれに構わず寄つてきて好き勝手喋つては、俺のノリが悪いとわかると勝手に幻滅して悪し様に離れていく。

何も悪くない筈の俺が何でこんな目に遭わなくちゃいけないんだと、負けず嫌いの蟲が目覚めて表面上笑みをたたえることで彼らを見返してやることにした。

すると効果は絶大で、ただでさえ年齢以上に見える見た目と落ちて着いた秀囲気を醸す笑顔は俺に神秘のヴェールを与え、周囲をさり気なく敬遠する武器となつてくれた。

その効果は今も変わらないが、高校生が相手となるとどうにも当たつて砕けるな駄目元告白根性を刺激してしまつらしい。最近はその打開策を練つているが未だに妙案は浮かばない。

と、話は戻つてあの不可解な告白後の逃走劇から数日。俺はよくその告白相手を目にするようになった。

同じ学校に通つているのだから当たり前のことかもしれないが、それまでその他大勢の中に埋没していた彼が、あの一件で他といつしよくだに出来ない印象を俺に植え付けた。

気にしてみると彼はよく大勢の友人といつて楽しそうに笑つたり怒つたりとしているが、廊下ですれ違ふときなど俺に気付くと必ずあの時と同じような表情になる。それが更に俺の興味を引いて、彼を気にとめ続ける材料となつた。

とある夕方、帰宅途中で課題プリントを忘れたことに気付き学校に戻ると丁度彼とその友人たちの一群を見つけた。

風の流れのせいかチラツと流れてきた彼らの会話の中に俺の名前が聞こえた気がして、ふらりと彼らの後を追って歩き始めた。

「…つかし…やるよな、お前も」

「うつさい…まえらが…?」

「罰ゲームとは言…ったよ。褒めて…る」

「ダーツ止めるこの馬鹿!」

なんだ、何かおかしい。罰ゲーム?褒める?

もしかして、とある予想が立つが、あまりに腹立たしい予想にあえてそれは拒否する。けれど…

「…もさ、ほんとにそんなこと言ったのか?」

「言った言った。いかに…さしそーな顔して、いかにもな台詞でさ」

「ありが…、嬉しいよハニイ…」

と、声の主らしい一人が彼に抱きつくジェスチャーを取る。途端に笑いが起こり、それに紛れて気持ち悪いだとか何だと言っている声が届く。

決定的。

且つ、屈辱的な事実が目の前に広がった。

恐らく彼らは校内で知名度の高い俺に告白してくると言う罰ゲームを掲げ、勝負にたまたま負けた彼がそれを忠実に執行して俺に告白してきたのだろう。そして俺の返答の一言一句を笑いものにして…と。

「ふ、ふふふふふふふ…ツクソ!」

俺は自分の内に徐々に広がる巨大な怒りを自覚するが、それを抑える気はまるで起きなかった。

俺は誰かにコケにされるのもそれを放置しておくことを是とするほど心が広くない。しかもそれが最近俺の気に止まって仕方なかった彼であれば尚更だ。

気に止まる切欠はともかく、その間に変質してきた心の内には目を向けずにおく。

今はただひたすら、どのように彼を見返すかそれだけを考えて策を巡らし始めたのだった。

前（後書き）

（2006/6/5）

## 後

スタスタスタ。  
カツカツカツ。

ダツダツダツダツダツ。  
タツタツタツタツタツ。

「つああもう！なんなんですか！？」

「何って何が？」

しれつと返すと途端に眦を上げて彼が睨みつけてきた。

俺はその反応に内心ほくそ笑みながら、表面上は万人が贅辞する  
笑みを称えて見返す。

「俺はただ家に帰ってるだけだけど」

「…先輩の家、駅の反対じゃないですか」

「あれ、知っててくれたんだ」

「そんなの誰でも知ってることです！何で毎日毎日俺のあと付いて  
来るんですかっ」

「それをわざわざ俺に言わせるの？」

俺を騙した負い目からか、グツと口を引き結ぶ。けれどそれは長  
くは続かずに、直ぐに反論してくる。

「相手振る度にこんなことしてるんですかっ？」

「まさか。君だから特別だよ」

俺を欺いた君だから特別。そんな本音を隠して言ってるやると彼は  
ポカンとした後、急に青白く顔色を変えた。

そんな表情の変化を起こす彼がとても面白くて、更に何か言っ  
たりたくなるのを苦勞して堪える。あまりいじめすぎると後々の楽  
しみが減ってしまう。

そう、俺はこの彼との掛け合いを楽しんでいる。

最初は混じりけなしに仕返しだけが目的だったけれど、正直それは充分果たされたと思う。

遊びの的にされた仕返しに、彼に付きまといだしてから早二ヶ月がたった。

その間所構わず彼を追いかけ付きまとい、端から見れば満面の笑みで彼の傍にい続ければ必然的に周りの目を引くはずだ。となれば今まで俺に振られた数多の生徒の目にも留まるはずで、その中の過激で強気な誰かからイヤガラセが壹月ほど続いているのを実は黙認している。

イヤガラセといつても大したものじゃなくて、手紙とかこれ見よがしな陰口ばかりで実害がないものだ。

そんなことよりも今は彼の反応を楽しむ方が優先順位は上だ。彼は驚くほどよく表情が変わる。怒ったり照れたり嫌がったり丸ごと顔に出ているのに本人はそれに気付いていないのがまた面白い。彼をからかう楽しみが出来てしまったせいで、壹月で終わるはずのこの計画はズルズルと延長し、今尚続いている。

今日も今日とて飽きもせず一年の教室へ、彼を迎えに行く。

最近では終業後すぐに行かなければ逃げられることもしばしばで、俺は足早に渡り廊下を抜ける。この学校の作りは特殊で、正規の方法ではこのあと更に階段を二階分上がって西棟へ行き、天井がガラス張りとなった廊下を抜け昇った分の階数分階段を下りて更にいくつかの角を曲がらないと一年棟には辿り着けない。まるで迷わせるのが目的かのような作りに入學当初は辟易したが、その経験は抜けど道を見つける糧として充分役に立った。

そうして時間を短縮している際、幸か不幸か見上げた三階の廊下の窓に目的の人物が歩いているのを見つけた。

…何のイヤガラセだ！正規ルートを通っていればすぐにも捕まえることができたのに！！

すぐさま手近な窓から校内に戻り（教師に見つかれば説教物だが、

そんなへまはしない。彼の行き先に見当をつける。あの廊下の先には特に教室などはなかったはずだ。とすると…

俺自身はあまり利用しないその施設の扉をそつと開けると、まず衝立が目に入った。

それを避けて静かな室内を端から歩いてみて回る。他の学校は知らないが、うちは学力向上のために図書室にはコンピューターが備え付けられた個室がある。まずはそこを一つ一つ見てみるが、空振りに終わった。

放課後のただでさえ利用者の少ない室内には、見る限り彼の姿はない。

ここへ辿り着く途中、例によって人気者の俺は見知らぬ生徒に呼び止められるという足止めを食ってしまった。急いでいるからとすげなく断ろうとしたが、尚も食い下がってきて中々諦めようとしないう相手を説き伏せるのに苦労した。

もしかすると彼はもう用事を済ませて帰ってしまったかもしれない。

けれど最後に回った共有スペースの隅に、彼のものらしき鞆を見つけて思わずほつと溜息が出た。恐らくこの奥の書庫で調べ物をしているのだらうと目星をつけ、書棚を巡る。

見つけた。

地理学の書棚の間で彼はこちらに背を向けている。

彼の驚く様が見たくて、俺はコソリと足音を忍ばせて近寄っていた。けれど…なんだか様子が変だ。彼の華奢な肩が時折小さく跳ねている。

「もしかして…泣いてるのか？」

無意識に呟いた言葉に大きな反応を返し、あまつさえギヤアとかワアとかよくわからない奇声を発して彼がこちらを振り返った。ただでさえ大きなどنگり目を更に大きく見開いて、思いのほか大きなリアクションにつられるように、俺までなんだか焦ってしまう。

「なつ何でここにいるんですかつ!？」

「君で遊ぼうと思っ…!」

「……俺で、遊ぶ…?」

しまった。と思ったが時既に遅く、意表を突かれてこぼれた本音に、常にはない彼の腹の底から出た低い声が震えている。

「俺はあんたのおもちじゃじゃない!!」

「え、ええと…。と、図書室では静かに…」

「うるさい!表に出ろ!」

どこかで聞いたような安っぽい台詞、ではあったが、実際どこか切れてしまったような彼のその言葉に俺は静々と従う形となった。

もしやと危惧した涙こそなかったが、彼の瞳は赤く潤んで泣き出す寸前のようにも、怒りすぎて血が天辺まで上り詰めているようにも見えた。どちらにせよ俺にとっては望ましくない状況だ。

柄にもなくずんずんと音がするような歩みで彼が向かったのは屋上だった。何故またこんな吹きさらしの場所なんかへ来たのかと沈黙に耐えられずに適当に訊いてみると、突然俺へ向き直った。気のせいに思いたいくらい彼の眉間には皺がよっていて、且つ口元もヒクヒクと痙攣しているのを、俺の健康すぎる視力はくまなく見て取ってしまった。

「…これ。なんだと思います?」

ポケットから出てきたのはくしゃくしゃになった紙くずで、彼が先程書棚の間で見ていたものだわかる。

「ええと、ラブレター?」

「違います」

二べもない。確かに色事の手紙にしては真つ黒と言うのは不自然すぎだ。

「じゃあ不幸の手紙とか…?」

俺は少しでも空気を軽くしたくていつものものそつのない笑顔を浮かべようとすが、幾分引きつった不自然なものになってしまう。

「近いけど外れ」

素っ気無さ過ぎる返答と一緒にその封筒が投げ寄越される。

自分で確かめると言う意味だろうと書簡を開け、中身を確かめるとそれは…

「…」

「何で俺がそんなもの貰うんでしょうね。付きまとってきてるのは先輩なのに」

なんとというか…それは良くぞ飽きずにここまで書いたと逆に感心してしまうくらい、細かい字で延々と書かれた”呪”の文字がびっしり紙面を埋めつくされている。芸が細かいんだか知らないが、文字の太さを変えて浮き出るように大きく「一文字」死」と見えるようにまでしてある。

あまりの執拗さに乾いた笑いが零れそうになってしまっが、これを自分宛に貰ったとするなら気持ちのいいものではない。

「なんていうか……。個性的だね」

「そんなこと訊いてません」

「き、貴重な体験を」

「これで八週間連続です。この意味わかりますか？」

「ええつと、記録挑戦、かな？」

いつになく平坦な彼の口調に、背筋いっぱい冷や汗を流しつつしばらくくれてみる。すると彼の方からブチツと擬音が聞こえる錯覚を覚えた。

「あんたのせいだっって言ってるんだよ！いい加減俺に付きまとっのは止めてくれ！こっちはもうウンザリしてんだよ毎日毎日毎日知らない相手からやっかまれたり羨まれたり絡まれたりっ！あんな自分の影響力わかってんのかよ！？」

「…もちろん」

「尚悪いわこのうすら馬鹿！！！」

ぜいぜいと息を切らし、血走った目をこちらに向ける彼は正直ちよつと、いやかなり怖い。

けれど一方的に言われてばかりでいるほど俺が悪いわけでもない。

俺にだって言い分はある。

「も、元はと言えば君が」

「ああつ？」

「答だ……。どうしよう本気で怒ってる。」

「だ、だって君が俺を遊びの種にしたのがいけないんだろうっ？」  
なけなしの気力を総動員して言い放つ。けれど口調には覇気より弱気が滲んでいるのが嫌でもわかり、辺りには俺の情けない声が少し響いてすぐに消えた。

彼は数秒考える素振りをしたが、すぐに眉間に新たな皺を戻してさつきよりは幾分落ち着いた声で話し出す。

「あんなの、気に触ったなら直接怒ればいいだけじゃないですか！  
そうすれば俺だって素直に謝ったし、こんな思いしないですんだっ」  
感情が高ぶったせいか、彼はほんの少し涙を滲ませる。雫となつて零れそうになるところで顔に似合わない荒々しい動作で目を擦つてみせる。けれど一度弛んでしまった涙腺からは、あとからあとから涙が湧いてきて止まる気配がない。

無意識に彼へと伸びた俺の手は彼の拒絶を受けて届かなかった。  
「仕返しならもう充分でしょ。もうおもちやにされるのはごめんだ」  
もう用はないとばかりに俺の脇を抜けて校内に戻ろうとする彼の腕を、反射的に掴む。振り払おうと彼はもがくが、話してたまるかと俺も抵抗する。

「待って、俺はおもちやだなんて思ってないっ」

「うるさい離せ！」

「話を聞くまで離さない」

じたばたと全身で俺を拒絶する彼を、後ろから抱きつくようにしてここに留める。

「痛っ。ね、頼むから話を」

「あんたの話は耳が腐る！」

あんまりな言いようにカッとなって、気付けば俺は彼の口を塞いでいた。

一瞬だけ動きが止まる。それでもすぐにくぐもった声での抗議と抵抗を再開するが、俺は拘束をとかなかった。彼も暫く抵抗していたが、いつこうに解けない腕と息苦しさに負けたのか、次第に大人しくなってくる。

「あ……」

抵抗が止んだのを期に少しだけ口を離すが、すぐさま今度はさつきよりも深く唇をつなげた。

彼の薄いが甘く香るような唇を柔らかく吸い上げ、綻んだ隙間から中へと入る。唇の裏、歯の一つ一つの並びを確かめるように辿り、奥で縮こまった彼の舌を絡めとる。

耳に届くのは唾液が触れ合うクチュクチュと言う濡れた音と、かすかに呻く彼の苦鳴と衣擦れの音。俺の胸を押し返そうとする抵抗を封じるため、更にきつく彼を抱きすくめると必然口付けもより深くなる。

「んんっ」

深く重ねた唇の端から飲み込みきれない唾液が零れだす頃になると、抵抗しか滲んでいなかった彼の声に甘いものが混ざりだした。

そのあと更に彼の口内を蹂躪したあと、名残惜しく数回啄むように唇を吸い、ようやく彼の顔を見やる。酸欠のためか羞恥のためか、はたまた快樂のためか。赤く色づいた顔の上で目はとろんと垂れ、濡れて充血した唇に思わずドキリと心臓が跳ねる。

俺は今まで感じたことのないその感覚に、自分で驚く。まさかとは思うが……。いや、でもそれならどうしてこうまで彼を傍においておきたいと思うのかの説明がつく、か？

「わ、ちよつと……！何っ!？」

真偽を確かめるべく、腕に抱いた彼の体のあちこちに触れてみるがどうにもよくわからない。ならばキスでもしてみればわかるだろうかと思いい、顔を近づける。が、それは彼の渾身の一撃によって未遂に終わった。

「痛あつ、何するんだい？」

「それはこっちのセリフだよ！あんた今何をしよう…いや、何したのかわかってんのかよっ？」

「口止めだけど」

「何がとまるってんだよっ！！」

「何がって、君の言葉が」

そういうと彼は怒ったのと困ったのと呆れが混ざったような複雑な表情になった。

俺は彼の口から続きの言葉を聞くのがいやだった。だからとっさに口を塞いだけなのだが…もしかしてさっきのは。

「そうか。でも全然いやじゃなかったしむしろ…」

「何独り言いつてんだよ」

ふて腐れたみたく呟く彼に、俺は満面の作り物ではない本心からの笑顔を向けてやる。

「いつもの意地っ張りも良いけど、そういう喋り方も本音で話してる感じで可愛いね」

「はあ！？」

「どうやら俺は君が好きみたいだ」

につこり微笑んで言い放つ俺を、啞然とした風に彼が見やってくる。

おかしいな。俺がこういうと大抵みんな感極まって喜ぶのに。照れてるんだらうか？

ポカンと固まったままの彼に、今度は邪魔されることなくキスをする。軽く触れるだけのキスにびくりと肩を震わせた彼はすかさず俺を遠ざようと腕を張るが、俺はしっかり彼を抱えた手を離さないよう力を込める。

「ちよつとちよつと、そんなに照れなくても」

「照れてない、嫌がつてるんだよっ！！」

「あれ、キスは嫌い？」

「そつちじゃなくてっ」

「じゃあもつとしてあげよう」

「ギャアアアはなせえっ!!」  
放課後のもはや誰も残っていない校内に、彼の雄叫びが長くこだました。

「ね、もう少しゆっくり歩こう?」

「…」

「ほら、おあつらえ向きにそこにベンチなんかもあるしさ」

「…」

「そんなにつれないとここでキスしちゃうけどいいのかな?」

数日間のやりとりで彼が人前でのキスを嫌がることを覚えた俺は、こう切り出せば彼が振り向くのを知っていた。

例の如く顔を赤らめて上目遣いに俺を睨んでくる。その様がなんとも可愛くて思わずチュツと口付けると、彼は更に顔を赤くして件のベンチの後ろの日陰溜まりまで俺を引っ張っていく。

「俺についてくるな!」

「うーん、きけないなあ」

「迷惑なんだよっ」

「もうイヤガラセはなくなっただろ?」

「それでも邪魔なんだよっ、もう構ってくるな!」

言うだけ言って走り出そうとする彼を羽交い締めて止める。

ほんとうに、今までにない反応ばかり返してくる彼は面白い。そんな照れ屋な彼も可愛いが、やはり俺が一番好きなのは素直な彼だ。それを引き出すべく彼にこちらを向かせ、顔を近付けようとしたところで、思いつきり踵で爪先を踏まれた。

「…流石に痛いんだ、けど」

「じゃあもうこういう事しようとするなよ!」

「うう。…じゃあこうしよう。キスは暫く我慢するから、そっちももう逃げないって約束して」

うんうん唸って長らく苦悶した後、渋々といった体で条件を承諾した彼に、俺は内心ほくそ笑む。

暫く…。そう、暫くなら俺だって譲歩する。だけどあくまで暫くだ。もうしないとは言っていないので暫く経てば約束は果たされる。少しばかり公平じゃない約束だったと彼はいつ気付くだろうか。

気付いた後の彼の反応を想像すると、こみ上げてくる笑みを止めることはできなかった。

後(後書き)

(2006/6/14)

光陰（前書き）

取り壊される旧校舎に通いつめて、遭遇したのは…

## 光陰

がたがたと立て付けの悪い扉に負けまいと力をこめて横に流すと、細かな塵を落としてつつも観念したようにガタンともう一度鳴いて、後は静かに滑り出す。

薄く埃の積もった中に一直線に伸びた道を踏みしめ、その疎らに散った足跡を一つ一つ掻き消すように一つの壁の前へと進む。

びたりと道の絶えた目の前には壁。そして壁の前には大きなキャンバスが年老いたイーゼルを玉座に鎮座していた。

僅かに傾いでいるが少しもその威厳を損なわない風体を、今日も私は時が許す限り見つめ続けるのだった。

私がここへ通うようになったのは、そう前の話じゃない。きつかけは、そう。じわりじわりと進んでいた老朽化で、遂に起こった崩落事故の有様を面白半分に見物に来たことだった。

元々この旧校舎は取り壊される予定ではあった。けれど仕事の遅い機関の常か、予定は未定とはつきりした日取りはまだ組まれていなかったのだ。新校舎も随分と前に完成し半ば物置として使用され続けていたここへは、既に殆ど人は寄り付かなくなっていた。場所は取るが解体費が嵩むよりはマシとでも思っていたのだろう学校側は、半年前までその考えを変えることなく日々朽ちていくここにごんな形であれ手をかけることはなかった。

そんな時、所用でここへ来たらしい教員と生徒数名が事故に遭った。階段が、その重みに耐えられずに崩れたのだ。

それは死人が出なかったのが不思議なほどの事故で、学校側は保護者や教育委員などからそれまでの放置状態を激しく責められた。

そうして今、ここの寿命は来月末に定められたのだ。

忍び入ったその先で、私がこのキャンバスと出会ったのは偶然だ

った。

最初に目を奪われたのは鮮やか過ぎる色彩。けれど派手だとはまるで思わせない色使い。なんと、言えばいいのかわからないが、それがそうあるのは当然で、そうあるべきだからこの姿…とでも言うのか。上手く言えないが、派手だとか地味だとか、そんな後付の言葉をつける余地も湧かないほど真っ直ぐに身の内にその印象を叩きつけるような、そんな絵だった。

それがどうして運び出されもせずに使い古された画材と共にここに置き捨てられているのかといえば、それは恐らくこの傷のせいなのだろうと知れる。

この”綺麗”な絵に不似合いとも取れる、斜めに走った大きな虚ろ。けれどもそれが何故だか私にはこの絵の魅力に見えてならなかった。

この傷がなければ、ただ綺麗の標本のような絵だとしか認識できなかったと思う。でもこの傷が、この醜悪な壊死と美の同居するその不安定さが私を惹き付けてやまなかった。

このままこの絵がここで朽ちるのは惜しいと心底思った。しかし運び出すのはあまりに大きいそれ。

なら…。

せめて私の記憶にだけでもずっとこの姿をとどめておこう。この空気も場の匂いも受ける威圧感もそのまま、可能な限り全てを私の中に息づかせよう。

記憶とは曖昧なもの。どんなに欠けたものであれ、記憶にとどめられたものは美化という磨耗に苛まれてしまう。けれどこの絵に磨耗は存在しない。これは初めから、いや、逢瀬を重ねることにその印象をより強く認識させる極限の化身だったからだ。

静寂が満ちる。

置き捨てられた時計は既に止まっていて、この静謐を破ることはない。

視線と一緒に絵の作者の心情が一体どんなものだったのだろうか  
と思考を巡らせる。

筆の置き方、はらい方、色の溶き方などの些細なものからそれを  
探る。思う以上に鏡となるそれらは彼、もしくは彼女の裏側を伝え  
てはくれないだろうか。穏やかに激しやかに始点へと続くはらいの  
流れ。やがて一筋の激流となって大海へ流れ出し、そして何れ一つ  
の大きなそれに同化する。その先にあるものこそが私の思考の終着  
地なのだろう。

追うように幾筋もの視線を主流に向けて流していく。

けれど、いつも辿り着くのは何か欠けた模造品のそれ。些細な、  
ともすれば見逃してしまいそうな違和感がこれまでと同様拭えず胸  
にわだかまる。

それが何か。わからない何かを求めて、再び流れを追い始めるの  
だ。

視界の端で、風に揺すられた落ち葉が舞う。

けれど届いたのは風を孕む音ではなかった。

重みに軋むその音は明らかに人が立てる複数の足音。

どうやら件の崩落跡を見に来たようだが、聞き飽きたそれを気に  
留めることはせず流れを追うことへ集中する。

件の現場はこの部屋のすぐ横、丁度このキャンバスの裏辺りに  
なるだろうか。毎日のようにここへ通う私には既に慣れてしまった  
音だ。みしり、と軋む一定のそれが単調に響く中、けれど時折聞き  
慣れぬ異質の音が混ざった。

束の間気を取られたそれが何か考えつく前に、足音は件の階段へ  
と辿り着く。

そして

一際大きな音がしたかと思うと、いつの間にか目の前に板張りの

木目が現れた。

ぱらぱらと降ってくる埃や塵と一緒に鈍い痛みが私が転んだことを教える。耳に届く落下音が、ようやく二度目の崩落が起こったことを悟らせた。

私は咄嗟にキャンバスへ目をやり、間を置かず身を馳せた。

その巨体はすぐ後ろからの衝撃に傾ぎ、今にも崩れた壁に押し潰されそうな様だ。未だ作者の心意を読み取れないそれをまだ壊れさせるわけにはいかない。

それに。同じ時間を長く過ごしたその友をやはり失いたくはなかった。

轟音が暴力となって降り注ぐ中で、私は必死に縋り付いたキャンバスと共に夕日の中から切り離されてしまった。

空気が煙っていて呼吸が苦しい。

どこかから呻くような声があるのは先ほどの集団の誰かの声か。けれどそれはここから随分と遠く聞こえる。

それなら、私にのしかかる柔らかな体は誰のものだろう…。

「こんにちは」

すぐ傍で放たれたそれに向ける、視線の先。

そこには人骨が、しかも何の支えもなく頭をもたげてこちらを覗き込んでいた。

頭でも打つたのだろうか。いや、それにしただってこんな夢やら幻覚を見る理由はない。最近ホラー映画やら理科準備室に行った覚えもないし人体標本を見た覚えもない。

頭蓋骨の細部までを覚えているはずもなければ腐敗の巻き戻しのように徐々に肉付いていく様を想像することができるほどの構築力

は、多分ない。

ならこれは現実なのだろうか。

でも、そんなはずはないだろう。そんなことより、さっき転んだ拍子に打った肘と重いものに挟まれたような左足が痛い。

「どこか痛いの」

…頼むから話しかけないで欲しい。

声をかけてきた心地良い音程の発信源に意識を向けなかったために他のことへと気を巡らせる。

先ほど聞いた声の主は無事だろうか。この崩落の音は外にいた者へも聞こえただろうか。そもそも外には誰かいたのだろうか。誰もいなかったら、少しまずいな。怪我人はいるだろうし春とは言え夜はまだ冷える。助けが来るのが遅ければ風邪をひいてしまう。ああでも、ここであの絵と少しでも長く過ごせるのなら、それは悪いことでもないかもしれない。

このままの状態が続けば必然私の方が絵よりも早く朽ちるだろうが、それからでもゆっくりあの絵を鑑賞できるだろう。未練があるのだからここに留まることはできるはずだ。

そして肝心要のキャンバスの容態に思考が移ったそのとき、眼前から伸ばされたひやりとした手が頬に触れる。

反射的に向けそうになった視線の端で、クス、と零れる吐息を捉えた。

「大丈夫。俺は無事だよ」

そう言って笑う様をさすがに無視することは出来ず、観念して声の主に目を向ける。すると思いのほか近くにあって秀麗な顔が綻び、ややきつく吊った目元がふわりと和らいだ。

「あなたの心配なんてしてない」

意図しているでもないだろうに絆されそうな笑みに負けまいと、やや気を張った言葉に返って来たのは感情の読み取れない微笑。居心地が悪く感じ、そしていつまでもこうしているわけにもいかない。と瓦礫と、この得体の知れない人物から離れようと体を動かした。

けれどそれはより深く被さってきた彼と、頭のすぐ上に落ちてきた塊とに阻まれて断念を余儀なくされる。

「大人しくして。動かなければ多分そんなに危なくはないから」  
「話力ケナイデクレマセンカ」

予期せぬ落下に心臓が破裂しそうな鼓動を刻む。あれが頭に当たっていたらと思うと、先ほどの考えがどれほど向こう見ずだったのかが知れて血の気が引いていく。その上こんなわけのわからない存在に気を裂くことなど今は到底できるはずもなかった。

それなのに、横向けた視界には彼のものらしい腕が映り込む。剥き出しの腕は筋の付き方さえもが見て取れる。どうみても、普通の人の腕だ。

「俺はもつと話をしたいな。さっきようやく友達だって認めてくれたことでもあるしさ」

嬉しそうに話かけてくる声が気に入らなくて、睨みつけるように再び視線を彼へと据える。そうして紡ごうとした言葉は先に彼へと奪われてしまった。

「俺が何かはわからなくても見当はついてるだろ？それならわざわざ説明する必要はないんじゃないかな」

「そんなの、信じられるわけないでしょ」

「なら信じなければいい」

何を言われたか一瞬わからず、ぽかんとしている間に更に言葉が紡がれる。

「見たモノをどう思うかより、どう感じたかを信用すれば？絵から探すより俺を見てた方がきつとすぐ見つかる」

あなたがここへ来てくれてた理由はそれだろう、と続けられた言葉に反発以外の何かが混ざりこむ。まるでそれがわかった様子で彼が再び笑みを刷いた。

「俺は朔。始まりの名だ」

「はじまり……」

反復すると彼は少し皮肉気に目元を眇めた。その視線に晒されて

いることに居心地の悪さを感じ、私もぼそぼそと名乗り返す。

動くに動けず、顔を突き合わせている相手を無視し続けるのも何だか居た堪れない気持ちになって、ぼつぼつとだが答え始める。その内に時間は経って、どうやら完全に日が沈んで夜の訪れを迎えたようだった。

状況に変化はなく、時折誰かのくぐもった声が聞こえるきりで救いの手は未だ現れない。

「ユエ？寒いのか？」

至近距離にいるためか、微かに震えた動きが伝わったのだろう。心配げに見つめてくる眼差しが妙にくすぐったく感じて虚勢を張って否定する。すると若干気に触れることを呟きながら、朔の腕が緩く私を抱きこんだ。

私の首をくすぐる頬も、私が触れる朔の首筋も少し冷たい。

これじゃ余計に寒いなと笑うと、朔も苦笑い返ししてくれる。

「ずっとね。ユエとこうして話してみたかった」

「私は話したいなんて思ったことなかったよ」

「思いつかなかったただけのくせに」

そんなの当たり前だ、とすまして答えればそれはそうだとまた笑い合った。けれど小さく落とたくしゃみの音が、道連れのように笑みの余韻を掻き消した。

無言になった朔の顔は見えない。代わりに映るのはずっと見続けてきたキャンバスの裏側。表と違い、ただ静かに梓木を晒すそれからは何も読み取ることはできなかった。

「俺はね」

表情の伺えない声が耳をくすぐる。それを覗くことはせず、正面を見据えたまま私は小さく相槌を返す。

「ずっとユエを待ってたんだ。ユエみたいな子が俺に気付いてくれるのを、ずっと、長い間。でも待ちくたびれて、その間にあいつはどこかへ行っちゃった。俺はあいつを追わなきゃならない。だから体が必要だった」

緩やかな風が瓦礫の間を吹き抜けた。それに乗って微かに外の喧騒がここまで運ばれてくる。

「少しずつ集めてきたけど、もう俺には時間がなかった。だからちよつと強硬手段を取ったりもした。けど、一番必要なものはなかなか手に入らなかつたんだ」

朔が僅かに身を起こすと冷えた空気が入り込む。そのことに朔にも温みがあつたのなだと、どうでもいいことを思った。

届く喧騒はやがて忙しく方法から寄せられ始める。

胸に、夜風とは違う冷たさが触れる。けれど私はそれを払いのけようとは思わなかつた。それは暗がりでも明らかな彼の表情のせい、だつたのだろうか。

悔しいが見惚れてしまった彼の唇が小さく動いた後、故意とわかる無表情で告げられた言葉を私は黙って目を瞑ることで応えに換える。

最後に残つたのは一瞬柔らかな温もりが鼓動に重なる感触だつた。

あの時告げられたことが本当なら、彼はいつか再び私に会いに来るだろう。

それを疑うことは決していないが、時々ふと不安になる。

彼はきつと会いに来る。あんなに長い時を、ただただもう一度彼の半身に会うことのためだけに費やしてきた彼だ。私に植え付けた約束の種を摘み取るとは思えないし、それは私が許さない。

朔はいつか必ず現れる。

その時を迎えた私が、果たしてこの私の姿であるかはわからないけれど。

早く来い。

逢いに来い。

私の時間はあと僅か。

光陰(後書き)

(2007/3/26)

## おまけ

遠くから近付いてくる足音が、何故だか掻き消されることもなく耳に届く。

鼓膜の中に残った音と共に無尽に跳ね回るそれは閉じ込める壁を蹴る毎に大きく強く、確かに響く。

ここから聞こえるべくもない音。

聞こえるのは、それが空気の震動とは違うものだからだろうか。

呼ばれた気がして、閉じていた瞼を薄く開ける。

視界に映ったのは変わりばえない見慣れた天井だった。再びゆっくり虚像を押しやり、けれど間を置かず迎え映す。

目を開けていることにすら疲労を覚えるのにそれを何度も繰り返しては天井に映写された水と光の戯れを見つめる。

まるで合わせ鏡のようだ。

瞳はその奥の眼窩に映る全てを正し、水はそのまま逆さにそれを投影する。あべこべのようでいてだからなのか妙に心地良い光の悪戯に、もういつぐらいぶりかも忘れてしまった柔らかさが息を還した。

あれはいつのことだっただろうと振り返ってみても正しく思い浮かべることが出来ない。あれから私はまどろんばかりだ。今日がいつだかとして定かではない。

途切れ、出会ってまた途切れ、繰り返される鏡の逢瀬。

私だけ煩わしい盾の守りに包まれるために途切れてしまうそれが、何故だか妙に口惜しかった。

同じだけ違うもの、それを認めたくなくて逢瀬を断ち切る。

いつそのこと私までもを潔く断ってしまえばいいのに。いつかと

同じようなことを考え、けれど今の私は例え出来ても、実行しない自分を知っている。

ざ…と、風が草を薙いで奔る。

煽られて、僅かに開いていた窓から小さな水滴が頬と触れ合う。

冷たい風よりほんの少しだけ温みのあるそれが、縫い合わされた瞼を優しく促した。

同じものだけど違うそれは、今度は断ち切られることなく私と交わる。

視線の先には、以前とは違う笑みをたたえて、それでも変わらず私を映してやや吊った目元を和ませる。

「心配した？」

からかう口調に微笑みながら衰えた腕を彼の頬へとゆっくり伸ばすと、焦れた彼の手が私のそれをギュッと握った。

私はもう一度笑みを刷いて、オカエリナサイとすまして言った。

触れ合った彼の手は温かく、私はまどろみの中でいつまでもその熱を感じ続けた。

おまけ(後書き)

(2007/3/27)

t r y s t (前書き)

喧騒を外れた中庭での再会

はしやぎざわめく人並みを外れて、俺は一人校庭の隅に移動する。既に日が落ちた広い校庭は、それでも夜とは思えない明るさに照らされていた。

何の変哲もない学校の変わり映えのない月末の夜。本来ならばとうに下校時間を過ぎていている頃合いだが、この高校の唯一の特徴とも言える校風のためにこの騒ぎは容認されている。

この私立校を建てた主は幼い頃から海外で育つたらしい。成人する頃にはもうこちらへ戻ってきて久しかったようだが、三つ子の魂百までとはよく言ったものだ。刻み込まれた生活習慣は年月を重ねても消えずに残り、帰国してからずっと窮屈な思いを強いられてきた影響か、ここの校風には彼の愛する自由とやらが大きな顔で蔓延っている。

そしてそれを助長しているのが交換留学生の存在だ。一学年で高等部では十人前後、中等部でも五、六人もいる彼ら彼女らによって持ち込まれた母国の風習は、刺激に飢えている在校生のかっこうの遊びとなったのだ。クリスマス然り、バレンタイン然り、ハロウィン然り……。

中等部の頃はそれなりに楽しめもした。聖堂のステンドグラスもパイプオルガンの音色も、キューピッドの仮装をした滑稽な生徒の催しも、高等部に進学した今、目新しさはない。けれどそれとは別に参加すらしなくなった理由が俺にはあった。

元々騒ぐよりもそれを傍観している方を好む性質だと自覚はあった。一緒に行動をする仲間たちからも常に一步退いてなりゆきを見ていた。勿論それを悟られないよう、調子を合わせもしていたが。

けれどたった一人、そんな俺の偽りを見抜いた奴が、いた。

そいつは他の奴らのようにただ青いだけの眼ではなく、光の加減

でうつすらと紫を帯びたように見えることがあった。そのほかにこれと言った特徴の浮かばない、おとなしい奴と言った認識だった。いや、おとなしいどころではない。陰気で根暗な奴だと思っていた。そいつが俺以外の誰かと話をしているのを、ただの一度も見た覚えがなかったからだ。はじめのうちは互いに何の興味もなかったはずだ。俺は当然のように面白みの欠片もない奴に目も合わせなかったし、奴も俺の知る限り常に俯いて呆とするばかりであったはずだ。知り合うきっかけとなったのはほんの些細な、けれども俺たちにとって何物にも代え得ないできごと。

それを境にあいつは姿を消した。

正直、それが俺にどれ程の衝撃を与えるのだと侮ってさえいた。限られた僅かな時間のみ同じ空間に存在していた。たったそれだけの相手が突然いなくなったとしても、それは中等部の頃から体験してきたことだ。違うのは代わりとなる人間が現れなかったことだけ。そんなことは今までとて気にしたことはなかった。個が変わろうが全体は何も変わらない。俺の周りにさえ影響がなければ仮面を纏い、一人高みに立って周りを観察し続けることに何の影響もなかったのだ。

なのになんだ、この、感覚は。

仲間同士で話していても、他の誰を観察してみても満たされない。脳の一部が、感覚が、備わっていた機能の何かが欠如してしまっただかのような、そんな心地悪さが絶えず襲ってくる。

ソレを持って余すようになつた俺は徐々に不快感を募らせた。何をしても、何をされても満たされない。水を欲してやまないのに、目の前に大きな湖があるというのに、今一步のところでは手に入らない。手に入れて口に含んだとしても、とたんに肉体が消失して骨だけの体になって受け止める臓器をなくしてしまったような。

欲しい。なのに手に入らない…。

俺は初めて執着と言う衝動を覚えたのだ。

明かりをそれていく俺を気にかける存在はない。いつの間にか消えてその他の一部になってしまっていた。

けれど俺にはもう、どうでもいいことだった。求めているのはそんなものじゃない。ソレは、この先にこそいる。

ソレに引き寄せられるように足を進める。もう光も届かない、暗闇の跋扈する植え込みを越え、その更に奥にある中庭を目指す。

間違いなくそこにいるはずだ。他でもない、今日この日だからこそ、いないはずがない。

本来人が通る場所ではないため雑多な草の生い茂る道を苦労して進む。行く手を遮る枝を手で払い、幾歩も行かず立ち止まる。

見間違える筈がないその場所に確かに目指したものを見つけたそのとき、俺の中に今まで味わったことのない、体が震えるほどの衝動が駆け巡った。

「久しぶり、だね…」

「…」

「…怒っている、の？」

「…」

「だって、元は君が悪いんじゃない」

こいつにしては勇ましいセリフだが、震える語尾が怯えていることを示す。

俺は言葉を返さずに、ゆっくりと一歩ずつ距離をつめていく。

「できるものならやってみるって。でなきゃ何をするかわからないって、そう脅しつけたのは君でしょう…？だから」

俺が進むに合わせて後退していた背中が木に触れて止まる。

すかさず残りの距離をつめて奴の逃げ場を奪うと、声音同様に怯えた眼が俺を映す。辺りは暗く、外灯さえない中でそれがわかるのは、こいつ自体が淡く光を帯びているからだろう。

「だから証拠を見せたんだらう？俺の感情の一部を切り取って」

「…悪かったと思ってるよ」

「そんなことはどうでもいいね。それより何故いなくなった？俺の一部を持ったまま俺の前から消える必要まではなかったらどう？」

「……」  
俺の代わりに黙り込んで、視線すら外した奴に、俺はイライラを逃がすように盛大な溜息をつく。するとびくりと肩を揺らしてボソボソと言葉を落とした。

「本当に、悪かったと思ってるよ。脅かされたからってやっていいことじゃなかった。これは返すから、お願いだからもう怒らないで。そう言っただけあげた手のひらの上にちよこんと小さな箱のようなものが乗っていた。一見してなんでもない箱だが、それには開け口も切り目も無く、薄っすらと光を帯びて見えた。」

あの時俺から切り取られた感情の欠片。確かにそれは俺の内面を映し出したような歪んだニビ色をしていた。

俺が失って、身も背もなく求めたもの。

伸ばした手は箱を通り越して奴の青白い首筋を掴む。

「お前、こっちに戻ってくるのか」

問いかけた声に返されるのはただ戸惑うばかりの視線。

構わず続けた声に今度こそ言葉が返ってきた。俺が望む、

「もう、戻れない」

是とは逆の応えが。

どこかで予想していた応え。けれど予想外の衝撃を齎す応え。

「…それならそれはいらぬ。煮るなり焼くなり好きにしろよ」

「そんな、駄目だよ！受け取ってくれなきゃ困る…！」

「俺の望みが叶わないのに、お前の望みを叶える義理はないね」

口元だけを歪めて言い放つ俺に、奴はヒクリと喉をつめる。

それを見て、確かに俺の中に何かが浸透していく。

「俺は死に際まで、絶対受け取ってやらないからな」

「広く浸透して行くもの、それは決して悦びではない。それは、俺の歡喜は奴の手の中に収まっている。」

だからこれは支配欲だ。

求め求めて、いつしかすり替わってしまった求めるものを手に入  
れたいと願う感情。

元々青い顔から更に色が消え、涙すら浮かべたこいつは、余程の  
ことがない限り俺に箱を返すまで消えて逝くことは出来ないだろう。  
それは少なくともこの一年で立証されている。

期限はおおよそ一年。その間に奴に新たな未練を植え付けてやれ  
ばいい。

俺が未知の感情を手にしたように、きっとずっと変わらないもの  
なんて何一つ無いのだから。

t r y s t (後書き)

2007/4/9)

## Tag(前書き)

tryst の数年後。やり取りの終着点

「君は、ほんとうに嘘ばかりだね」

響いた声音に一瞬、まるで木偶のように体が硬直する。

聞き違えるはずのないその声にまさかと思い、同時に疑念が浮かぶ。何故今この場所にいるのか、あの日以外には一度として姿を見せなかったと言うのに、何故。

驚いて振り向いた先には見誤るべくもない、あいつが、いた。

翳した手さえ見えない深い闇の中、やはり淡く体を発光させ俯いた様を露わにするあいつに俺はゆっくりと近付く。

「君は、ひどい嘘つきだ」

俺を素通りする全く威力のない言葉を投げつけられながら、それでも俺は言葉を返さずにゆっくりと一歩ずつ距離をつめていく。

いつかも同じように近付いた、湧き起こる既視感。けれどあのと  
きと違い、あいつは俯いたまま後退りはしなかった。

一歩、また一歩と確実に歩を進める。しかし一向に縮まらない距離に自然と早足になり、それでも全く進む気配のない暗闇にだんだんと焦りが募るのが嫌でもわかった。

「ときが来たら受け取ってくれと言ったじゃない。なのに」

「受け取るなんて一度だって言ったことねえよ」

そんな俺など気にも留めず放たれた言葉にいらついで乱暴に返した俺に反応し、ようやく俯いた顔をあげた。

久々に見るその顔に浮かんだ表情に、渦巻いた苛立ちが引いていくのがわかった。

「だって」

「俺は死に際まで受け取らないと言っただけだ」

「それは!…」

らしくなく途中で止められた言葉。

今日はらしくないことばかりだ。突然目の前に現れたり、こうして

言葉を断ち切ったり。理由を模索するうちに、そう言えばここはどこなのかと疑問に辿り着く。この暗さはどこかの室内だろうか。けれど家を出てからどこか建物へ入った覚えはないが…。

「君にはわからないよ」

考えを読んだかのようなタイミングで言われたそれに、思わずあいつをまじまじと見つめる。

辛そうな表情で、けれど屹と差し出された手。小さく震えるその手に握られているのはあの箱だろうか。

「これが！君をそこに引きとどめてるんだ…っ。これがないと君はどちらにも行けないんだよ。だから、お願いだから…っ」

小さく呟かれた声は届かなかった。けれどそれが何かなんて考えるまでもない。何故ならそれは幾度会っても飽きずに投げかけられる言葉だろうからだ。

泣き崩れ、蹲ったあいつを馬鹿だと思う。そんなあいつに執着し続ける俺の方がもっと愚かだ。それでも、

「何度言われても俺は俺を通すぜ」

あいつにとっては無情だろう言葉を、変えることなく投げ放つ。何度言い募られようと俺は同じ応えだけを返す。そんな俺に、あいつは決まって傷ついたような苦しいような、複雑な表情をする。そうしてしばらく口を噤んでは諾々と主張を呑み込むのだった。

それがこれまでの一種決め事のような流れのはずだった。

けれど。

本当に、らしくないことばかりだ。

俯くことなく、傷つくでもなく向けられたその表情は、なん、だ  
らうか。

「わかった」

静かに立ち上がったあいつは、引き寄せていた拳を再び差し出す。その目に映るのは、

「君が君を通すなら」

それは

「僕もそうさせてもらおう」

言葉と同時に開かれた掌からソレは勢いよく飛び立ち、俺を飲み込んで彼方へと飛んでいく。

「……っ！」

「さよなら、ときわ」

飲み込まれたまま駆けるソレに為す術はなく、もがいた所でその速度すら落とすことは叶わない。

さよなら、と。そう言ったあいつの表情も、その後囁かれた言葉の端も、意識をなくしつつあった俺には何一つ確かめることは出来なかった。

通い慣れた道も間が空けば息切れの一つもする。ましてろくに動くことすらしてなかった体なら尚更だ。

ゼイゼイ息を喘がせて、それでも止まることはせず俺は目的の場所へ向かう。杖をつきながら整地を施されていない道を歩くのに、再び多量の時間をかけた。

俺のしていることは無駄なのだろう。けれどそれがわかっていても尚、持て余すこの感情が俺を突き動かすのだ。

水が形を求めるように、枯渴した個が拠り所を求めるように、そうしないではいられないのだ。

還された感情ではない。これは、喪つて培った感情だ。

辺りは暗く足場の悪い道に何度も転倒するが、休むことなく歩き続ける。やがて見えてきた見覚えのある何の変哲もない景色に、けれど現実を目の当たりにして足を止めた。

毎日は叶わずとも、この日、このときだけは僅かながら約束された邂逅、だった。

「嘘つきはお前だ」

ゆっくりと、いつもあいつが立っていた辺りに向かう。

同じ場所に立って、あいつがしていたように空を見上げる。それでも俺にはあいつが何を見て、思って、感じていたのか、少しもわ

からなかった。

「あれから、嬉しいと感じたことなんて、一度だつてない……」  
埋まったはずの空洞は、新たに生まれた空虚へと塗りつぶされて  
行った。

いつか不変のものはないのだと思った。

かつて体感を経て達したその答えに、もしまた行き着いたとした  
ら。

そのとき、この空虚さえもが埋まるのだろうか。

あいつへの執着が断ち切れない俺には、まだその答えを、見つけ  
られない。

Tag)後書

2007/4/10)

x x x

喧騒から外れた薄暗い校舎の通気口に目的を見つけ、其の元へ歩を進める。

「ね、あっち行かないの」

「……」

「みんな待ってるしさ、行こうよ。ね」

「……」

無言。無言。…無言。

「ああもっ」

思わずこぼした歯がゆさにも、同じものが返る。

「あれで良かったって言ったじゃない。あんただって、今までよくやってきたじゃない。なのに何でそんな顔してるの」

無言。それは変わらず、ただ耳をふさぐように、視界をふさぐようにすべてを拒絶するのが雰囲気からわかる。

そう、わかる。わかってしまうのだ。それが私たちの全てで、それがなければワタシたちとは呼べなくなるから、嫌でも伝わる。

聞く耳がないとわかっていても、言わずにはいられず独り言のような虚しさを抱きながら、私は力もたない言霊を放つ。

「いつまでも同じようにはできなかつたって、あなたにもわかっていたでしょ。それに、あんただって望んでいたことじゃない。なのにいざ手放したらその様？」

落ちる無音は張り詰める。けれど私も、言わずにここにはいられないのだ。

「いいかげん、受け入れな。ずっとこうしてはいられないんだ」

「そんなことない」

返った言葉を、それでも私は否定しなければならぬ。

「ある。ここにいたら遠からず縛られてしまう。そうなったらあなたは別のものになっちゃうってわかってるでしょう？」

それでも、と返る言葉の続きを、私は知っている。いや、識っていた。

それは当然の言葉で、だれしもが縋りたく思う唯一の糸で。…けれど決してその先に光はないのだ。

だから私は言わなくてはいけない。その望みをこの瞬間に絶ち切つてやらねばならないのだ、この私が。それが其のためであり、彼のためであり、私の定められた勤めなのだ。

ひとつ息をのみ、彼の心をここから…いや、彼と彼を縛るものから切り取らねばならない。それが一番正しいことだとわかつてはいらぬ。けれど私はいつもこの瞬間が悲しくてならない。

彼らは彼らなりに大切なものがあり、想うものがあり、捨てられないものがあるのだと識っている。私もかつてそうだったように、彼らにとつてそれは抜け殻を捨てた今でも己を構成する細胞にすら感じるのだ。

それを捨てるとなれば、今となっては言葉通り、身を裂く痛みを味わう事と同じ。けれどそうしなければ私も彼も、己ではいられないのだ。

かつて私のものでもあつた痛みを追体験しながら、飲み込んだ息の代わりに、私はその残酷な言葉を解き放つた。

カレラのなれの果てを何度も見てきた。その中の一度、私が情に負けてしまった故に墮としてしまった想いへの贖罪のため、私は勤めに殉じている。

私たちは影送りされた残像のような存在だ。

切り離されたのはその姿形ではなくて、かつて己を構成していた感情そのもの。故に篤く脆く、頑迷なまでに己を貫く。けれどそれ故、渦巻きもすれば見失いもする、ひどく曖昧で不確かなしたたかさを併せ持つてもいた。

善きも悪しきも、私たちには想いだけが詰まっている。

だからこそ、彼は抱えてしまった箱の主に感化されてしまったの

だろう。失ってしまった私たちには、失う前のそれはあまりに強烈で鮮烈だ。

生きた想いに彼が何を感じたか、私にはわからない。

それを感じるために、私たちはまた一から始まりの光を追い始めるのだ。

だからどうかどうか、彼に、

「このえに優しい始まりがそそがれますよう」

留まるも逃げるも暗くあっても道の一つ。闇に隠れた光の道を灯すために、私は贖いの路を行く。

そして願わくば、彼の痛みの先端にいた者も、彼と同じ気持ちであつたことを…。

××××(後書き)

(2009/04/05)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3880r/>

---

短編集

2011年5月4日15時40分発行